

人文・自然・人間科学研究

第 43 号

2020 年 3 月

論文

- 高等学校世界史における「文化」の学習の可能性三木 健詞 (1)
- 英語の未来表現について：学習文法における記述を中心に渡辺 勉 (23)
- メタファー表現の文法レベルにおける制約
— 日本語の壁塗り構文を中心に —小野寺美智子 (49)
- スペイン語の母音長の一考察
— 母語話者の発話分析と長音を用いたカタカナ表記から —松本 旬子 (65)
- Diligence and Dissipation:
A Critique of Capitalism in Eugene O'Neill's *The Iceman Cometh*大森 裕二 (82)
- 普及福音教会と森鷗外「鈍一下」村上 祐紀 (1)

研究ノート

- クロスカントリーコースを用いたトレーニングが
ランニングフォームへ与える影響米重 修一 (97)
中雄 勇人

調査報告

- 山口中学校の英語教育に関する研究
— 外国人講師に焦点を当てて —保坂 芳男 (103)

-
- 退職教員の略歴・業績橋本 信 (122)
- 退職教員の略歴・業績マーティン メルドラム (124)
- 拓殖大学研究所紀要投稿規則 (127)
- 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領 (129)
-

高等学校世界史における「文化」の 学習の可能性

三 木 健 詞

Potential for “Culture” Learning on High School World History

Kenji MIKI

要 旨

高等学校世界史における「文化」について、近年の学習指導要領や同解説を分析した結果、多様性によって特徴づけられた「文化」が世界諸地域の一体化という枠組みのなかで複合化・重層化していく流れで位置付けられ、世界史学習に不可欠であることがわかった。現行版教科書の中には事項詰め込みの記述も多いが、冒頭での概観やコラムなどに「文化」の視点が表れている。次期改訂の「世界史探究」においてもこれまで以上に「文化」の位置付けが明瞭になることもわかり、最後の単元に設定された現代的課題の探究学習では、ESDの視点から「文化」に関する学習を構想し提案した。

キーワード：文化，文化圏，世界史，世界史探究，高等学校

I. はじめに

本稿のねらいは、高等学校の世界史における「文化」について、これまでの位置付けを明らかにするとともに、平成30年告示の新しい学習指導要領（以下、「平成30年版」のように告示年を明記して略記する。なお、学習指導要領の当該教科の解説書については、「平成30年版解説」のように略記する）の「世界史探究」ではどのような「文化」の学習が可能かを探ることにある。

「世界史探究」は、古代から現代までの世界を扱う3単位の新設の選択科目であるが、現行版の4単位科目「世界史B」とは異なり、緩やかな通時的構成をもとに主題学習を重視し、歴史的思考力の育成を目指そうとする。また、「平成30年版」においては、現行版に引き続き「伝統や文化に関する教育」の充実が求められており、教育課程全体で

のESD（持続可能な開発のための教育）の一層の推進も掲げられている。「世界史探究」では最終単元で「持続可能な社会の実現」に向けて現代的課題について探究する学習が重視されている。以上を踏まえて、世界史で事項暗記に偏りがちな「文化」の学習の可能性を考察しようとした。

II. 研究の内容・方法と「文化」の定義

世界史における「文化」の学習は日常的に行われているものの、関連する先行研究、実践研究は少ない。先行研究としては、原田（1999）が「平成元年版」まで行われてきた前近代の「文化圏」学習の意義を論じている。これは、「文化圏」学習の有効性を説く世界史学習論であるが、「平成11年版」以降では、児玉（2011）が学習指導要領の変遷を辿りながら「文化圏」に代わる「地域世界」の内容構成原理について考察している。どちらも本稿では参考にした。

また、ESDの視点から現代的課題を扱った研究として、佑岡（2018）が国立教育政策研究所の研究成果（2012）をもとに、ESDの求める理念や、多様性、公平性など6つの概念をもとにして、環境問題、人種・民族問題などの現代の諸課題を探究する主題学習を提案している。世界史学習全体を諸課題の主題学習として構成する試みは参考になる。また、山本（2016）は、戦後史学習においてボスニア紛争を取り上げ、共存、共生の方向性から平和構築、地域再生の課題を考えさせる実践を行い、国際バカロレアのプログラムの概念を活用した学習の有効性を検証している⁽¹⁾。

本稿では、これらの成果に学びつつ、研究の内容と方法を次のように設定した。

- (1) 過去の改訂にも触れながら、主に「平成11年版」以降の「世界史A・B」における内容構成から見た「文化」の位置付けを、学習指導要領、同解説の分析から明らかにするとともに、その特徴が主たる教材である教科書、現行の「平成21年版」教科書⁽²⁾にどのように反映されているかを検証する。
- (2) 「平成30年版」の「世界史探究」の学習における「文化」の位置付けを学習指導要領、同解説の分析から明らかにする。そのうえで、(1)の成果や「文化」をめぐる近年の動向を踏まえつつ、「世界史探究」において、「文化」に関わる現代的課題をESDの視点も踏まえてどのように扱うことができるかを提案する。

最後に、「文化」の定義を示す。本稿で学習指導要領上の「文化」の位置付けを検討することが、まさに「文化」の定義を問うことになるうえに、「文化」も極めて多義的に使われる⁽³⁾。そこで、文化人類学での一般的な理解やユネスコの「文化的多様性に関する世界宣言（2001年）」に見られる定義も参考にして（三木 2019）、以下の通りとした。

文化とは、人間が自然との関わりのなかで形成し、特定の社会集団で共有される言語、芸術・学問、技術、宗教をはじめ、暮らし、生活・行動様式や価値観の総体である⁽⁴⁾。

表1 高等学校学習指導要領の世界史・世界史Bの目標の変遷

昭和53年版	[世界史] 世界の歴史に関する基本的事項を理解させ、歴史的思考力を培うとともに、現代世界形成の歴史的過程と世界の歴史における各文化圏の特色を把握させて、国際社会に生きる日本人としての資質を養う。
平成元年版	[世界史B] 現代世界の形成の歴史的過程と世界の歴史における各文化圏の特色について理解させ、文化の多様性・複合性や相互交流を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う。
平成11年版	[世界史B] 世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。
平成21年版	[世界史B] 世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。
平成30年版	[世界史探究] 社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解するとともに、諸資料から世界の歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。 (2) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現代世界とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。 (3) 世界の歴史の大きな枠組みと展開に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に主体的に探究しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の歴史に対する愛情、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

[筆者作成]

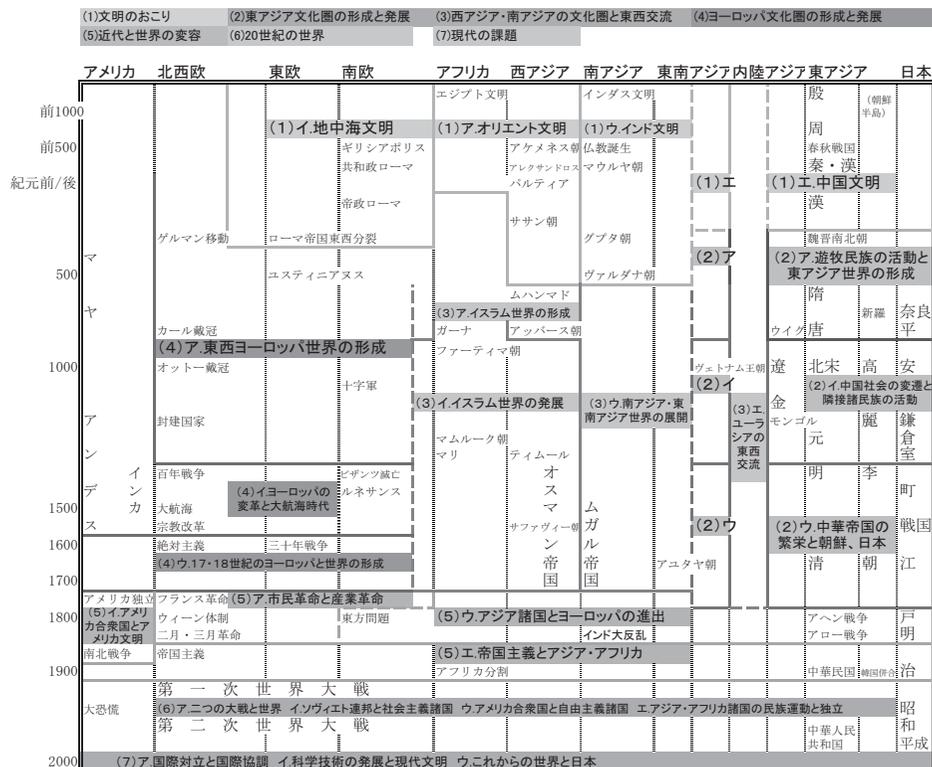
Ⅲ. 現行版までの学習指導要領に見る世界史における「文化」

本節では、世界史における「文化」の位置付けを、学習指導要領の目標や内容構成から探りたい。まず表1からは、「世界史」「世界史B」の目標に「平成21年版」まで一貫して目標に「文化」の用語が見出される。しかも、「文化圏」、「文化の多様性」など

の表現で、科目の核心的内容である「現代世界の形成の歴史的過程」、「世界の歴史の大きな枠組みと展開」と不可分に扱われていることがわかる。

一方、表1では割愛したが、近現代史を中心とする「世界史A」の目標には、「平成元年版」から「平成21年版」まで「文化」の用語はない。しかし、地理歴史科の教科目標は、いずれも「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め」となっており、「生活・文化」は「歴史的内容にもかかわる」と明記されている。「文化」は、「世界史A・B」ともに、国際社会に生きる日本人あるいは日本国民に必要な国際的資質の育成に不可欠ととらえられてきた。

次に、内容構成から「文化」を見ていく。縦にも長く横にも広い「世界史」「世界史B」の内容構成は、「平成元年版」までは「文化圏」、「平成11年版」からは「地域世界」という地域概念で区分されてきた。「文化圏」は「昭和45年版」から登場し、「言語、宗教、思想、政治、経済及び生活様式などの面での地域的なまとまり」として、自然条件にも規定され、「地域性、民族性及び歴史性によって培われた共通文化要素をもつ空間領域」（「昭和53年版解説」：106-107）と説明される。3つの「文化圏」の下限は、「平成元年版」になると、図1のように18世紀まで下がっていく。

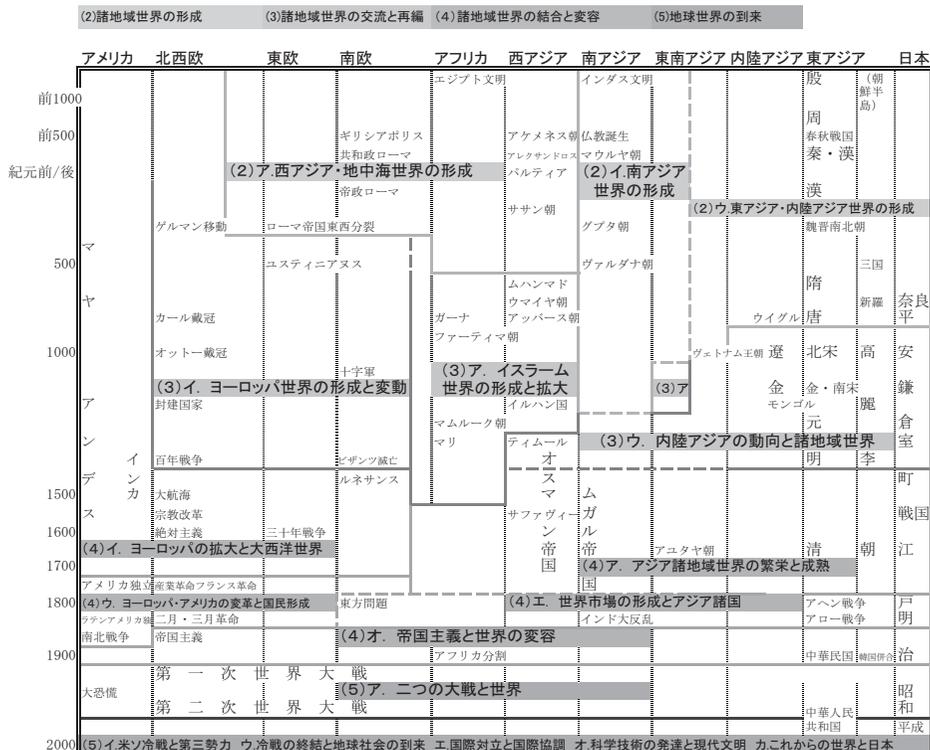


[筆者作成]

図1 「平成元年版」世界史Bの内容構成図（大項目・中項目）

これに対して、「平成 11 年版」「平成 21 年版」の「地域世界」は、「時間的なスケールのとり方，同時代史的な横のつながりの重視」（「平成 11 年版解説」：45）の点で、「文化圏」とは異なる。換言すれば，政治システムや交易ネットワークに比重を置き，時代により範囲を伸縮させる柔軟性をもつ歴史的な概念という特徴をもつ（佐伯・原田・澁澤・朝倉 2000：51）。図 2 に見るように，古代の西アジア・地中海世界，10-13 世紀の内陸アジア世界など，各時期に最も重要な役割を果たしたプレーヤーに注目して，動態的に時代をとらえていくのである。こうして，世界史全体を，諸地域世界の形成から交流と再編，結合と変容を経て一体化を強め，「地球世界の形成」にいたる「大きな枠組みと展開」として提示した。

それぞれの地域概念で構成される「世界史」「世界史 B」では，「文化」はどのように位置付けられるのだろうか。第一は，多様性で表される共通点である。「文化圏」では，政治，経済まで含む広義の「文化」を設定しているが，そのなかで「風土，生活，文化に着目させる」（「平成元年版解説」：85）とあるように，生活・文化を中心とする異文化理解が求められていた。「地域世界」でも，前近代において「地域の風土を生かした人々の生活や文化，信仰に触れ」（「平成 11 年版解説」：76）るとあり，ねらいは共通し



*「(1) 世界史への扉」は除く。

[筆者作成]

図 2 「平成 21 年版」世界史 B の内容構成図 (大項目・中項目)*

ている。表1の「世界史」「世界史B」の目標に共通して見られる「文化の多様性」は、これら地域概念の設定に通底しているといえる。

第二は、変化や混濁性で表される相違点である。図1、図2で両者を比較すれば、「文化圏」は静態的、「地域世界」はより動態的であることが読みとれる。もちろん「平成元年版」までにあっても、「文化圏」間の文化交流の項目は設定されており⁶⁾、主題学習として宗教など文化の比較研究学習も可能だったとの指摘（兎玉 前掲：6）もある。しかし、「文化圏」における「文化」は、固定的にとらえる面が強い。これに対して、「地域世界」における「文化」は、変わっていくものとして理解される。「地域世界」の解体や形成のなかで、多様な文化が出会い、混濁して新しいものになっていくといった構築主義的な面が強い。

ここで「イスラーム世界の文化」を例に挙げてみる。現行版「世界史B」の教科書の記述は、どれもほぼ同じである。「イスラーム世界が形成されると、イスラームの枠組みの中にギリシア・ローマ文化やペルシア文化が融合した独自のイスラーム文化が生み出されていった」（「平成21年版」の「帝国版」）。この記述を「文化圏」の枠組みでとらえるのは、「文化」の融合性が理解されにくい。上記の文に「地域世界」の動きを補うと、「西アジア・地中海世界が解体し、間隙にあったアラビア半島からイスラーム勢力が拡大し、商業活動に加えて巡礼と学問のネットワークを形成して新しいイスラーム世界のもとで融合文化が創り出された」となり、「文化」がとらえやすい。

このように、動態的な「地域世界」においては、政治や経済の動きとも関連しながら「文化」は変わっていくもの、「文化の多様性」は多様な文化の並列的なのではなく、相互の接触・交流に伴って新しい価値を生み出すものとする考え方が読みとれる。表1の「世界史B」の目標に記載される「文化の複合性」も、こうした枠組みでとらえると諒解しやすいと考える。

しかし、「文化圏」学習が、領域の固定性に固執せず、異文化としての過去をとらえ、歴史を構造的に把握する学習論として有効であると説く原田（前掲 1999）の指摘には説得力がある。原田は、「文化圏」の特質を、前近代の世界で形成された地域システム（歴史性）であると同時に、現在も有効な世界の諸地域の生活・文化を規制する意味のシステム（現在性）であるとした。南アジアのカースト制度の形成過程を辿りながら、現在のカースト差別を、日本の差別問題にも関連付けてとらえさせる学習例を挙げて、世界史における異文化としての過去の理解が、現在を生きる生徒自身の自文化理解に帰着するとした点で、原田の指摘はなお有効なのではないか。「平成11年版」「平成21年版」の世界史Bの目標に記された「世界の歴史の大きな枠組みと展開」の行き着く先は、「諸地域世界」が結び付きを強めて一体化してきた私たちの生きる現代世界、地球世界である。「文化」もまた、この枠組みのなかで理解される必要があると考える。

最後に、一体化のすすんだ近現代における「文化」に関わる事項について探ってみる。「平成11年版」以降、「地域世界」をもとにした「世界の歴史の大きな枠組みと展開」のなかで、「文化」の位置付けはより明確になる。「平成21年版」の20世紀前半までの時代で、「文化」について明記された事例は、「17～18世紀のヨーロッパ文化」などを除くと、政治、経済などと不可分の項目が多い。「(4) 諸地域世界の結合と変容」では、①ヨーロッパ人の進出に伴うアメリカ先住民社会の変容、アメリカ合衆国の移民、奴隷制、人種・民族問題、②ヨーロッパにおける国民国家の形成、③世界市場の形成に伴うヨーロッパのアジアへの影響、西・南アジアでのイスラームやヒンドゥー教の原初や伝統に復帰しようとする動き、が挙げられる。また、「(5) 地球世界の到来」では、④帝国主義の時代の移住や移民労働者、⑤20世紀前半の大衆社会の出現、⑥二度の世界大戦後の民族運動などが示された。

これらを「文化」の視点から見ると、①、④は人の移動に伴う強制的な文化の否定、文化摩擦・衝突と変容を、②は文化の統合と排除の問題を扱っている。また、③は外圧に抵抗するための伝統・文化の創造や文化変容⁶⁾に、⑥も抵抗の拠り所としての文化の統合と排除の問題に関わってくる。以上からは、「文化」が「諸地域世界の結合と変容」に表される世界の一体化、それも支配・従属の構造化とともに変化を遂げていくことが読みとれる。これは、近代以降の「文化の複合性」「重層性」にかかわる特徴でもあり、人々の共生・共存の方向性を考える今日的課題にもつながる。科学技術の発達を背景に誕生した大衆文化を扱う⑤とともに、現代世界の私たちの生き方に関わる「文化」の現在性が問われていると考えることができる。

IV. 現行版世界史教科書から見た「文化」

前節では、学習指導要領の分析から「世界史」「世界史B」において「文化」の学習が重視されてきたことを明らかにした。そこで、前節で明らかになった「文化」の扱いが、主たる教材である教科書、現行版教科書の記述にどのように反映されているかを「世界史B」を中心に分析する。

(1) 「世界史B」の前近代では、本文で大きな流れはつかみにくいが、「諸地域世界の形成」を概観するページや特設ページ、コラムに宗教など「文化」に関する記述が多い。

全体の章構成は、どれも「平成21年版」(図1)に沿っているが、アフリカ世界、アメリカ世界などを加えたり、大項目の名称を「諸地域世界の形成と交流」、「海洋による世界の一体化」、「地球社会形成の模索」(帝国版)としたりするなどの独自色も窺える。個別の「地域世界」はそれぞれ独立した章とされ、ほとんどの教科書が冒頭で地形図などを掲載して当該世界の地理的環境、農業や生活・文化の特色、歴史的特質などを概観

している。冒頭ページでは、「文化の多様性」を理解することはある程度できるが、本文は通史形式で細部にわたる事項の詰め込みの様相を呈しており、ねらいは達成されにくい。他方で、どの教科書も現代や日本との関わり、女性の活動などをシリーズにして特設ページやコラム欄を多数配しており、このなかには文化交流や宗教を扱う「文化」に関する項目も多い。宗教については、教義の概説だけでなく、男女平等の社会問題（山川 A 版）、インドの神々を源流とする七福神（実教版ほか）を取り上げるなど、本文には書き込めないが、生徒の生き方にも関わる視点を提供する記述もある。

しかし、動的な「地域世界」の動向を背景にした「変わる文化」の性格を読みとるのは難しい。ただ、ここでも冒頭の概説などではねらいがつかめる以下のような記述も見られる。「ゲルマン、アラブ、モンゴルなどの大移動によって諸地域の交流と再編がすすみ、キリスト教、イスラーム、儒教がそれぞれの地域世界の社会のきずなとなり、文化の核となっていく」（東書 A 版）。今後は、教科書記述で、細かな事項解説の迷路に分け入る学習にならないよう工夫がさらに必要となろう。

(2) 「世界史 A」の前近代部分では、図版、宗教に関する特設ページを多く配し、各地域（世界）の特質が「世界史 B」よりわかりやすくなっている。

「世界史 A」の前近代部分は、表 2 でわかるように扱いのウェイトが軽い。その前近代部分については、「平成元年版」「平成 11 年版」とも諸文明や諸地域世界の「形成」ではなく、「歴史的特質」を把握することがねらいとなっている。「平成 11 年版」の

表 2 学習指導要領の大項目の配列の変遷

時代区分 告示年	古代	中世	近世	近代	現代
「昭和 53 年版」 世界史	文明の 起こり	⇒ 3 文化圏の形成と発展	⇒ 19 世紀の世界	⇒ 両大戦間の 世界	⇒ 今日の世界 と日本
「平成元年版」	文明の 起こり	⇒ 3 文化圏の形成と発展	⇒ 近代と 世界の変容	⇒ 20 世紀の 世界	⇒ 現代の課題
「平成 11 年版」 世界史 B	諸地域世界の 形成	⇒ 諸地域世界の 交流と再編	⇒ 諸地域世界の 結合と変容	⇒ 地球世界の形成	
「平成 21 年版」 世界史 B	諸地域世界の 形成	⇒ 諸地域世界の 交流と再編	⇒ 諸地域世界の 結合と変容	⇒ 地球世界の到来	
「平成 30 年版」 世界史探究	諸地域の歴史的 特質の形成	⇒ 諸地域の 交流・再編	⇒ 諸地域世界の 結合と変容	⇒ 地球世界の 課題	
「平成元年版」 世界史 A	諸文明の歴史的 特質（一部近代も含む）	⇒ 諸文明の 接触と交流（2-17・18 世紀）	⇒ 19 世紀の世界 の形成と展開	⇒ 現代世界と日本	
「平成 11 年版」 世界史 A	諸地域世界と 交流圏	⇒ 一体化する 世界	⇒ 現代の世界と 日本		
「平成 21 年版」 世界史 A		世界の一体化と 日本（「ユーラシアの 諸文明」含む）	⇒ 地球社会と 日本		

(注) 「平成 11 年版」以降の「導入単元」は省略した。時代区分は筆者の判断による。 [筆者作成]

「世界史 A」では、「(1) 諸地域世界と交流圏」においてユーラシアの諸地域世界の歴史的特質を把握させ、それらが「現代諸地域の社会・文化の基盤となっていることに気付かせる」と明記されている（「平成 11 年版解説」p.15）。さらに「平成 21 年版」では、前近代部分は表 2 の通り、大項目「(2) 世界の一体化と日本」の冒頭「ユーラシアの諸文明」に収められ、学習の導入としての性格を強調されたが、ここでも「諸文明⁷⁾ の特質を、自然環境、生活、宗教などに着目させながら、近現代世界に大きな影響を与えている事項を中心に」とらえる、とされた（「平成 21 年版解説」p.18）。これを受けて、東アジアでは漢字文化、儒教、中国を中心とする国際体制、南アジア（世界）では仏教とヒンドゥー教、カースト制度などが例示されている。そこで、現行版「世界史 A」教科書の前近代部分を調べると、次のような点が明らかになる。

第一は、各地域（世界）の自然環境や生活・文化、とくに宗教に関する内容について、本文よりも地図や写真などビジュアルな資料を大きく配して、「文化の多様性」、現代世界にも息づく「文化」をイメージできる構成になっていることである。アフリカの「サヴァナの音の世界」（実教版）は、文字に頼る文化を相対化する事例でもある。これらを、各地域の冒頭ページ、特設ページで本文以上のスペースを配当し、また特設ページで文化交流や文化比較を取り上げる教科書もある。「陶磁器の道」（実教版）、「紙と印刷」（清水版）、「印章とサインの文化」（第一版）などが代表例である。

第二は、本文については、各地域（世界）の歴史的特質に関する記述の明快さに差があることである。「南アジア」を例に本文の小見出しを挙げると、「ヒンドゥー文化と仏教文化の形成」「イスラーム文化の浸透」といった構成もある（東書版）一方で、古代王朝の興亡史の域を出ない事項詰め込み形式の教科書も見られる。南アジアの特質としてのカースト制度やヒンドゥー教の形成について本文に記述できないために図版に頼る構成は、かえって学習者の理解を妨げる可能性もあり、今後の改善が求められる。

(3) 「世界史 B」の近現代部分では、「平成 21 年版」に示された項目にこだわらずに、コラムを中心に現代的課題にも通じるテーマ内容を配している。

前節で「平成 21 年版解説」から取り出した 6 点に関わる記述傾向に絞ってみると、次のことが明らかになる。第一に、④帝国主義の時代の移住や移民、⑤大衆社会、⑥世界大戦後の民族運動に関しては、本文にも一定の記述があるが、①ヨーロッパ人のアメリカ進出に伴う動向、②ヨーロッパ国民国家の形成、③ヨーロッパの進出に対するアジアの文化的抵抗などの項目は簡潔な説明的記述に留まっている。とくに②ヨーロッパ国民国家の形成については、二月革命、ドイツ・イタリアの統一といった 19 世紀ヨーロッパの単元で「国民国家」という用語は登場するが、説明は極めて簡潔なものが多い。「国民意識をもった平等な市民が国家を形成するという『国民国家』」（山川 C 版）といった記述はフランス革命が生み出した国民国家の性格を表しているが、この記述だけでは、

国民国家の形成と民族問題の関係を理解するのは困難である。「文化」などの共通性をもつとみなす共同体としての国民国家の統合性と排他性に触れないと、20世紀末に頻発する民族紛争などの問題を遡って探る手立てにならない。

ただ、例外的にほとんどの教科書(6点)で取り上げているのが「植民地支配と人種主義」である。ここでは、社会進化論が内包する「劣等と見なされた民族・人種への迫害を正当化する論理」(帝国版)や、帝国主義の時代の人種主義、移民差別などについて触れられる。万国博覧会での植民地展示(東書A版)や、ユダヤ人差別の問題を取り上げた教科書もあったが、国民統合に貢献した学校教育と関連付けた記述はない。しかし、ヨーロッパの人々が無意識のうちに優越に浸る時代の雰囲気、科学主義と植民地主義を背景に創り出されたことへの気付きは、「地球世界の到来」の学習にとって重要であると考えられる。

第二に、本文記述とは対照的に、テーマ別コラムで「文化」の視点から時代を読み解く工夫がみられる教科書もある。③に関連して、「イギリスのインド支配と宗教・カーストの固定化」(実教版)では、イギリスが統治上国勢調査で宗教とジャーティーを固定したために、従来相互浸透の動きもあった宗教が分断されたことが記述される。また、さきの「植民地支配と人種主義」に関わって「アジアの近代とオリエンタリズム」を取り上げた教科書(東書B版)では、植民地支配が終焉したのちも、アジアが欧米諸国に従属する構造が広い意味の文化面でも継続した例としてオリエンタリズムを挙げ、アジアの現在への影響を記述する。さらに、⑥に関連して、「旧宗主国によるアフリカへの軍事介入」(帝国版)では、植民地時代に地域・宗教・民族対立を煽って分断を図った旧宗主国が、独立後も内戦に軍事介入する要因として経済的利権の確保などがあると記述する。これらは、植民地主義の現在性を「文化」との関わりで考えさせる視点が提供されている。

このように、本文では書きにくい事例をコラムにして、「諸地域世界の結合と変容」がすすむ時代における文化摩擦、文化変容、統合と排除などの「文化」に関わる問題を取り上げることには意味があると考えられる。ただ、「世界史B」の教科書が目指すはずの「歴史の大きな枠組みと展開」の本文記述に、こうした「文化」の視点を取り込む工夫が必要である。また、「平成30年版」を念頭に、コラムも単なる読み物ではなく、問いかけを設定した課題追究学習の形式への改善が求められよう。

V. 「世界史探究」における「文化」

「平成30年版」は、予測不能な変化の激しい社会を生きる子供たちの資質・能力の育成を掲げて、とくに高等学校の教科・科目の構成を大幅に見直した。「世界史B」の事

実上の後継で、新たな選択科目である「世界史探究」でも、表1の目標にある通り、歴史的な見方・考え方を働かせて、課題追究・解決学習を通じて公民としての資質・能力を育成する。その学習は、時間軸に力点を置いて問いを立て、時期、推移、比較、関連、現代世界とのつながりに着目して考察したり、解決にむけて構想したりするもので、「事項暗記型」学習からの決別を図ろうとする。目指すのは、生徒自身が問いを立てて考察、構想する「探究」である。ただ、学習対象となる内容は、「世界の歴史の大きな枠組みと展開」に関わる諸事象であり、「平成21年版」と変わりはない。

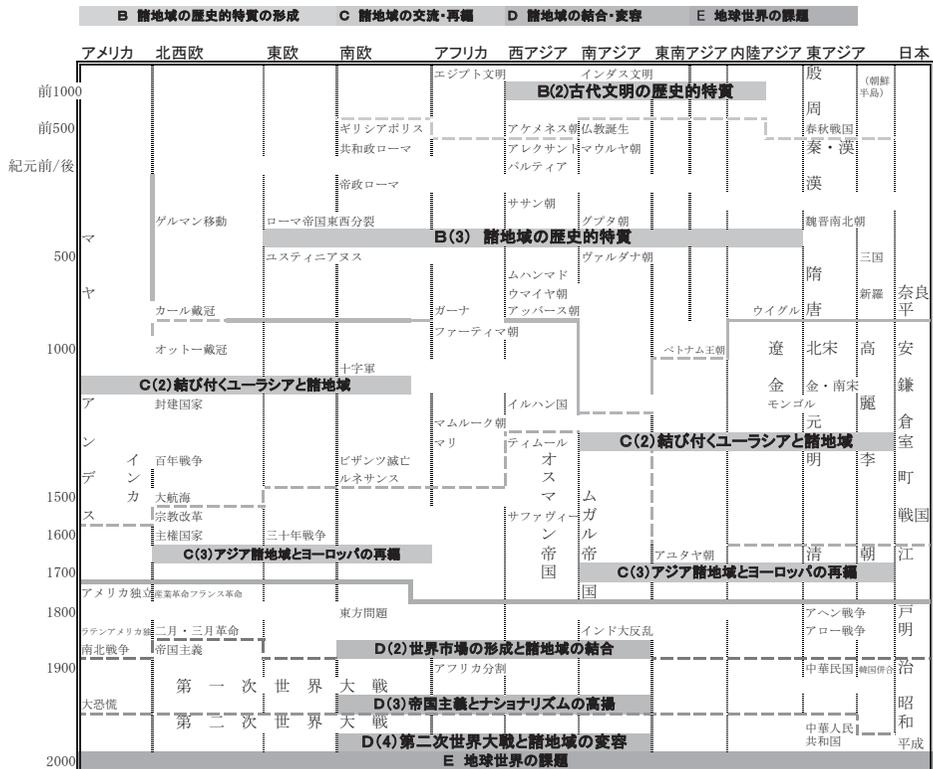
では、「平成30年版」「世界史探究」において「文化」はどのように位置付けられているのか。注目すべきは、表2で見えるように「世界の歴史の大きな枠組みと展開」を構成する地域概念であった「地域世界」を「地域」に変更し、世界史全体を、諸「地域」の交流・再編、結合・変容から地球世界の形成へと向かうプロセスでとらえた点である。「平成30年版解説」では、「諸地域」は「一定のまとまりをもってはいるものの、独自の固定的な世界」ではない「流動的なもの」と説明される(p.272)。この緩やかなまとまりとしての「地域」には、東アジア、中央ユーラシア、南アジア、東南アジア、西アジア、地中海周辺、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカなどが含まれている。

「諸地域世界」を「諸地域」に変更した背景は、「平成30年版」の基本方針から次のように考えることができる。すなわち、予め決められた「地域世界」の動きを軸にして世界史全体を法則のようにとらえると、問いを立てて考察、構想する学習が制約される恐れがある。また、単位数の1単位削減のため、4単位用に設定された現行版の学習から内容構成の前提を見直す必要があったことも想定される。

そのうえで、大項目・中項目を全体構成に配した図3を現行版の図2と比較すると、次の点が明らかになる。「平成30年版」に記載された内容項目、「文化」に関する項目を抽出した表3、表4も併せて参照されたい。

- ① 大項目Bが、フランク王国のヨーロッパ、イスラームの西アジアを含んでおり、タイトルも、諸地域の「形成」ではなく「歴史的特質の形成」と表現された。
- ② 大項目Cの「交流と再編」の下限が、アジア諸帝国の繁栄や大航海以後のヨーロッパ主権国家の形成まで下がった。
- ③ 大項目Dの「結合と変容」が、産業革命から始まり第二次世界大戦終結後の1950年代までとなり、現行版の「地球世界の到来」部分を広く含むようになった。
- ④ 大項目Eが、1970年代以降を扱い、「地球世界の到来」ではなく、「地球世界の課題」と表現された。

この枠組みの特徴をもとに、世界史において「文化」の位置付けがどう変わるのかを考察したい。第一は、①の「B 諸地域の歴史的特質の形成」に関する点である。「平成30年版」の記述からは、歴史的特質として宗教、文化・思想などの「文化」が扱わ



*「A 世界史へのまなざし」は除く。 [筆者作成]

図3 「平成30年版」世界史探究の内容構成図 (大項目・中項目の一部)*

れており、「自然環境と人類との活動の関わりの中で、歴史的に形成された諸地域」が、地理的な地域概念ではないことが読みとれる。ここからは、「歴史的特質」が、前項で触れた「平成11年版」「世界史A」の「(1) 諸地域世界と交流圏」に明瞭に示され、「平成21年版」「世界史A」にもほぼ継承された「今日の世界諸地域における社会・文化の重要な基盤」(「平成11年版解説」p.15)を指しているといえよう。表3、表4を見ると、大項目Bでは宗教に関する項目が多いが、この時代に形成された各地域の「文化」の多様性が、現代世界の基盤になっていると気付かせるねらいがあるものと考えられる。

第二は、②の「C 交流と再編」の下限が下がった点についてである。これにより、モンゴル帝国とヨーロッパの大航海が同じ括りで扱われることになる。近年のグローバルヒストリー研究(秋田2019:3-5)で「初期グローバル化」の源流とされるモンゴル帝国のもとでの多宗教共存、東西文化交流とともに、「コロンブスの交換」などが同時代の新たな「文化」を生み出していく動きと理解される。このように「交流と再編」を広く、長く設定することによって、「文化」の「複合性」「重層性」が強調されるものと考えられる。③とも関連して、西欧中心史観を相対化することにもつながる試みといえ

表3 「平成30年版」の「世界史探究」に記載された「文化」

大項目	中項目	扱う内容項目	文化に関連する項目	
A 世界史へのまなざし	地球環境から見る人類の歴史	人類の誕生，地球規模での拡散・移動（人類の歴史と地球環境との関わり）		
	日常生活から見る世界の歴史	衣食住，家族，教育，余暇など身の回りの諸事象（日常生活の世界の歴史とのつながり）		
B 諸地域の歴史的特質の形成	諸地域の歴史的特質への問い	（生業，身分・階級，王権，文化・思想などに関する資料を活用して課題を追究・解決する活動）		
	古代文明の歴史的特質	オリエント文明，インダス文明，中華文明	自然環境と生活・文化，六十進法や暦（オリエント），バラモン教とヴァルナ制度，漢字の起源	
	諸地域の歴史的特質	秦・漢と遊牧国家，唐と近隣諸国の動向	諸子百家，儒教・道教の誕生，東アジアへの仏教伝来，中央ユーラシアへのトルコ系言語・文化の広がり，イスラームの受容	
		仏教の成立とヒンドゥー教，南アジアと東南アジアの諸国家	仏教の成立，ヒンドゥー教とカースト制度，インド北部文化の南部への広がり，東南アジアへの南アジアや東アジアからの影響	
西アジアと地中海周辺の諸国家，キリスト教とイスラームの成立とそれらを基盤とした国家の形成		ササン朝のイラン文化と伝播，地中海東部でのギリシャ文化形成と西アジア・ローマへの伝播，ビザンツ帝国のギリシャ化，西ヨーロッパ世界のキリスト教化，イスラームの成立，イスラーム法に基づく国家体制（アッバース朝），ギリシャ文化とイラン文化の上に癒合したイスラーム文化		
C 諸地域の交流・再編	諸地域の交流・再編への問い	（交易の拡大，都市の発達，国家体制の変化，宗教や科学・技術及び文化・思想の伝播などに関する資料を活用して課題を追究・解決する活動）		
	結び付くユーラシアと諸地域	西アジア社会の動向とアフリカ・アジアへのイスラームの伝播，ヨーロッパ封建社会とその展開，宋の社会とモンゴル帝国の拡大	アッバース朝衰退後のムスリムの連携の維持やアフリカ・アジアへのイスラーム伝播（ムスリム商人とスーフィー教団），中世ヨーロッパのキリスト教会や修道院，宋代の文化，モンゴルの交流，日本との仏教僧の交流	
		アジア海域での交易の交流，明と日本・朝鮮の動向，スペインとポルトガルの活動	ヨーロッパ人のアメリカ大陸進出と先住民社会の変容	
	アジア地域とヨーロッパの再編	西アジアや南アジアの諸帝国，清と日本・朝鮮などの動向	オスマン帝国・サファヴィー朝・ムガル帝国の相互交流と支配地域の宗教的，民族的多様性の容認，イスラーム法による柔軟な統治	
宗教改革とヨーロッパ諸国の抗争，大西洋三角貿易の展開，科学革命と啓蒙思想		清による各地の宗教・文化・伝統を尊重した多民族統治，両班の朱子学に基づく統治（朝鮮），東南アジアの現在につながる地理的，文化的枠組みの形成，宗教改革とカトリックの布教，アフリカ地域社会の崩壊，科学革命と人間の思考法への影響（経験論，演繹法，合理論，国際法，社会契約論），啓蒙思想と社会改革		

表4 「平成30年版」の「世界史探究」における「文化」(続)

大項目	中項目	扱う内容項目	文化に関連する項目
D 諸地域の結合・変容	諸地域の結合・変容への問い	(人々の国際的な移動, 自由貿易の広がり, マスメディアの発達, 国際規範の変容, 科学・技術の発達, 文化・思想の展開などに関する資料を活用して課題を追究・解決する活動)	
	世界市場の形成と諸地域の結合	産業革命と環大西洋革命, 自由主義とナショナリズム, 南北戦争の展開	西ヨーロッパとアメリカ合衆国に近代民主主義社会の成立, ヨーロッパの自由主義とナショナリズムの高まりと国民国家の形成, 社会主義思想の広まり, ロマン主義
		国際的な分業体制と労働力の移動, イギリスを中心とした自由貿易体制, アジア諸国の植民地化と諸改革	ヨーロッパからアメリカ・オセアニアへの移住, 中国や南アジアからの移民労働者, 日本からの移民, イギリスの国際公共財(電信, 基軸通貨, 決済システム, 国際標準時, 国際法, 英語)の従属地域での利用, アジア諸国の抵抗・諸改革・民族意識の形成と伝統文化の変化
	帝国主義とナショナリズムの高揚	第二次産業革命と帝国主義諸国間の抗争, アジア諸国の変革	世界分割とナショナリズムの高まり, 最新の科学技術と第二次産業革命, アジア諸国の変革での西欧型教育経験者の活躍
		第一次世界大戦とロシア革命, ヴェルサイユ・ワシントン体制の形成, アメリカ合衆国の台頭, アジア・アフリカの動向とナショナリズム	ロシア革命とソ連邦の誕生とイデオロギー, 国際諸機関の設立, アジア・アフリカのナショナリズム, アメリカ合衆国の大量生産・大量消費の生活様式と大衆社会の出現
	第二次世界大戦と諸地域の変容	世界恐慌とファシズムの動向, ヴェルサイユ・ワシントン体制の動揺	ファシズムの動向
第二次世界大戦の展開と大戦後の国際秩序, 冷戦とアジア諸国の独立の始まり		第二次世界大戦の被害(科学技術の進歩), 世界人権宣言	
E 地球世界の課題	国際機構の形成と平和への模索	集団安全保障と冷戦の展開, アジア・アフリカ諸国の独立と地域連携の動き, 平和共存と多極化の進展, 冷戦の終結と地域紛争の頻発	国際機構による紛争解決, AA 諸国の独立と地域連携, 戦争など対立への市民の抗議, 地域紛争解決への取組, 人間の安全保障, ヨーロッパ諸国の難民・移民の受け入れ
	経済のグローバル化と格差の是正	先進国の経済成長と南北問題, アメリカ合衆国の覇権の動揺, 資源ナショナリズムの動きと産業構造の転換, アジア・ラテンアメリカ諸国の経済成長と南南問題, 経済のグローバル化	情報・通信技術の革新に伴う経済のグローバル化
	科学技術の高度化と知識基盤社会	原子力の利用や宇宙探査などの科学技術, 医療技術・バイオテクノロジーと生命倫理, 人工知能と労働の在り方の変容, 情報通信技術の発達と知識の普及	軍民両用の原子力・宇宙探査の人類にとっての二面性, 医療技術とバイオの進展と生命倫理の問題, 人工知能やオートメーション化などと労働形態の変化, 情報化・知識のグローバル化
	地球世界の課題の探究	課題探究学習: ①紛争解決や共生, ②経済格差の是正や経済発展, ③科学技術の発展や文化の変容	(例) ③「科学技術の発達が歴史上もたらしてきた光と影を見たとき, これから人類はどのように科学との関係を考えるべきか」

※「平成30年版解説地理歴史編」の記述から関連項目を抜粋した。

[筆者作成]

るが、一方で「コロンブス」以降の植民地主義が曖昧になる恐れもある。

第三は、③の「D 結合と変容」に関する点である。大項目の始期は18世紀末の産業革命期以降となって「世界市場の形成」とリンクし、終期は第二次世界大戦後の脱植民地化の開始期まで下がった。これは、支配と従属を伴う世界の諸地域の構造化をより明瞭に理解できる妥当な設定であると考えられる。また表4では、新たに登場した「イギリスの国際公共財の従属地域での利用」はイギリスの「ソフトパワー」として文化面の働きを表している（秋田 前掲：203-207）。「アジア諸国の変革での西欧型教育経験者の活躍」も、文化変容の問題として扱うことができる。このように、同時期の文化摩擦、文化変容、統合と排除といった「文化」の「複合性」「重層性」の問題も、より明確に位置付けられる。

以上から、「文化」は、「諸地域」のもとでも現行版とほぼ同じように、あるいは現行版以上に明瞭に位置付けられていると考える。

VI. 「平成30年版」「世界史探究」における現代的課題と「文化」の学習

本節では、「平成30年版」の最後の大きな項目について取り上げたい。表4でも明らかなように、大項目Eのタイトルは「地球世界の形成」ではなく、「地球世界の課題の形成」である。地球世界の課題を理解したうえで、「(4) 地球世界の課題の探究」において、生徒自身が主題を設定して探究する学習を行う。「課題の探究」は、生徒が持続可能な社会の実現を見据えて、ESDの視点から課題解決を図る科目の総まとめにあたるものである。

世界史においては、従前から学習指導要領の最後の大きな項目で現代的課題が扱われてきた。そのウェイトは改訂の度に大きくなり、「平成21年版」では、「世界史A・B」とも最後の大きな項目で、「持続可能な社会を展望」するように生徒が地球世界の課題を設定し、資料を活用して探究する主題学習が求められた。しかし、「平成21年版」の教科書を見ると、課題探究の学習例は「世界史A」には示されている⁶⁾が、「世界史B」には示されていないのが現状である（三木 2018）。

「地球世界の課題」については、「平成21年版」「世界史B」では「紛争の解決と平和の問題、食糧・人口問題、資源・エネルギー問題、地球環境問題」（「同解説」p.47）などが例示されていたが、「平成30年版」「世界史探究」では3つに絞られた。表4にある通り、「①紛争解決や共生、②経済格差の是正や経済発展、③科学技術の発展や文化の変容」である。このうち、「文化」はどのように扱われてきたのだろうか。

「世界史」「世界史B」においては、「平成元年版」「平成11年版」の最後の大きな項目で、「文化」は科学技術あるいは人種・民族問題と関連して設定されてきた。しかし、「平成21年版」になると、「(5) 地球世界の到来」の中項目「グローバル化した世界」に、中

教審答申に示された「知識基盤社会」が新たな時代の変化を表す用語として登場する一方で、人種・民族問題の記述は消え、地域紛争として括られていく。「平成30年版」でも、「E 地球世界の課題」に人種・民族問題の表記はなく、中東などからの難民・移民の受け入れをめぐるヨーロッパの課題が付記された。人種・民族問題が消えた一因には、近年の研究で人種を民族と併記することへの疑念が高まっている⁽⁹⁾ことも想定される。これに対して、科学技術は「(3) 科学技術の高度化と知識基盤社会」において大きく扱われている。「(4) 地球世界の課題の探究」では「③科学技術の発展や文化の変容」については、科学技術の発達的光と影を歴史的に振り返り、これからの人類と科学の関係を構想する活動を例示している。高度化する科学技術にどう向き合うかは、持続可能な社会の実現に向けて考察、構想するのに適時的なテーマ内容ではあるが、「文化」に関わる現代的な課題は他にもあるのではないか⁽¹⁰⁾。

課題の探究を世界史全体の学習を基に行うとするならば、「世界の歴史の大きな枠組みと展開」と不可分に関わってきた「文化」、「文化の多様性」を取り上げることは大きいと考える。グローバル化がすすむ現代世界では、これに関連する様々な動きが挙げられる。冷戦終結後のルワンダ内戦やユーゴ紛争など地域紛争のほか、移民労働者・難民の移動・移住に伴う西欧諸国での移民襲撃やヘイトクレイムも記憶に新しい。いずれも国民国家の建設あるいは維持の問題に関わっており、「文化」がもつ排他性は否定できないが、紛争や問題の原因は、文化の多様性、文化の相違よりも、政治、経済などの力関係や操作の問題である場合が多い。山本の実践研究(前掲 2016)は、多民族・多文化のもとで生活していたセルビア出身の女性がボスニア紛争で一家離散する体験談(伊勢崎 2009: 45-61)を生徒に紹介している。互いの憎悪が生じた要因に外国メディアの操作を女性が挙げたのを知って、民族、宗教、文化が異なれば敵対すると思込んでいた生徒たちの先入観が崩れたと報告している。また、ヨーロッパの移民排斥の問題も失業の深刻化とともに、多文化主義と民主主義の両立が争点となったのである(伊豫谷 2015)。

翻って、日本でもグローバル化に伴う多文化的状況がすすんでいる。日本に居住する外国人労働者は146万人(2018年10月現在、厚生労働省)に上るが、政府は2019年4月から、さらに最大約35万人を受け入れ始めた。一方で、ヘイトスピーチの広がりも社会問題化し、2016年には「ヘイトスピーチ解消法」が施行されている。また、2019年5月に、アイヌ民族を「先住民族」と認め、差別を禁止する「アイヌ新法」も施行された。このようにグローバル化のすすむ世界に生きる現代人にとって、異なる文化的背景をもつ人々と共に生きることは避けて通れないが、日本では「多文化共生」という言葉が知られてはいるものの、自分事として認知されているとはいえない。

再び海外の動向に転じると、ユネスコによる「文化的多様性に関する世界宣言」(2001年)では、文化の多様性を人類の交流、革新、創造の源として人類共通の遺産と

とらえ（第1条）、また少数民族や先住民の権利の尊重にも言及した。この宣言には文化の多様性を紛争の原因ではなく、豊かさの源泉と考えるユネスコの理念が反映されていた（服部 2016）。5年後に採択された文化多様性条約では、文化多様性の保護・促進・維持は、現在・将来世代の利益のための持続可能な開発にとって不可欠の条件であると、「文化」を持続可能な開発の前提条件とした点が重要である（西海 2017）。文化多様性の保護が持続可能な開発の前提となるというユネスコの考え方は、ESD（持続可能な開発のための教育）に取り入れられていく。2005年に始まったESDの国際実施計画において、「持続可能な開発」の鍵となる領域として、環境、経済、社会が挙げられ、その基底に「文化」が位置付けられた（永田 2010：102）。

表5 「文化」の課題に関わる問いと関連する歴史的事項の例

大項目	中項目	主題と問いの [例1] 「文化の画一化と多様性」	主題と問いの [例2] 「多文化共生」
E 地球世界の課題	地球世界の課題の探究	グローバル化がすすむと、世界中の文化は同じになるのだろうか。私たちの文化とは何だろうか。 (紹介事例) マクドナルド・スターバックスの世界進出, グローバル言語の拡大と少数言語の消滅, 日本の食文化・ポップカルチャーの流行	多様な文化的背景をもった人々がともに暮らせる世界をつくるには、どうしたらよいのだろうか。 (紹介事例) 移民の排斥・文化摩擦 (ムスリム女性のスカーフ着用など), テロリズムの脅威, ヘイトクレイムの広がり, アイヌ新法の成立
E 地球世界の課題	科学技術の高度化と知識基盤社会経済のグローバル化と格差の是正 国際機構の形成と平和への模索	IT社会の広がり (情報の拡散) 格差の広がり (南北問題, 南南問題) 冷戦後のアメリカ極集中 地域・マイノリティの復権 経済開発と先住民生活破壊 先進国の経済成長と大衆文化の浸透	冷戦後の地域紛争の激化 難民 (紛争や環境) の増加 労働市場のグローバル化 公民権運動, アパルトヘイト 世界人権宣言ほか国際条約
D 諸地域の結合・変容	第二次世界大戦と諸地域の変容 帝国主義とナショナリズムの高揚 世界市場の形成と諸地域の結合	ファシズムとメディア 大衆文化の出現 イギリス帝国の拡大と国際公共財の普及 アジアの抵抗と伝統文化の変容 アイヌ民族を含む各地の先住民の抑圧 西欧型教育経験者の活躍 アフリカ分割, ロマン主義と国民文化 国民国家の形成とマイノリティ排除	アジア・アフリカのナショナルリズム・脱植民地化 ファシズムと人種主義 帝国主義と人種主義 (社会進化論, 万博展示) 各地への移住・移民の移動
C 諸地域の交流・再編	アジア地域とヨーロッパの再編 結び付くユーラシアと諸地域	アメリカ先住民社会・アフリカ地域社会の変容・崩壊 科学革命と進歩の思想 モンゴル帝国下の東西交流 イスラームの広がり	西・南アジア諸帝国の相互交流と多様性の容認
B 諸地域の歴史的特質の形成	諸地域の歴史的特質 古代文明の歴史的特質	各地域の文化形成と広がり 諸地域間での文化交流・文化の融合 唐と近接諸国間の文化的つながり 各地域での農耕, 遊牧, 採集など多様な文化の形成	

[筆者作成]

こうした近年の動向も踏まえ、また日本での多文化教育をすすめる森茂の提案（2019：60-80）にも学んで、世界史では一貫して重視されてきた「文化の多様性」を活かした課題探究事例を構想として示したい。表5は、取り上げる主題と問いを2例挙げ、取り上げることが可能な歴史的事項を表3、表4の事項から抽出したものである。

[例1]はグローバル化に伴う文化の画一化と多様性の問題を、[例2]は多文化共生の問題を取り上げる。[例1]は、高度情報化のもとで日常生活に、都市の消費文化が浸透し、多国籍企業の発信する「文化」の影響を感じている経験から生徒が問いを設定し、既習内容を振り返って考察、構想する活動を提示した。「文化」の画一化については、政治的・経済的ヘゲモニーを有する国・地域の力を背景にした「マクドナルド化」現象が見られ、歴史的にみても小数言語の話者、先住民の文化が危機的状況にあることは否定できない。しかし、かつての奴隷貿易に伴う文化変容の結果、ジャズやカーニバルなどのクレオール文化が形成される一方で、現在でもグローバルなメディアを利用したマイノリティの「文化」復権の動き⁽¹¹⁾も生じている。また、アジア・アフリカ地域では、旧宗主国の「文化」的影響に完全に吞まれることなく、独自の「文化」が創造されてきた⁽¹²⁾。こうした歴史の振り返りを通して、グローバル化のすすむなか、グローバルな「文化」の複合性や重層性に着目し、自らの拠って立つアイデンティティが歴史的な要因の影響を受けつつ多様に形成されることに気付き、人々の連携性について考える学習が構想ができる。

[例2]も、多文化的な日常経験をもとに問いを設定し、既習内容を振り返って考察、構想する活動を提示した。相互依存関係の深まりのなかで接する多様な「文化」の違いの中に格差や排除が隠れていることの意味を歴史的に探究しようとするものである。例えば、国民国家の建設とマイノリティの差別・排除、帝国主義期の万博展示を通して宗主国などの国民に刷り込まれる植民地主義⁽¹³⁾、アジア・アフリカの脱植民地化と国境画定に表れた分断などを取り上げる。そこでは、「文化」の統合性と排他性に着目し、マジョリティの側が他「文化」を見る差別的な視線がいまも私たちにあるのではないかと問い直すことができる。学習では、同時に国際機関やNGO、NPOなどが行ってきた差別解消の取組にも触れ、公平性を取り上げて公正な持続可能な社会の実現を構想する活動を設定したい。

その際、ESDの視点はどのように据えられるのか。筆者も、国立教育政策研究所の研究成果（2012）が提案したESDの学習指導過程を構想・展開する6つの構成概念である、多様性、相互性、有限性、公平性、連携性、責任性を活用したい。[例1][例2]に挙げられた「文化の多様性」は、世界史学習を貫く概念であり、「文化」の交流や摩擦、支配・従属の力関係による複合化や重層化を伴うことから相互性とも不可分である。また、「多様性」こそが社会の持続可能性を生み出し、特定の「文化」集団の排除や差

別は、持続可能性を阻む。この点で、意思決定や行動にかかわる公平性や連携性は、未来を見据えて構想するのに欠かせないとする。さらに、「平成30年版」で明示された歴史的な見方・考え方に関連して、比較、関連を使った探究も構想できる。これは、過去を通して未来を構想する手法で、ESDとも重なるところが多い(熊田 2017:95-114)。
 [例2]で扱う多文化共生では、オスマン帝国などの西・南アジア諸帝国の多民族共生政策も比較対象になり得る。ただし、単純な比較でオスマン帝国を賛美するのではなく、小川(2016:184)が指摘するように、オスマン帝国の共存の生き方を、国民国家の時代を生きる私たちが改革する方向で俎上に乗せることが大切である。

このように、「文化」に関わる課題探究を、戦後史以前に遡って大項目「諸地域の結合と変容」の内容も取り入れながら構想してきた。課題探究学習は、さらに前の大項目「B 諸地域の歴史的特質」を前提としており、その冒頭では農耕・牧畜の始まりを扱う。人類が各地域の自然環境との関わりの中で獲得した遊牧や狩猟・採集も含めた多様な「文化」が、未来の新たな状況に対する適応可能性を担保した点(内山, 2005)に着目すれば、導入からESDに視点を当てた世界史学習が構想できると考える。

Ⅶ. おわりに

学習指導要領、同解説や教科書記述の分析に抛りながら、世界史の内容構成は、接触・交流を通じて多様性を発展させてきた「文化」、支配と従属を伴う世界の構造化のなかで優劣や不平等を抱えながら複合化、重層化しつつ新たな価値も生み出してきた「文化」の役割を抜きにしては成り立たないことが明らかになった。「世界史探究」は、資質・能力の育成のもとで学習のスタイルを大きく変えようとしているが、これまで見てきたように、世界史が培ってきた「文化」の学習は継承される。

本稿は、内容構成について考察してきたが、「世界史探究」における資質・能力の内実、それと内容構成との関係性が今後の検討課題となる。また、「平成30年版」には、2015年に国連総会で採択された「SDGs」に関する学習が盛り込まれ、ESDの推進が一層求められている。「SDGs」の究極の目的が、沖(2018)が説くように、人類の幸福度の増進にあるならば、世界史における「文化」の学習の存在理由はさらに明瞭になる。今後は、ESDの視点の活かし方について考察を深め、具体的な単元開発まで研究する必要がある。これらは稿を改めて論じたい。

《註》

- (1) 山本も指摘するように、現代的課題を世界史学習で扱う場合には時系列を重視するが、内容が地歴・公民両教科に広く関わるため、その棲み分けを今後検討する余地がある。

- (2) 調査対象の教科書は、「平成21年版」に基づく平成28・29年検定済みの以下の17点である。なお、本文中では出版社名を付記して「〇〇版」と略記する。世界史A(9点):東書,実教A/B(『世界史A新訂版』/『新版世界史A新訂版』),清水,帝国,山川A/B/C(『要説世界史改訂版』/『現代の世界史改訂版』/『世界の歴史改訂版』),第一。世界史B(7点):東書A/B(『新選世界史B』/『世界史B』),実教,帝国,山川A/B/C(『新世界史改訂版』/『高校世界史改訂版』/『詳説世界史改訂版』)。
- (3) 文部科学省教科調査官の藤野は,中学校学習指導要領における,社会科歴史的分野の解説のなかで同様の指摘をしている(『中等教育資料』平成31年1月号)。
- (4) 定義次第とはいえ,宗教と科学技術については「文化」との「ずれ」にも注意が必要である。宗教については,山中が日本で学ぶ12か国の留学生への取材をもとに,イスラーム地域でも地域的多様性が大きく,キリスト教色が強い韓国でも冠婚は儒教的伝統に基づいているなど,「文化」との微妙な関係を指摘する(山中・藤原 2013: pp.238-244)。また技術については,日本の半導体工場では靴を脱ぐといった例のように文化依存性が強いが,科学は特定の文化を超えた普遍性があるという村上の見方は首肯できる(2001: 92-103)。ただ,科学が技術と結び付くのは19世紀末以降なので,科学技術と文化の関係も割り切れない面がある。本稿では,現代的課題を取り上げる部分では「科学技術と文化」と記述する。
- (5) 戸井田(2004)は,世界史の「文化圏」が地理から派生した概念で,等質地域と捉えられているフシがあるから,「交流圏」の設定が別に必要になったと分析している。
- (6) 平野(2000: 17-24)は,19世紀から20世紀の国際関係そのものに文化性を認めている。また,西欧への抵抗としての非西欧型ナショナリズムは,過去の文化遺産を過度に賛美する傾向が強いと指摘する(前掲:137)。
- (7) 「世界史A」では,「世界史B」とは異なる「文明(圏)」という用語を使ってきた。近現代史中心で比較文明的な視点を重視するということだが,文化と文明との違いについては,「平成11年版解説」に以下のような記述がある。「必ずしも一義的にとらえることはできないが,ここでは地域性や風土性に立脚した個性的な生き方・考え方の総体を文化として,また地域性や風土性を越えた普遍的な生き方の総体を文明としてとらえておく」(p.39)。ただし,このような解説があったのは,このときだけである。
- (8) 「B 歴史的特質の形成」について先述したことも関連して,「世界史探究」の構想は「世界史A」から得られるヒントが多い。やや角度は異なるが,吉嶺(2019)が「世界史A」からアップグレードした「世界史探究」を提案していることには共感する。
- (9) 日本では,人種と民族を明確に区別する理解がなされてきたため,日本には在日韓国・朝鮮人の民族差別はあっても,アメリカのような人種差別はないという理解が一般的だったとする指摘もある(坂野 2016: 5-6)。現行版「世界史B」では,すでに「人種」が記載されていない教科書もあり,他のほとんども「人種」を否定的に記述している。
- (10) 日高(2018)は,「世界史探究」の全体構想のなかで,各地域世界ごとに課題の解決事例を提案している。
- (11) 渡辺(2015: 28-30)は,アマゾンの先住民がドキュメンタリー映像を制作したり,NGOとネットワークをつくって環境破壊に抗したりする動きを紹介する。
- (12) アフリカ分割のベルリン会議では,宗主国の言語別の分割が行われた。現在,アフリカの知識人や作家の多くは母語ではなく,旧宗主国の言語で執筆する。植民地主義の影響は現代アフリカでも清算されない。アフリカ初のノーベル賞作家ウォーレ・ショインカも英語で創作するが,自己のアイデンティティは大切にしつつも,同時に地元ヨルバの演劇を西欧演劇と結合して芸術の新境地を開いている(宮本・松田 1997: 560-569)。
- (13) 1904年,万博に合わせて開かれたセントルイス・オリンピック大会では,アイヌ民族を含む先住民を中心とした陸上競技会が実施された。クーベルタンは,「白人」以外が参加

する競技会に不快感をあらわにした（上村 2015：10-17）。

参考文献

- 秋田茂, 2019, 『グローバル化の世界史』 ミネルヴァ書房
- 伊勢崎賢治, 2009, 『伊勢崎賢治の平和構築ゼミ』 大月書店
- 伊豫谷登士翁, 2015, 「グローバリゼーションにおける『国境』の越え方」（佐藤卓己編『岩波講座 現代 5 歴史の揺らぎと再編』 岩波書店）
- 上村英明, 2015, 『新・先住民の「近代史」』 法律文化社
- 内山純蔵, 2005, 「文化の多様性は必要か？」（日高敏隆『生物多様性はなぜ大切か？』 昭和堂）
- 小川幸司, 2016, 『世界史との対話（中）』 地歴社
- 沖大幹, 「SDGsと学術, 科学技術」（『学術の動向』 2018年1月号）
- 熊田禎介, 2017, 「過去を通して未来を構想する社会科歴史学習の課題と可能性」（井田仁康編『教科教育におけるESDの実践と課題』 古今書院）
- 国立教育政策研究所, 2012, 『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究』
- 児玉康弘, 2011, 「世界史内容構成原理の比較研究」『社会科教育研究』 第112号
- 佐伯・原田・澁澤・朝倉, 2000, 『高等学校新学習指導要領の解説 地理歴史』 学事出版
- 坂野徹, 2016, 「科学研究と人種概念」（坂野・竹沢編『人種神話を解体する2』 東京大学出版会）
- 戸井田克巳, 2004, 「歴史的思考力の基礎概念としての地理的な見方・考え方」『社会科教育研究』 NO. 91
- 永田佳之, 2010, 「持続可能な未来への学び」（五島・関口編『未来をつくる教育ESD』 明石書店）
- 西海真樹, 2017, 「文化多様性条約における持続可能な開発」（北村・西海編『文化多様性と国際法』 中央大学出版部）
- 服部英二, 2016, 「文化の多様性に関する世界宣言と未来世代の権利」（総合人間学会編『総合人間学10 コミュニティと共生』 学文社）
- 原田智仁, 1999, 「文化圏学習の再生を求めて」『社会科研究』 第50号
- 日高智彦, 2018, 「世界史論・世界史教育論の成果と課題から高校歴史新科目を考える——「世界史探究」の構想に向けて——」『日本歴史学協会年報』 第33号
- 平野健一郎, 2000, 『国際文化論』 東京大学出版会
- 三木健詞, 2018, 「高等学校地理歴史科におけるESDとSDGs～『世界史』を中心に～」『拓殖大学教職課程年報』 第1号
- 三木健詞, 2019, 「中学校社会科公民的分野における『文化』の学習の位置付け」『拓殖大学教職課程年報』 第2号
- 宮本・松田編, 1997, 『新書アフリカ史』 講談社
- 村上陽一郎, 2001, 『文化としての科学／技術』 岩波書店
- 森茂岳雄, 2019, 「社会科における多文化教育のカリキュラム・デザインと単元開発」（森茂・川崎・桐谷・青木編『社会科における多文化教育』 明石書店）
- 山中・藤原編, 2013, 『世界はこうして宗教とつきあっている』 弘文堂
- 山本勝治, 2016, 「地域紛争をめぐる課題に向き合う世界史の実践」坂井俊樹編『社会の危機から地域再生へ』 東京学芸大学出版会
- 佑岡武志, 2018, 「ESDに視点を置いた世界史教育内容編成」『兵庫教育大学教育実践学論集』 第19号
- 吉嶺茂樹, 2019, 「高校教員の目から見た世界史探究」『歴史評論』 NO. 828
- 渡辺晴, 2015, 『〈文化〉を捉え直す』 岩波書店

文部省, 1979, 『高等学校学習指導要領解説 社会編』一橋出版
文部省, 1989, 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版
文部科学省, 1999, 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』実教出版
文部科学省, 2010, 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』教育出版
文部科学省, 2018, 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』(平成 30 年 7 月) (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/17/1407073_03.pdf 令和元年 10 月 29 日最終閲覧)

(原稿受付 2019 年 11 月 4 日)

英語の未来表現について：

学習文法における記述を中心に

渡 辺 勉

On Futurate Expressions in English with a Focus on their Description in Learner's Grammars

Tsutomu WATANABE

abstract

Murphy (2009) seems to imply that the *be going to* and the progressive forms are interchangeable as futurate expressions. This research has investigated if both (a) "It is going to rain soon" and (b) "It is raining soon" are acceptable as futurate expressions. A search in the three kinds of corpus has revealed that the progressive form (b) cannot have a futurate reading. The author has compared the description of future expressions in Leech (2004) and those in four learners' grammars. Leech disallows a sentence "It is raining tomorrow." Yet, the explanation of the progressive futurate in the four grammars do not incorporate his argument. Copley's (2005) proposal that the progressive futurate demands an "animate director" will serve as a cornerstone for further research.

キーワード：未来表現，学習文法，進行形，コーパス，監督者

目 次

1. はじめに
2. コーパス調査
 - 2.1. 電子辞書の例文検索
 - 2.2. Google 検索オプション
 - 2.3. BNC Online と WordbanksOnline
3. 学習文法における未来表現の記述
 - 3.1. Leech (2004)
 - 3.2.1. will+不定形
 - 3.2.2. be going to+不定形
 - 3.2.3. 現在進行形
 - 3.2.4. 単純現在形

3.2.5. will+進行形

3.3. 日本の学習文法書における未来表現の記述

4. 言語理論からの探求：Copley (2005, 2009) を例にして

5. 結 語

1. はじめに

外国人用の学習英文法書のひとつである Murphy (渡辺訳) (2009: 36-47) では、英語の未来表現として、I do (単純現在形), I am doing (現在進行形), I am going to do, I will, I will be doing (未来進行形) の5つの表現形式を取り上げている。

Murphy (渡辺訳) (2009: 38) では、be doing と be going to do の違いを次のような例文を挙げて説明している。

- (1) I'm leaving tomorrow. I already have my plane ticket.
- (2) "The windows are dirty." "Yes, I know. I'm going to wash them later."

Murphy (渡辺訳) は(1)については「すでに準備したり計画を立てたりしている場合」、(2)については「すでに決めているものの、具体的な準備はまだしていない場合」と区別して説明している。

ところが、Murphy (渡辺訳) (2009: 38) は、上記の記述の直後に、「実際にはこの両者にはほとんど違いがないため、多くの場合、両者は同じように用いられています。」⁽¹⁾と述べている。同じように用いられる、つまり、交換可能な場合と交換不可能な場合があるのだろうかという疑問がわく。

Murphy (渡辺訳) は続けて be going to do の用法の説明で次のような例文を取り上げている。

- (3) Look at those clouds ! It's going to rain.

Murphy (渡辺訳) は(3)は「現在の状況から確実に予想できる未来の出来事」を表していて、予想できる根拠としては「今、黒い雲が集まっているから」と主張している。(3)の例文について、be doing と be going to do に「ほとんど違いがない」ならば、(3)の代わりに(4)と言ったらどうなるかと筆者が担当する英文法の授業で一人の学生から質問があった。

(4) Look at those clouds ! It's raining.

「今、雨が降っている」という意味になると答えると、それは学生も織り込み済み。では、(5)はどうなるかとさらに質問があった。

(5) Look at those clouds ! It's raining soon.

Murphy (渡辺訳) (2009: 38) の記述だけでは “It's raining soon” が誤りであるとは断定できない。

2. コーパス調査

2.1. 電子辞書の例文検索

現在進行形を使った “It is raining soon” が文法的に「正しい」か「正しくない」かの議論を進める前に、当該の表現が実際に使われているかどうかを調べる必要がある。まず、電子辞書 (CASIO XD-U 18000) で例文検索を試みた。比較のために、Murphy (渡辺訳) (2009) の記述からは「正用法」と判断できる “It is raining”, “It is going to rain”, “It is going to rain soon” も検索してみた。4つの表現の検索数は表1の通りである。

表1

	It is raining ⁽²⁾	It is raining soon	It is going to rain ⁽³⁾	It is going to rain soon
リーダーズ	4	0	1	0
新英和大辞典	6	0	2	0
英和活用	1	0	2	0
ジーニアス	7	0	1	0
ランダムハウス	0	0	0	0
ウィズダム	2	0	0	0
オーレックス	1	0	0	0
OSD	18 ⁽⁴⁾	0 ⁽⁵⁾	0 ⁽⁶⁾	1 ⁽⁷⁾
NOAD	2	0	1	0
OALD	1	0	1	0
LDOCE	1	0	0	0
合計	43	0	8	1

11冊の英語辞書の中で見つかった例文の合計数をみると、小論で注目している表現“*It is raining soon*”の件数は0件である。電子辞書の例文検索を手がかりとしているが、この時点で外国人学習者は使わない方がいいだろうという予測が立つ。“*It is going to rain soon*”について、“*was soon going to rain*”と過去進行形とは言え、OSDに1件の用例があるのと対照的である。“*It is going to rain*”の件数は8件、“*It is raining*”の件数は43件と普通の英語表現であることがうかがえる。

興味深い観察がある。OSDにある“*It is raining*”の18件の例文のうち、「たった今、雨が降っている」⁽⁸⁾という意味を表していると言解できる例文は4件しかない。例えば、下の(6)のような例である。

- (6) Here in Washington D.C. area, the weather has turned cold and it is raining. (下線は筆者による)

Murphy (渡辺訳) (2009: 2) は、「現在進行形が話をしている瞬間に進行していない動作を表すことがある」⁽⁹⁾として、次のような例を挙げている。

- (7) Kate wants to work in Italy, so she's studying Italian.

OSDの中の残りの14例中、“*if it is raining*”は7例、“*when it is raining*”は5例、“*while it is raining*”は2例である。Murphy (渡辺訳) (2009: 8) では、“*it is raining*”を「始まったものの完了していない動作や出来事を表す」⁽¹⁰⁾例として取り上げている。「始まったものの完了していない」という説明は、*if*, *when*, *while*に導かれる“*it is raining*”にも当てはまると思われる。しかし、Murphy (渡辺訳) (2009: 6) で述べている「…している最中のように、話をしている時やその周辺で生じている出来事を表す」⁽¹¹⁾という記述からは外れるように思われる。

2.2. Google 検索オプション

前節で、電子辞書の例文検索を利用して、“*It is raining soon.*”という表現は母語話者には使われないのではないかと推論を立てた。しかし、調査の範囲が11冊の英語辞書の中の例文と限られていた。筆者は、ある表現が「正しい」のか「誤っている」のかを判断するひとつの基準は、その表現の頻度数がどのくらいあるかを調べることだと考えている。検索対象の範囲を広げると、得られるデータに変化は生じるだろうか。衣笠 (2010: 32) で紹介されている検索法を参考にして、Google 検索オプションで調べてみた。「語順も含め完全一致」の欄には、電子辞書の例文検索で行ったのと同じように、

“It is raining”, “It is raining soon”, “It is going to rain”, “It is going to rain soon” と入力して順番に検索してみた。「言語」は英語とし、「地域」はアメリカ合衆国とイギリスを別々に検索した。「ドメイン」は、「.edu」および「ac.uk」とし、アメリカまたはイギリスの大学内のサイトを検索できるようにした。母語話者または同等の話者が使った英語表現だろうと想定できるからである。全部で8種類の検索をした。その結果は表2のとおりである。

表2

	It is raining	It is raining soon	It is going to rain	It is going to rain soon
Google 日本／英語／アメリカ合衆国／.edu	41,400 ⁽¹²⁾	3 ⁽¹³⁾	23,700 ⁽¹⁴⁾	562 ⁽¹⁵⁾
Google 日本／英語／イギリス／ac.uk	4,340 ⁽¹⁶⁾	0 ⁽¹⁷⁾	2,560 ⁽¹⁸⁾	4 ⁽¹⁹⁾
合計	45,749	3	26,260	566

4種類の英語表現の出現頻度の大きさは、「電子辞書の例文検索」、Google 検索での「アメリカ合衆国」、「イギリス」、「アメリカ+イギリス」のどれでも共通であり、(a)“It is raining”, (b)“It is going to rain”, (c)“It is going to rain soon”, (d)“It is raining soon”の順番である。小論で注目している表現 “It is raining soon” の出現数は、「アメリカ合衆国」では3、「イギリス」では0ある。「アメリカ合衆国」の1件は英語以外の言語に関する記述なので除外すると出現数は2となる⁽²⁰⁾。出現数が少なければ、検索した表現は、母語話者にはあまり用いられないか、または誤用であろうと推定できる。2件とも一般の文章ではなく、専門論文の中の例文にヒットしたものである。そのうちの1つは Copley (2005: 27) の以下の例文である。

(8) The sun is rising soon.

(9) #It is raining soon.

例文(9)は “It is raining soon” が正しい表現であることを示してはいないと思われる。井桁記号なしハッシュタグ#は、当該の英文の容認可能性に問題があることを示している。神澤 (2018: 9-10) は、「自然と思われる事例は無標、不自然と思われる事例はアスタリスク (*), やや不自然と思われる事例はクエスチョンマーク (?), ネイティブ話者同士で判断が異なると思われる事例は井桁記号 (#) で表す」と述べて、データの分析をしている⁽²¹⁾。例文(9)には (*) も (?) も付いていないので、誤り⁽²²⁾であると

即断は出来ないが、外国人学習者が使うのは避けた方が良いのではないかと推定できる。Google 検索では、「「～」という表現はおかしい」あるいは「「～」という表現は聞いたことがない」というような文章の中の「～」にもヒットするわけ⁽²³⁾で、出現数が少ない場合には当該の表現が、実際に母語話者に用いられているのかどうかを丁寧に調べる必要がある。

逆に、Copley (2005) の例文(8)は「無標」であるから“The sun is rising soon.” が容認されることを示している。「太陽がすぐに昇る」の意味は現在進行形で表せるが、「雨がすぐにふる」の意味を表すためには現在進行形は使えないということを示唆している。

電子辞書の例文検索では、“It is raining.” の 18 件の例文の中で「たった今、雨が降っている」という意味を表している」と解釈できる例文は少ないという観察を述べた。Google 検索でヒットした全ての例を直接、確かめることは困難である。“It is going to rain.” の出現数は 23,700 件、“It is going to rain soon.” の出現数は 562 件である。上手く観察できた検索例の中に外国人向けの英文法の説明書や専門論文以外の文章の中の例が多数ある。両者とも母語話者が普通に使う表現であることが分かる。例えば、Peter Dowling (2013) et al. を検索してみると次のような 3 例が見つかる⁽²⁴⁾。

- (10) However, if the outlook says it is going to rain soon they may need to reconsider. (下線は筆者による)
- (11) One indicator that I learned from my Grandfather was an indicator about when it is going to rain. (下線は筆者による)
- (12) He then told me that if you see that the ant hill is covered in ants that means that it is going to rain hard.... (下線は筆者による)

(11)と(12)は雨が降りそうだと判断できる理由を述べている。be going to が「現在の原因から予期される未来」を表している例である。この用法については、3.2.2 で後述する。

2.3. BNC Online と WordbanksOnline

2.1 節と 2.2 節では、電子辞書の例文検索と Google 検索オプションを使って、4 つの英語表現の出現頻度数を調査した。本節では、語法や用例の調査のために構築されたコーパスを使って同種の検索を行う。検索対象とするのは、The British National Corpus (BNC) と WordbanksOnline である。赤野 他 (2014: 24-27) によると、BNC は 1 億語を有するコーパスで 1990 年代のイギリス英語の実態を反映している。

WordbanksOnline は 6 億 5,000 万語を有するコーパスであり、英語辞書 *Collins COBUILD English Dictionary* を編纂するために作られたものである。小論では、小学館コーパスネットワーク⁽²⁵⁾ が提供するデータを使用するため、検索できる語数は BNC と WordbanksOnline の双方で、それぞれ、1 億語ずつである。

2.1 節と 2.2 節と同様に、4 つの英語表現 “It is raining,” “It is raining soon,” “It is going to rain,” “It is going to rain soon.” を検索した。結果は、下の表 3 のとおりである。

表 3

	It is raining	It is raining soon	It is going to rain	It is going to rain soon
BNC Online	65	0	2	0
Wordbanks Online	14	0	1	0
合計	79	0	3	0

“It is raining soon.” の検索数がゼロであるのは、電子辞書の例文検索の結果がゼロ、Google 検索オプションの検索結果が 2 であったことと矛盾しない結果である。つまり、この表現は実際の英語では使われないだろうということである。しかし、“It is going to rain soon.” の検索結果もゼロというのは意外である。後者の検索数は、電子辞書の例文検索では 1、Google 検索オプションでは 566 であった。この 2 種類の「コーパス調査」の結果から、“It is going to rain soon.” は普通に使われる英語表現だが、“It is raining soon.” は使われないだろうと主張できる。残念ながら、BNC と Wordbanks-Online を検索した結果では、この対比は明らかにならない。言語調査用の専用コーパスよりも商業目的のデータベースが力を発揮する場合だと思われる。赤野 他 (2014: 32) も Google などの検索エンジンは本来言語調査用に作られたものではないが、非常に低い頻度の言語表現を扱う場合などに利用できると述べている。

3. 学習文法における未来表現の記述

3.1. Leech (2004)

さて、2 節では、3 種類のコーパス検索を行った結果、“It is raining soon.” という表現は、実際には使われないのではないかという仮説が立てられる。しかし、出現頻度数は限りなくゼロに近いということは明らかになったが、なぜ使われていないのかという疑問に対する理論的な追求は、まだ終わっていない。1 節の最初で触れたように、現在進行形を使った未来表現と他の 4 つの未来表現との違いを明らかにする必要がある。英

語の時制 (tense) と法助動詞 (modal auxiliary) に関しては Leech (2004, 1987, 1971) が議論の出発点になるとされる。専門書の体裁を取っているが英語を外国語とする者のために書かれた文法書だからである。

Leech (2004: 55) は、英語の未来表現 (the expression of future time) について、以下のような 5 つの方法⁽²⁶⁾を紹介している。下線部は筆者のものである。

- (13) The parcel will arrive tomorrow. [will⁽²⁷⁾ + infinitive]
- (14) The parcel is going to arrive tomorrow. [be going to + infinitive]
- (15) The parcel is arriving tomorrow. [present progressive]
- (16) The parcel arrives tomorrow. [simple present]
- (17) The parcel will be arriving tomorrow. [will⁽²⁸⁾ + progressive infinitive]

5 つの例文は、主語を the parcel に、副詞句を tomorrow に統一し、動詞 arrive を中心とした未来表現を 5 通りに変化させている。Leech は 5 つの未来表現の意味の違いを論じている。注意すべき点がある。このような例示を見ると、外国人学習者は、「5 つの未来表現は同じような意味を表していて、どの動詞とも組み合わせて使える」と即断してしまうかもしれない。Leech (2004: 55) は「この 5 種類の動詞の形はそれぞれ微妙な意味の違いがある。単純に交換できるわけではない。」(拙訳) と述べている。以下では Leech が挙げる 5 つの形の意味の違いを見ていく。

3.2.1. will + 不定形

Leech (2004: 56) は、未来表現としての will の意味は「予測 (prediction) だ」と述べている。どの人称でも使えるとして次のような例を挙げている。下線部は筆者による。

- (18) I'll see you soon.
- (19) You'll have to work quickly.
- (20) She'll be at home when you get there.

Will の予測は長期も短期もあるとして Leech (2004: 57) は次のような例を挙げている。

- (21) In twenty years' time, no one will work more than a thirty-hour week.
- (22) There will be a fire-alarm drill at 3 o'clock this afternoon.

(18)から(22)の例は何らかの形で時間を限定する表現が入っている。Leech は次の(23)と(24)には、クエスチョンマークとアスタリスクを付けている。

- (23) ?*It will rain.
- (24) ?*The room will be cleaned.
- (25) It is going to rain.

Leech (2004: 57) は、will を使った文では時を表す副詞句がないと文が完結しない感じがすると述べている。“be going to” を使った(25)は副詞句なしでも大丈夫 (fine) だと主張している。

3.2.2. be going to+不定形

Leech (2004: 58-59) は、be going to+不定形には2つの意味があると述べている。「現在の意図から予期される未来 (the future of present intention)」と「現在の原因から予期される未来 (the future of present cause)」である。

「現在の意図から予期される未来」を表す文の主語は、たいていは、人間であるとして次のような例を挙げている。

- (26) “What are you going to do today?” “I’m staying at home and write letters.”

「現在の原因から予期される未来」を表す文の主語は人間の他に動物や物も可能であると述べて次のような例を挙げている。

- (27) There’s going to be a storm in a minute. (‘I can see the black clouds gathering’)
- (28) She’s going to have twins. (‘She’s already pregnant’)

()内の言い換えは Leech (2004: 59) のものである。この用法では、文の話者は未来の出来事を生じさせる要因が既に存在していると感じているのだと述べている。比較として(29)を挙げている。

- (29) She will have twins.

(29)は占い師の予言の意味にしかないという。

Be going to が will と置き換えられる条件は、出来事がすぐに起きることが副詞や状況から分かることだと Leech (2004: 60) は述べて、次のような例を挙げている。

- (30) What will happen now?
- (31) What is going to happen now?

Leech は 2 つの文を等号 (=) で結び、話し言葉では be going to は will と同じように未来が現在の結果として導かれなくても使われるようになっていると述べている。

3.2.3. 現在進行形

Leech (2004: 61) は現在進行形は be going to+不定形と同じように現在の時点で予期できる未来の出来事を表現できると述べている。be going to+不定形が現在の意図や原因 (present intention or cause) から予期される未来を表すのに対して、現在進行形は現在の予定、計画、取り決め (present plan, programme or arrangement) から予想される未来を表すと述べて次のような例を挙げている。

- (32) She's getting married this spring.
- (33) The Chelsea-Arsenal match is being played next Saturday.
- (34) We're having fish for dinner.
- (35) I'm inviting several people to a party.
- (36) When are we going back to France?

Leech (2004: 62) は「取り決め (arrangement)」と「意図 (intention)」の違いはとて小さいので、上の 5 つの文で使われている現在進行形は全て be going to+不定形と置き換えられると主張している。

さらに、現在進行形と be going to+不定形の共通点は時の副詞を省略できる⁽²⁹⁾ ことだと述べて、次のような例を挙げている。

- (37) Buffy and Rex are leaving.
- (38) My aunt's coming to stay with us.
- (39) They're being made redundant.

ただし、両者に違いはありと述べて、次のような例を挙げている。()は筆者による。

- (40) I'm going to take Mary out for dinner this evening. (意図)
- (41) I'm taking Mary out for dinner this evening. (取り決め)

Leech は意図は話し手の現在の心の中の問題であるが、取り決めは過去の時点で社会的に行われたものであり、現在の話し手の気持ちとは関係ないと述べている。従って、次の(42)の例では現在進行形が適切だとしている。

- (42) I'm sorry, I'd love to have a game of billiards with you, but I'm taking Mary out for dinner.

また、現在進行形が表す社会的な取り決めは、話者以外の人々となされたものだから話者一人で行う行為を表現するには be going to+不定形を使うのが適切で、現在進行形を使うのは不自然であると主張して、次の2つを対比している。

- (43) I'm going to watch TV this evening.
- (44) I'm watching TV this evening.

ただし、Leech は現在進行形を使った文にクエスチョンマークもアスタリスクも付けていない。例えば、「何人かでサッカーの試合を見る」というような取り決めが出来ているならば(44)は成り立つようである。

Leech (2004: 63) は次の例文を使って現在進行形を未来表現として使える動詞には動作動詞 (doing verbs) が多く、主語は意識を持った人間であると主張している。

- (45) John's getting up at 5 o'clock tomorrow.
- (46) *The sun is rising at 5 o'clock tomorrow.
- (47) *It is raining tomorrow.
- (48) It is going to rain tomorrow.

(45)の主語は John という人間であるから条件に合っている。(46)と(47)では太陽が昇ることや雨が降ることを人間が意図的に計画できると暗示することになるのでおかしいと Leech は説明している。(48)は現在の状況を元にした予報として成り立つということである。

3.2.4. 単純現在形⁽³⁰⁾

単純現在形で表現される未来は「事実と見なされる未来」であると Leech (2004: 65) は述べて、次のような例を挙げている。いずれもカレンダーに書かれていることである。

- (49) Tomorrow's Saturday.
- (50) Next Christmas falls on a Thursday.

カレンダーに書かれていなくても、変更が出来ない予定 (plan) や取り決め (arrangement) ならば単純現在形で未来を表現できると述べて次の例を挙げている。Leech (2004: 66) では未来の時間を表す副詞句が必要だと述べている。

- (51) We start for Istanbul tonight.

Leech (2004: 65-66) は単純現在形を使った(51)では予定は変えられないが、次の現在進行形を使った(52)ならば後から変えることはあり得ると主張している。

- (52) We are starting for Istanbul tonight.

単純現在形で表現されている予定 (plan) は個人でなく集団で決めたような感じがするが、現在進行形で表現されている予定は文の主語が立てたものと考えられると Leech は議論を展開している。しかし、これは Leech (2004: 62) が行った説明と、一見、矛盾する。3.2.3 で紹介した議論を手短に繰り返す。

- (53) [=44] I'm watching TV this evening.
- (54) [=43] I'm going to watch TV this evening.

現在進行形が表す取り決めは、話者以外の人々と社会的になされたものだから、(53)を使うのは不自然であり、個人が決めたことを表現するには(54)の be going to+不定形を使うのが適切だというのが Leech の主張であった。しかし、次の(55)と(56)では違いが感じられないと述べている。

- (55) The match starts at 2 o'clock.
- (56) The match is starting at 2 o'clock.

単純現在形，現在進行形，be going to+不定形の3つの形が表現する未来の出来事の微妙な意味の違いを精査する必要があるようである。

3.2.5. will+進行形

Leech (2004: 67-68)によれば，will+進行形には2つの用法がある。1つめは，現在進行形が現在の一時的状況を表すのと同様に，未来の一時的状況を表すものである。Leechは次のような例を挙げている。

(57) This time next week they will be sailing across the North Sea.

2つめの用法は，「決まり切った未来 (future-as-a-matter-of-course)」を表すものである。Leechは次のような例を挙げている。

(58) I'll be driving into London next week.

(59) I'll drive into London next week.

will+進行形には誰かの意思は含まれないので，(58)は予定を表現できるが，(59)は今この場で話者が決めたという暗示を避けられないという。この対比は疑問文の方が顕著である。Leechは次のような例を挙げている。

(60) Will you put on another play soon?

(61) Will you be putting on another play soon?

(60)では主語のyouの意思を確認し，お願いしている意味になってしまう。(61)は，単純に公演の予定を尋ねている。意思を含まないので聞き手に対して丁寧な表現と感ぜられるようである。

3.3. 日本の学習文法書における未来表現の記述

3.2節で見た5つの未来表現の特徴は次の11項目に要約できる。

- (a) willの意味は予測 (prediction) [will (予測)]
- (b) willを使った文では時を表す副詞句がないと文が完結しない [will (副詞句あり)]
- (c) be going toを使った文では時を表す副詞句なしでも成り立つ [be going to (副詞句なし)]

- (d) be going to が表す意味は現在の意図または原因から予期される未来 [be going to (現在の意図・原因)]
- (e) be going to が will と置き換えられる条件は出来事がすぐに起きることが副詞や状況から分かること [be going to が will と置き換えられる条件]
- (f) 現在進行形は、変更可能な現在の予定、計画、取り決めから予想される未来を表す [現在進行形 (予定・計画・取り決め・変更可)]
- (g) 未来を表す現在進行形は be going to で置き換えられることが多い [現在進行形と be going to との置き換え]
- (h) 現在進行形と be going to との違い
- (i) 単純現在形は変更ができない予定や取り決めを表す [単純現在形 (予定・取り決め・変更不可)]
- (j) will+進行形は未来の一時的状況を表す [will+進行形 (一時的状況)]
- (k) Will you be~ing? は相手の意思を確認せずに予定を確認できる [will+進行形 (意思確認)]

学習文法書で、これらの項目がどのように扱われているかを簡単に調査したい。日本の代表的な学習文法書での取り上げ方と Murphy (2009) の日本語版での取り上げ方を比較する。日本人学習者が本来は英語で書かれたヨーロッパ流の学習文法書で学んだ時に困難な点はないかを知るためである。取り上げる日本の学習文法書は江川 (1991) 『英文法解説』, 綿貫 (2008) 『ロイヤル英文法』, 石黒 (2006) 『総合英語フォレスト』である。結果は表 4 にまとめて示す。表では各項目を短縮した形で示す。記載がある場合は○で、記載はあるが不十分な場合は△で示す。何れの場合も記載箇所を後注で示す。記載がない場合は×で示す。

表 4

	江川 1991	綿貫 2008	石黒 ⁽³¹⁾ 2006	Murphy 2009
(a) will (予測)	○ ⁽³²⁾	○ ⁽³³⁾	○ ⁽³⁴⁾	○ ⁽³⁵⁾
(b) will (副詞句あり)	×	×	×	×
(c) be going to (副詞句なし)	×	○ ⁽³⁶⁾	×	×
(d) be going to (現在の意図・原因)	○ ⁽³⁷⁾	○ ⁽³⁸⁾	○ ⁽³⁹⁾	○ ⁽⁴⁰⁾
(e) be going to が will と置き換えられる条件	×	×	×	△ ⁽⁴¹⁾
(f) 現在進行形 (予定・計画・取り決め・変更可)	×	×	×	△ ⁽⁴²⁾
(g) 現在進行形と be going to との置き換え	○ ⁽⁴³⁾	×	×	○ ⁽⁴⁴⁾
(h) 現在進行形と be going to との違い	○ ⁽⁴⁵⁾	×	×	○ ⁽⁴⁶⁾
(i) 単純現在形 (予定・取り決め・変更不可)	△ ⁽⁴⁷⁾	○ ⁽⁴⁸⁾	○ ⁽⁴⁹⁾	○ ⁽⁵⁰⁾
(j) will+進行形 (一時的状況)	○ ⁽⁵¹⁾	○ ⁽⁵²⁾	○ ⁽⁵³⁾	○ ⁽⁵⁴⁾
(k) will+進行形 (意思確認)	○ ⁽⁵⁵⁾	○ ⁽⁵⁶⁾	○ ⁽⁵⁷⁾	△ ⁽⁵⁸⁾

4種類の学習文法書の中で全て○また△が付いている項目は、(a)(d)(i)(j)(k)である。Willとbe going toのそれぞれの基本的な用法についてはどの文法書も取り上げていることが分かる。ただし、両者が置き換えられる条件については、ほとんど記述がないことが(e)から分かる。単純現在形による未来表現もほぼ等しく扱われている。江川(1991: 224)に変更不可の記載がないだけである。未来進行形の用法もどの文法書でも同等に扱われている。Murphy(2009: 46)に相手の意思を確認せずに予定を確認できるので丁寧な表現と受け止められるという説明がないのが意外である。

さて、小論で問題としていることは、(g)と(h)の現在進行形とbe going toとの置き換えられる条件と両者の違いである。Murphy(2009: 38)では、現在進行形とbe going to使い分けを示す次のような例文を提示している。下線部は筆者による。

- (62) [= (1)] I'm leaving tomorrow. I already have my plane ticket.
 (63) [= (2)] "The windows are dirty." "Yes, I know. I'm going to wash them later."

残念ながら、主動詞がleaveとwashと異なるため、2つの文の意味の違いが語彙の違いによるものか、文法形式の違いによるものかが分かりにくい。その後で、「実際にはこの両者にはほとんど違いがないため、多くの場合、両者は同じように用いられています。」と述べているので、1節で指摘したとおり混乱を招くと思われる。

江川(1991: 223)では「相手の予定を尋ねる時にはどちらを使ってもよい」と述べて次のような例を挙げている。

- (64) What are you doing this afternoon?
 (65) What are you going to do this afternoon?

両者の違いについては、江川(1991: 224)は次のような例を挙げている。主動詞を同じにしているので、文法形式による違いだということが分かる。

- (66) I'm meeting Tom at the station at 6.
 (67) I'm going to meet Tom at the station at 6.

江川によると、(66)には「トムと約束している」という含みがあるが、(67)にはその含みはなく、自分だけの「つもり」だということである。どちらの文も人間が主語になっている。無生物が主語になった場合の用法については不明である。4つの文法書には“It's

going to rain.” または “It’s going to snow.” という例文が出ている。しかし、文法形式を現在進行形に変えたらどうなるかというような視点からの議論は見つからない。理論言語学的な研究に答えを求める必要があるかもしれない。

4. 言語理論からの探求：Copley (2005, 2009) を例にして

Copley (2009) は、英語の未来表現全体を論述の対象にしている。英語以外の言語への言及もある。Copley (2005) は単純現在形と現在進行形によって表現される未来表現 (futurate) に限定して論述しているので、こちらを優先して取り上げる。必要があれば Copley (2009) へも言及する。Copley (2005: 15) は、単純現在形と現在進行形の双方とも、計画 (plan) または予定 (schedule) が存在する感じがすると主張し、次のような例を挙げている。

(68) The Red Sox play the Yankees tomorrow. (Copley 2005: 15) [単純現在形]

(69) The Red Sox are playing the Yankees tomorrow. (Copley 2005: 15) [現在進行形]

注意すべき記述がある。Copley は「両者が未来の解釈または捉え方 (futurate construals)⁽⁵⁹⁾ をすることが可能である」と認知意味論的な表現をしていることである。語彙と文法だけに基づいて単純現在形と現在進行形が「未来の解釈」を生み出すわけではないようである。

Construal は、状況、場面、話者が変われば、それ自身、変わり得るものだからである。Evans and Green (2006: 467) は、construal の説明のために次の2つの例文を比較している。

(70) John kicked the ball.

(71) The ball was kicked by John.

Evans and Green は能動態と受動態では、話者の物の見方 (ways of seeing) が異なっていると指摘する。捉え方 (construal)⁽⁶⁰⁾ の定義は、次の谷口 (2006: 9) の説明が分かりやすい。

私たちがことばによって表しているのは、外界の事物のあるがままではなく、私たちが一旦頭の中で捉え、解釈したものである。つまり、ことばの表現の「意味」

とは、私たちの「捉え方」であり「解釈」であると言ってよい。そして物事を捉える際には、さまざまな認知的（心理学的）作用が関わってきている。

5種類の未来表現も、話者の異なった捉え方が反映していると考えられる。

さて、Copley による未来表現の議論に戻る。3.2.3 節で触れたように Leech (2004: 61) は「現在進行形が表す未来は現在の予定、計画、取り決めから予想されるものだ」と主張している。しかし、Copley (2005: 17; 2009: 21) では、次の例文を挙げて 計画 (plan) の存在は、現在進行形が未来を表すための必須条件ではないと述べて、次の例文を挙げている。

(72) The Red Sox aren't playing the Yankees tomorrow. (Copley 2005: 17; 2009: 21)

(73) [= (69)] The Red Sox are playing the Yankees tomorrow. (Copley 2005: 17; 2009: 21)

(72)が成り立つためには「レッドソックスがヤンキーズと試合をするという予定はない」という前提が必要となる。予定が存在しない場合は(72)と(73)の双方とも正しくない。予定の存在を必須と考えると、おかしな結果を招いてしまうという主張である。Copley (2005: 19) は、「未来の出来事 (eventualities) には計画できるものとできないものがある」と述べている。

Copley (2005: 21-24) は計画 (plan) について3つの側面から議論している。1つ目は話者のかかわり方 (commitment), 2つ目は話者の能力 (ability), 3つ目は変更の可能性 (changes) である。

Copley (2005: 21) は、係わり方について(74)の例文を挙げている。

(74) I'm doing my laundry tomorrow, even though I don't want to.

一見矛盾した発話のように思えるが、(74)の発話の背景には次の4つの欲求があると Copley は分析している。

- (a) I want to have clean clothes.
- (b) I don't want to do my laundry.
- (c) I don't want to have someone else do my laundry.
- (d) I don't want to buy new clothes.

これらの欲求は同じ強さのものではなく、話者の心の中に欲求 (desire) の段階づけがあると考えられるという。(a)を実現するために話者の避けたいことを順序づけすると、一番避けたいのは(d)であり、(d)(c)(b)の順番で避けたいのだという。避けたい順位が一番低い(b)と実現したい(a)は両立するので、(74)は矛盾した発話ではないという説明である。

話者の能力については、Copley (2005: 23) は(75)と(76)の例文を挙げている。

(75) We're seeing Spiderman tomorrow. (Copley 2005: 22) [5歳の息子]

(76) We are not seeing Spiderman tomorrow. (Copley 2005: 22) [その子の母親]

Copley (2005: 22) は、「もしも有効な計画が存在するならば、話者はその計画が実現するのを見とどける能力を持っていなければならない」と論じている。Copley の主張の要旨は次のとおりである。5歳の Max は間違いを犯している。家族が見に行く映画を決める権限があると勘違いしている。しかし、実際に権限があるのは母親だから、(76)によって(75)を打ち消すことが出来る。ただし、筆者の考えでは、Copley は(75)と(76)の文に#は付けていないから、単独の文ならば、「文法的」にはどちらも正しいということだと思われる。文法 (grammar) や統語論 (syntax) の領域を超えて考察すべき問題を含んでいることが分かる。

変更の可能性については、Copley (2005: 23) は(77)の例文を挙げている。

(77) We're seeing Scooby Doo tomorrow.

(76)の文に続けて母親が(77)の発言をしても、出発直前に鉄砲水に襲われるなどの不測の事態があれば、(77)は実現しないと Copley は述べている。

以上3つの側面から、計画 (plans) に関する Copley の議論を紹介した。Copley (2005: 24; 2009: 29) は、この議論を受けて、未来表現に関わる計画には監督者 (director) が存在すると述べている。監督者は文脈 (context) から提供されるものであり、有生 (animate) である。監督者は当該の文の主語でなくてもよく、Major League Baseball や Max's parents のように複数の個人でも構わないということである。監督者は命題 (p) が起こるように保証する能力があり、その命題が起こるの見届ける立場にある。

Copley (2005: 18, 27) は 次の(78)と(79)には#をつけ、(80)には何もつけていない。井桁記号に関する説明はない。Copley (2009: 22) でも(78)に#をつけているが説明はない。

(78) # It's raining tomorrow. (Copley 2005: 18; 2009: 22)

(79) [= (9)] #It is raining soon. (Copley 2005: 27)

(80) [= (8)] The sun is rising soon. (Copley 2005: 27)

(78)と(79)には容認可能性に問題があり、(80)は問題がないという Copley の判断である。これまでの Copley の議論に従えば、(78)と(79)には有生の監督者が文脈から提供されない。命題（雨が降ること）が起こることを保証し、見届ける監督者がいない。したがって、このような文を発話する前提がない。だから、変だということになると思われる。Copley は(80)については、the sun が主語になっているので、自然力 (natural forces) と意思を持つ有生の主語 (an animate entity's force of will) との類似点と相違点を考察する必要があると言うにとどめている。Leech (2004: 63) は次の(81)と(82)にアスタリスクをつけている。

(81) [= (46)] *The sun is rising at 5 o'clock tomorrow.

(82) [= (47)] *It is raining tomorrow.

3.2.3 節で触れたように、両者ともに、人間が「計画」できることではないというのが Leech の主張であった。Copley はこの「計画」について深く検討する必要があると指摘しているわけである。

これまでは進行形を使った未来表現 (progressive futurates) について議論してきたが、Copley (2009: 39-41) は、監督者 (director) の概念を単純現在形が表す未来表現 (simple futurates) の説明にも適用すると問題が出てくる場合があると指摘し、(83)から(86)の例を挙げて議論している。なお、井桁記号の意味は容認不可能 (unacceptable) ということであり、疑問符の意味は容認不可能かどうかについてインフォーマントの意見が分かれているということだと説明している。

(83) #It rains tomorrow at 5:13 a.m.

(84) The sun rises tomorrow at 5:13 a.m.

(85) The meteorite impacts tomorrow at 5:13 a.m.

(86) ?The sun is rising tomorrow at 5:13 a.m.

Copley は(83)が容認不可能なのは監督者がいないからだの説明すると、(84)と(85)の文にも監督者がいないことになってしまうと警告している。Copley は両者には有生の監督者 (animate director) はいないが、無生の監督者 (inanimate director) はいると想定すれば、監督者の概念を使って未来表現 (futurates) の説明ができると主張してい

る。「無生の監督者」とは「自然界の法則」のようなものと述べている。監督者の概念が進行形を使った未来表現と単純現在形が表す未来表現の双方に適用できるということは、Copley の理論の説明力が高いことを表している。残念ながら、進行形を使った未来表現の例である(86)に疑問符が付く理由を Copley (2009: 39) は説明していない。

5. 結 語

小論では、Murphy (2009) に現在進行形と be going to は同じように未来表現として用いられるという趣旨の記述があるので、次の(85)と(86)がどのように用いられているかを調査した。

(87) It is raining soon.

(88) It is going to rain soon.

筆者は、ある表現が「正しい」のか「誤っている」のかを判断するひとつの基準は、その表現の頻度数がどのくらいあるかを調べることだと考えているので、第2節では、3種類のコーパス調査を実施した。“It is raining soon.”の検索数は電子辞書の例文検索ではゼロ、Google 検索オプションの検索では2 (実質ゼロ)、BNC と WordbanksOnline の検索ではゼロであった。“It is going to rain soon.”の検索数は電子辞書の例文検索では1、Google 検索オプションの検索では566、BNC と WordbanksOnline の検索ではゼロであった。電子辞書の例文検索と Google 検索オプションの2種類の検索結果から、“It is going to rain soon.”は普通に使われる英語表現だと言える。BNC と WordbanksOnline を加えた3種類の検索結果から“it is raining soon.”は使われなさそうだと主張できる。この調査の副産物として明らかになったことがある。BNC と WordbanksOnline の検索では、“It is going to rain soon.”と“it is raining soon.”の出現頻度数の差が分からないということである。この場合は Google 検索オプションの検索の方が役に立った。言語調査用の専用コーパスよりも商業目的のデータベースが力を発揮する場合だと思われる。

さて、(88)は実際に使われる英語表現だが、(87)は使われなさそうだとすることがコーパス調査により明らかになった。この観察が学習文法にどう反映されているかを明らかにする必要がある。第3章では Leech (2004) による5つの未来表現の記述を要約し、その記述が4つの学習文法書にどのように反映されているかを調査した。対象としたのは、江川 (1991)、綿貫 (2008)、石黒 (2006)、Murphy (2009) である。現在進行形と be going to との相違点の記述は十分ではない。Murphy と江川が両者の違いに言及して

いる。Murphy は両者の違いを説明する例文で異なる動詞を使っている。江川の方が同じ動詞を使って違いを説明しているので分かりやすい。以下に例を繰り返す。

(89) [= (66)] I'm meeting Tom at the station at 6.

(90) [= (67)] I'm going to meet Tom at the station at 6.

江川によると、約束があるかないかの違いだという。(89)には「トムと約束している」という含みがあるが、(90)にはその含みはないということである。残念ながら、代名詞 it を含む無生物が主語になった場合については例示がない。

第4節では言語理論による未来表現の研究を調べた。Copley は形式論理学 (formal logic) と様相意味論 (modal semantics) の立場から未来表現の分析をしている。Leech (2004) を代表として、学習文法では現在進行形が未来を表すことができるのは、現在の予定、計画、取り決めがあるからだと説明する。しかし、Copley は計画だけでは十分でないと言う。未来表現に関わる計画には有生の監督者が存在するというのが Copley の主張である。監督者は文脈から提供されるものであり、当該の文の主語でなくてもよいということである。“It is raining soon.” には、有生の監督者が文脈から提供されないから容認不可能 (unacceptable) だという説明である。

Copley (2009: 68) は、次の2つの文の容認可能性の違いは今後の研究課題であると示唆している。

(91) ? The sun is rising tomorrow at 5:00 a.m.

(92) The sun is going to rise tomorrow at 5:00 a.m.

単純現在形、現在進行形、be going to+不定形による3種類の未来表現の違いに関する記述はまだ十分ではない。注釈(60)で言及したように、Langacker (2008) は動詞の単純形と進行形の違いを4つの「事態解釈 (construal)」の中の1つである「焦点化 (focusing)」の違いによって説明しようとしている。多数の用例を収集して5つの未来表現の違いを construal の観点から説明する必要があると筆者は考える。

謝辞

この研究は2018年度に拓殖大学人文科学研究所から個人研究助成を受けた。関係者の皆様から心から感謝申し上げる。

《注》

- (1) 原著 Murphy (2009: 38) では、“Often the difference is very small and either form is possible.”と記されている。
- (2) It is raining で例文検索すると It was raining, It wasn't raining のような過去形の例文にもヒットする。この調査からは除外する。Is it raining? のような疑問形と Isn't it raining? のような否定形は、現在形の例文なので計算に含める。
- (3) It is going to rain で例文検索すると It was going to rain の例文にもヒットする。この調査の計算からは除外する。
- (4) 次の1例は除いてある。“After decades of drought, it seems it is raining democracy in this region.” この rain は他動詞用法であり、気象現象として「雨が降る」の意味にはならない。『オーレックス英和』(2008: 1617) には、「it を主語にして」……を雨のように降らせる」という定義があり、“It rained requests for the song.”(その歌へのリクエストが殺到した) という例文と日本語訳が与えられている。メタファー的拡張によって自動詞 rain から他動詞 rain が派生したのだと思われる。河上 (1996: 171) は次のような例を挙げている。(a) Joe kicked the bottle into the yard. (b) Joe kicked Bob black and blue. 河上はメタファー的拡張によって、(a)の移動使役構文 (caused-motion construction) から(b)の結果構文 (resultative construction) が派生されたと説明している。
- (5) OSD には次のような例がある。“Soon it was literally raining spearheads on the assassins.” この場合の rain は注釈(4)に記した他動詞用法であり、「直ぐに雨が降りそうだった」の意味にはならない。
- (6) It is going to rain は無し。It was going to rain ならば3例ある。
- (7) 次のような過去進行形の例である。下線部は筆者のもの。I stood there as it began to sprinkle, only a warning that it was soon going to rain.
- (8) Leech (2004: 62) が “the present in-progress meaning” と呼んでいる用法。
- (9) 原著 Murphy (2009: 2) では、“The action is not necessarily happening at the time of speaking.”と述べている。
- (10) 原著 Murphy (2009: 8) では、“We use continuous forms for actions and happenings that have started but not finished.”と述べている。
- (11) 原著 Murphy (2009: 6) では、“We use continuous forms for things happening at or around the time of speaking.”と述べている。OSDの次の例文は、Leech (2004: 64) が「現在進行形が従属節中で未来を表す用法 (“the future subordinate use of the present progressive”)」と呼んでいる用法と思われる。“If it is raining out, most drivers will not pick you up, because they don't want a wet person in their car.”
- (12) アクセス日は2019年8月30日。
- (13) アクセス日2019年6月18日と8月30日。
- (14) アクセス日は2019年8月30日。
- (15) アクセス日は2019年8月30日。
- (16) アクセス日は2019年8月30日。
- (17) アクセス日は2019年8月30日。“It is raining soon” site: ac.uk との一致はありません。
It is raining soon site: ac.uk の検索結果 (引用符なし): 約 13,900 件
- (18) アクセス日は2019年8月30日。
- (19) アクセス日は2019年8月30日。9月10日に再び検索するとヒット数は1になっていた。
“As Bill has not watered the flowers for a long time, he is watering them now. But it is going to rain soon, so there is actually no need to water them now.” (下線部は筆者に

- よる) という英文である。ニュージーランドの大学に提出された博士論文の一節である。小論の 3.2.2 で論じている be going to の意味のひとつ「現在の原因から予期される未来」に合致する用例である。また、この語法の是非を論じているわけではないことも信頼できる。サイトは次の通りである。https://core.ac.uk/download/pdf/41336191.pdf
- (20) Copley (2005) は次のサイトで見つけた。https://www.google.co.jp/search?as_q=&as_epq=It+is+raining+soon&as_oq=&as_eq=&as_nlo=&as_nhi=&lr=lang_en&cr=countryUS&as_qdr=all&as_sitesearch=.edu&as_occt=any&safe=images&as_filetype=&as_rights (アクセス日 2019 年 6 月 18 日)
- (21) 神澤の容認可能性の判断の例を引用する。井桁記号とアスタリスクの例は p. 97 からの引用である。神澤はクエスチョンマークは使っていない。
- (11) a. # たぶん歌の世界には熾烈な競争があるだろうことは分かっている。
b. # 説得には時間がかかるだろうことは分かっている。
c. # みんなが現状に満足しているだろうことは分かっている。
- (12) a. * たぶん歌の世界には熾烈な競争があるだろうのは分かっている。
b. * 説得には時間がかかるだろうのは分かっている。
c. * みんなが現状に満足しているだろうのは分かっている。
- 神澤 (2018: 9-10) は無印 (自然と思われる事例), 井桁記号 (ネイティブ話者同士で判断が異なると思われる事例), クエスチョンマーク (やや不自然と思われる事例), アスタリスク (不自然と思われる事例) の 4 段階があることを示唆しているが, 例文の分析では 3 段階しか使っていない。Schütze (2016: 45) は, 6 段階の容認可能性 (acceptability) を区別している例として, Andrews (1990) を紹介している。その 6 段階とは次の通りである。括弧付き数字と [] は筆者のものである。(1)[✓] Completely acceptable and natural (2)[?] Acceptable, but perhaps somewhat unnatural (3)[??] Doubtful, but perhaps acceptable (4)[?*] Worse, but not totally unacceptable (5)[*] Thoroughly unacceptable (6)[**] Horrible の 6 つである。Schütze (2016: 45) は, Andrews を次の点で批判している。Andrews は 20 の用法について 12 人から 17 人の被験者に判断を尋ねている。[✓] の判断を下した被験者は 2 名しかいない。20 の用法に対して一貫して [*] または [**] の判断を下した被験者は皆無である。全ての被験者が [*] または [**] の判断を下した用法は 2 例しかない。結局, 取り上げている 2 つのアイスランド語の表現はどちらも可能であるという報告を Andrews はしている。容認可能性の段階を細かく分ければ適切な観察結果が得られるというわけではなさそうである。
- (22) Schütze (2016: 44) は, アスタリスク [*] の元来の意味を Householder (1973: 370-372) を引用して議論している。拙訳で紹介する。Householder によれば, [*] は「誰の基準でも非文法的であることがとてもはっきりしている」という意味で使われていた。しかし, 1973 年の時点で [*] は次の 3 つの意味で使われていたという。(a)「私は決して X とは言わない。」(b)「私は X のような種類の文を見たことも聞いたこともない。したがってそのような例は見つからないと私は保証する。」(c)「これは完全に理解できるし, 他の人が言うのを私は聞いたことがある。しかし, その人たちは, 全て外国人, 南部人などである。私の方言では, 代わりに Y と言うと思う。」Schütze は続けてクエスチョンマーク [?] には 2 つの使い方がありと論じている。ひとつは, 「ある文を良いという人と悪いという人がいる」, つまり, 話者間の違いがある場合, もうひとつは, 「大部分の人は当該の文をギリギリだ (marginal)」という場合である。
- (23) 赤野 他 (2014: 32) は, 日本人が書きそうな英文 “My hometown has a lot of nature.” を Google 検索オプションで調べた例を紹介している。ドメインの制限をかけないと約 11 万 8 千件が該当する。しかし, ドメインを “edu” に絞ると検索数は 108 件に減り, その検

索結果は日本人留学生のコメントや英文法の授業で悪い例として取り上げられている場合だということである。

- (24) Peter Dowling の文献は次のサイトにある。 https://web.wpi.edu/Pubs/E-project/Available/E-project-050313-160125/unrestricted/sf_13-alman_ReportFinal.pdf (アクセス日は2019年8月9日と8月30日)
- (25) 検索サイトは次の通り。 <https://scnweb.japanknowledge.com/>
- (26) Leech (1987: 57; 1971: 51) も同じ5つの例文を挙げている。
- (27) Leech は shall についても簡単に言及しているが、小論からは割愛する。
- (28) Leech は shall についても簡単に言及しているが、小論からは割愛する。
- (29) Leech (2004: 62) は時の副詞を省略しても現在進行形に近い未来の出来事を表せるのは、動作動詞と1回の出来事を表す動詞に限定されると述べている。
- (30) Leech (2004: 63-65) は単純現在が if, unless, when, as soon as, that 等に導かれた従属節の中で will+不定形の代わりに使われることを論じている。小論からは割愛する。
- (31) 石黒 (2006) の後継図書である奥 (2017) も同じ記述をしている。
- (32) 江川 (1991: 214)
- (33) 綿貫 (2008: 415)
- (34) 石黒 (2006: 70)
- (35) Murphy (2009: 42)
- (36) 綿貫 (2008: 416)
- (37) 江川 (1991: 220-221)
- (38) 綿貫 (2008: 416)
- (39) 石黒 (2006: 70-71)
- (40) Murphy (2009: 38)
- (41) Murphy (2009: 44) 置き換えられない場合は条件が書いてあるが、置き換えられる場合は例文を提示して「ほぼ同じ意味になります」と述べているだけ。
- (42) Murphy (2009: 36) 変更可の記載がない。
- (43) 江川 (1991: 223)
- (44) Murphy (2009: 38)
- (45) 江川 (1991: 224)
- (46) Murphy (2009: 38)
- (47) 江川 (1991: 224) 例文と説明はあるが、変更不可の記載がない。
- (48) 綿貫 (2008: 412)
- (49) 石黒 (2006: 60)
- (50) Murphy (2009: 36)
- (51) 江川 (1991: 233)
- (52) 綿貫 (2008: 426-427)
- (53) 石黒 (2006: 72)
- (54) Murphy (2009: 46)
- (55) 江川 (1991: 233-234)
- (56) 綿貫 (2008: 427)
- (57) 石黒 (2006: 73)
- (58) Murphy (2009: 46) 例文は出ているが説明がない。
- (59) Copley (2009: 17) でも futurate construals という表現を使っている。
- (60) construal (捉え方) は新しい用語である。OED によると、“An act of construing or interpreting” での初出は1960年である。類似の用語 interpretation (解釈) の“The

action of interpreting or explaining”での初出は1382年である。Langacker (2008)の翻訳で、山梨(2011: 71)は、construalを「事態解釈」と翻訳し、4つの分類を紹介している。「どの程度詳細に場面を観察しているか」を表す「詳述性 (specificity)」、 「場面の中から何を捉えようとして選択しているか」を表す「焦点化 (focusing)」、 「どの要素に最も注意を向けているか」を表す「際立ち (prominence)」、 「場面をどこから見ているか」を表す「パースペクティブ (perspective)」の4つである。山梨(2011: 85)は、“She examined it”と“She was examining it”とを例に挙げて、動詞の単純形と進行形の違いを「焦点化」の違いで説明している。

参考文献

- 赤野一郎・堀正広・投野由紀夫 2014. 『英語教師のためのコーパス活用ガイド』大修館書店
- 石黒昭博 2006. 『総合英語フォレスト』第6版 ピアソン桐原
- 奥タカユキ 2017. 『総合英語エバーグリーン』いっずな書店
- 神澤克徳 2018. 「連体修飾構文の認知言語学的研究」博士論文 京都大学 (<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/232383/2/dnink00854.pdf>)
- 河上誓作 1996. 『認知言語学の基礎』研究社出版
- 河上誓作 早瀬尚子 谷口一美 堀田優子 (訳) 2001. 『構文文法論』研究社出版
- 衣笠忠司 2010. 『Google 検索による英語学習・研究法』開拓社
- 黒川泰夫 1987. 『英文法再発見 下』三友社出版
- 江川泰一郎 1991. 『英文法解説』改訂三版 金子書房
- 谷口一美 2006. 『認知言語学』ひつじ書房
- 山梨正明 (訳) 2011 『認知文法論序説』研究社
- 綿貫陽 他 2008. 『ロイヤル英文法』旺文社
- 渡辺雅仁 訳 (Raymond Murphy) 2009. 『マーフィーのケンブリッジ英文法 中級編』第3版 Cambridge University Press
- Andrews, Avery D. 1990. “Case structures and control in Modern Icelandic.” In Joan Maling & Annie Zaenen (eds.), *Modern Icelandic syntax* (Syntax and Semantics 24), 187-234. San Diego: Academic Press.
- Copley, Bridget. 2005. “Futurate meanings” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*. Volume II. 1. pp. 15-28.
- Copley, Bridget. 2008. “The Plan’s the Thing: Deconstructing Futurate Meanings” *Linguistic Inquiry*. Volume 39, Number 2. pp. 262-274.
- Copley, Bridget. 2009. *The Semantics of the Future*. Routledge: New York.
- Dowling, Peter, Adam Morin, Jeffrey Quinn, Kathryn Roosa. 2013. *Native Farmers’ Almanac: A Resource for the Native American Communities of Northern New Mexico*. An Interactive Qualifying Project submitted to the faculty of Worcester Polytechnic Institute in partial fulfillment of the requirements for the Degree of the Bachelor of Science. (https://web.wpi.edu/Pubs/E-project/Available/E-project-050313-160125/unrestricted/sf13-alman_ReportFinal.pdf (アクセス日は2019年8月9日))
- Evans, Vyvyan and Green, Melanie. 2006. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh University Press.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Householder, Fred W. Jr. 1973. “On arguments from asterisks” *Foundations of Language* 3

(10). 365-376.

- Langacker, Ronald W. 2008 *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Leech, N. Geoffrey. 1971. *Meaning and the English Verb*. Longman Group Limited: London.
- Leech, N. Geoffrey. 1987. *Meaning and the English Verb*. 2nd edition.
- Leech, N. Geoffrey. 2004. *Meaning and the English Verb*. 3rd edition. Pearson Education Limited: Harlow, England.
- Murphy, Raymond. 2009. *Grammar in Use Intermediate* Third Edition Cambridge University Press.
- Schütze, Carson T. 2016. *The Empirical Base of Linguistics: Grammaticality Judgments and Linguistic Methodology* (Classics in Linguistics 2). Berlin: Language Science Press.
- Xiaoyan, Xie 2008. "INTERACTIONS DURING TEACHER-FRONTED CLASS TIME OF ENGLISH CLASSES IN A CHINESE UNIVERSITY" PhD Dissertation submitted to the Victoria University of Wellington. (<https://core.ac.uk/download/pdf/41336191.pdf>) (アクセス日は2019年9月10日)

辞書類

- 市川繁治郎 David Dutcher Stephen Boyd 沢村灌 1995『新編 英和活用大辞典』(2006 電子版) 研究社
- 井上永幸 赤野一郎 2013『ウィズダム英和辞典』第3版(電子版)三省堂
- 小西友七 南出康世 2001『ジーニアス英和大辞典』(電子版)大修館書店
- 小西友七 安井稔 国廣哲彌 堀内克明 1994『ランダムハウス英和大辞典 第2版』(電子版)小学館
- 高橋作太郎 2013『リーダーズ英和辞典』第3版(電子版)研究社
- 竹林滋 東信行 寺澤芳雄 安藤貞雄 小島義郎 河上道生 2002『新英和大辞典』第6版(電子版)研究社
- 野村恵造 Moore, Jean 2008『オーレックス和英辞典』(電子版)旺文社
- Mayor, Michael 2009 *Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th edition. (electronic) Harlow, Pearson Education.
- McKean, Eric 2005 *The New Oxford American Dictionary*. 2nd edition (electronic) Oxford University Press.
- Stevenson, Angus 2005 *Oxford Dictionary of English*. (electronic) Oxford University Press.
- _____ 2008 *Oxford Sentence Dictionary*. (electronic) Oxford University Press.
- Turnbull, Joanna 2010 *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* 8th edition. (electronic) Oxford University Press.

(原稿受付 2019年10月31日)

メタファー表現の文法レベルにおける制約

— 日本語の壁塗り構文を中心に —

小野寺 美智子

Grammatical Constraints on Metaphorical Expressions

— the Spray Paint Hypallage in Japanese —

Michiko ONODERA

要 旨

本稿の目的は、壁塗り構文に見られるメタファー表現の文法上の制約を明らかにし、その制約の動機付けについて認知言語学の知見を援用し考察することである。壁塗り構文に関する従来の研究は、用いられる動詞の語彙的側面に焦点をあてたものが多いが、本稿では、壁塗り構文においてメタファー表現の使用が制限される文法上の制約があることを提示した上で、その認知的な動機付けを認知言語学の手法であるイメージ・スキーマによって分析した。その結果、メタファー表現は、壁塗り構文のうち基本的な構文には使えるが、具象的な表現とは異なり、派生的である構文には制約がかかることが明らかになった。動機付けの解明については、イメージ・スキーマによる分析方法が有効であることが実証された。

キーワード：メタファー表現、壁塗り構文、文法上の制約、イメージ・スキーマ、認知言語学

目 次

はじめに

1. 言語現象としての壁塗り構文の特徴
 - 1.1 壁塗り構文の特徴（形式と意味）
 - 1.2 壁塗り構文の特徴（動詞の種類）
2. メタファー表現の文法的制約に関する先行研究
3. イメージ・スキーマによる考察
 - 3.1 イメージ・スキーマと言語現象
 - 3.2 イメージ・スキーマと壁塗り構文

結 語

はじめに

メタファー^①は言葉の誕生とともに生まれ、その研究はアリストテレスに遡ると言われている。アリストテレスは、著書『詩学』などでメタファーを取り上げていたが、それは非日常的な説得の技術としてのレトリックに注意が向けられていたとされている。そのような文章技法としてのメタファーの研究は、20世紀に入るまで続けられていた。その後、メタファーを人間の認知との関連で捉え直し、多くの研究者によってメタファー論が展開された。その中でも Lakoff and Johnson (1980) の「概念メタファー理論 (conceptual metaphor theory)」はメタファー研究の重心を哲学から言語学に移すほどの影響力を持っていた。そこでは、メタファーは、ある概念領域を別の概念領域によって理解するという概念レベルの写像 (mapping) であり、日常的な認知の営みであると提唱されている。概念体系の多くはメタファーによって構成されているとする概念メタファー理論は、特に認知言語学の分野で研究が続けられている。〈人生は旅〉^② や 〈理論は建物〉などの概念メタファーとそこから産出される個々のメタファー表現との関係を示した理論は、画期的なものであった。

その後、認知言語学者の Grady (1997) は、Lakoff and Johnson が提唱した概念メタファーを分解することにより、メタファーをより精緻に説明することを試みた。また、メンタル・スペース理論で知られる Fauconnier and Turner (1996) が概念ブレンディング理論 (conceptual blending theory)^③ の立場からメタファー論を展開している。他にも意味変化や多義語の構成などにおいてメタファーが重要な役割を果たしていることを明らかにした多くの研究がある。しかし、従来研究されてきたメタファーは、語彙的な面が中心となっている。これは、語彙的な視点で捉えたメタファー表現の適否は、直感的に判断しやすい面があるからではないかと考えられる。一方、メタファーの実現における文法的な制約を対象とした研究は決して多いとは言い難い。それは、大石 (2010) が指摘しているように正文と非文を対比させることによってその適否を浮き彫りにする方法が使えないためだと考えられる。つまり、どちらか一方を完全に排除できず、どちらかを優先的に用いるという程度の緩い制限をもつケースが多いためである。また、文法的な制約の中には、容認度に個人差が見受けられるものがあることも研究が活発に行われなかった背景にあると推察できる。

そこで本稿では、メタファー表現を用いる際の文法上の制約について、いわゆる「壁塗り構文」^④ を取り上げ、認知言語学の理論的枠組みの中で考察することとする。分析の対象とするメタファー表現は、国立国語研究所が公開している『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の中の「中納言」から主に抽出する。まず、次節では、言

語現象としての壁塗り構文の特徴について①「形式と意味」と、用いられる②「動詞の種類」に分け、概略を述べる。第2節では、壁塗り構文におけるメタファー表現の文法的な制約に関する先行研究に言及する。第3節では、メタファー表現の文法的な制約の動機付けについて認知言語学的なアプローチであるイメージ・スキーマを用いて分析を行う。

1. 言語現象としての壁塗り構文の特徴

1.1 壁塗り構文の特徴（形式と意味）

言語現象の一つである壁塗り構文は、Fillmore（1966）などによって英語の動詞 spray を用い(1)のように動詞の形は変化させず、名詞句の位置と前置詞を変えることのできる Spray Paint Hypallage として議論が重ねられてきた。能動文から受動文が作られる際は、動詞が受身形という形態的变化が必要となるが、壁塗り構文の場合は、そのような形態的变化はなく、名詞句の位置と前置詞が変化するだけである。日本語の壁塗り構文の典型例として(2)～(5)が挙げられる。また、(2)～(5)に共通して見られる形式上の特徴は、(6)のように規定することができる。

- | | |
|--|--------------------------------------|
| (1) a. John sprayed paint on the wall. | b. John sprayed the wall with paint. |
| (2) a. 田園の畦道を花で飾る。 | b. 田園の畦道に花を飾る。 |
| (3) a. 壁をペンキで塗る。 | b. 壁にペンキを塗る。 |
| (4) a. 隙間を土で埋める。 | b. 隙間に土を埋める。 |
| (5) a. 裏側を安全ピンでとめた。 | b. 裏側に安全ピンをとめた。 |
| (6) a. (Xが) YをZでVする。 | b. (Xが) YにZをVする。 |

(6)の共通点として同じ動詞 V をとり、同じ名詞句 X, Y, Z をとることが挙げられるが、格パターン^⑤「～を～で」、「～に～を」が相違点として認められる。以上が壁塗り構文の形式上の特徴である。

また、格パターンの違いにかかわらず基本的に意味する内容に大きな違いはないとされてきた。しかし、形式が異なれば意味も異なるという言語観に基づく認知言語学の立場からすれば、(2a)と(2b)の表現は認知レベルにおいて意味が異なると考えられる。(2b)のように対象物を目的語とするのが一般的であるが、(2a)のように場所を目的語とする場合は、(2b)とは異なり、田園の畦道全体を複数の花で飾るという意味に解釈できる。したがって、(2a)と(2b)は、厳密な意味ではパラフレーズではないと捉えられる。さらに、上記の例(3)に副詞「すべて」を共起させた(7a)、(7b)を対比させると、

強調される事態の違いがより明確になる。

- (7) a. 壁をペンキですべて塗った。 b. 壁にペンキをすべて塗った。

(7a)は、壁をペンキで残すところなく一面に塗ったという意味（全体的解釈）であるが、(7b)では、「すべて」は「ペンキ」を修飾しており、意味が異なる（部分的解釈）ことになる。しかしながら、この全体的解釈と部分的解釈の違いは、目的語の名詞に明確な境界性がない場合は、現れない可能性があることが指摘されている。(4)と(5)についても全体的解釈と部分的解釈という観点から説明される。(4a)では、「隙間」を土で完全にあるいは「隙間」全体を埋めるとなるが、(4b)は「隙間」の一部を土で埋めるという解釈がなされる。(5a)は、裏側全体が動かないようにしっかりとめたという解釈が成り立つが、(5b)は裏側の一部に安全ピンをとめたことになる。

さらに、用いられる動詞や名詞句によっては、含意されるものが異なることが特徴として挙げられている。(8a)の「～を～で」パターンでは、強盗未遂の男という対象に影響が及んでいることを含意しているため、「当たらなかった」という表現を後続させると容認度が下がる。一方、(8b)の「～に～を」パターンは、撃った結果の状態変化は含意されないため、後続の「当たらなかった」は容認される。同様に結果の状態変化を含意する「～を～で」パターン(9a)は「汚してしまった」と共起させることは可能だが、状態変化が含意されない「～に～を」パターンである(9b)は容認されない。(10)は、上記の例(2)と対比させることで分析が可能となる。甲子園デビューのどこか一部に初完封を飾ることはできないので、(10b)は容認されないことになる。

(*印は、非文を表す)

- (8) a. *保安官が強盗未遂の男を銃で撃ったが、撃った弾は当たらなかった。
b. 保安官が強盗未遂の男に銃を撃ったが、撃った弾は当たらなかった。
- (9) a. 新しい靴を泥で汚してしまった。
b. *新しい靴に泥を汚してしまった。
- (10) a. 甲子園デビューを初完封で飾る。
b. *甲子園デビューに初完封を飾る。

従来の研究では、壁塗り構文は同じ事象に対する図地反転の言語現象であるので、真理条件的意味は同一であり、2つの構文はパラフレーズ関係にあるという前提で分析されることが多かった。しかし、以上見てきたように壁塗り構文の二つの格パターンは、意味内容が異なることが分かる。

1.2 壁塗り構文の特徴（動詞の種類）

多くの先行研究では、位置変化動詞としての側面と状態変化動詞としての側面を併せ持つ動詞が壁塗り構文を成立させるという指摘がなされている。岸本（2001）は、壁塗り構文に参加できる動詞について以下のように述べている。

壁塗り交替は、動詞がその語彙の意味として、移動物の動きを指定する意味と、移動の結果として場所に影響を及ぼすという意味との二面性を持つことができるときに可能になる。このような動詞には、spray に代表される「塗装」の意味を持つ動詞や、load に代表される「詰め込み」を表す動詞、さらに clear, wipe のような「除去」の意味を表す動詞があり、また、これらに対応するような自動詞も同じ構文交替に関わる。

（岸本 2001：126）

伊東（2015）は、壁塗り構文が可能な動詞として、使役移動変化動詞の中の「満たす」「埋める」「塗る」「詰める」など移動に伴う変化を含む動詞と「取る」「離す」「除く」など、その行為によって物がある場所から無くなるという変化が含まれる動詞であると述べている。物が移動すれば、その物の位置や状態が変わることを意味するので、壁塗り構文に現れる動詞は、変化を伴う移動と移動を伴う変化の両方を兼ね備えている動詞ということになる。また、使役移動変化動詞のほかに他動詞として「刺す」「飾る」「巻く」などを、自動詞として「満ちる」「埋まる」「詰まる」などを挙げている。

一方、川野（2001）は状態変化構文（例：壁の穴をセメントで塞ぐ）に生起するが、位置変化構文（例：*壁の穴にセメントを塞ぐ）に生起しない交替不可能な動詞との比較を通して交替可能な動詞の特徴を提示し、下記の二つの条件を満たす動詞が交替を成立させると論じている。

- ① 状態変化構文において、運動完了時のデ格句の実体の存在のあり方を指定する。
- ② 状態変化構文において、「デ格句の実体（＝位置変化物）の占める空間 ≤ ヲ格句の実体（＝場所）を占める空間」という大小関係を指定する。

つまり、①は動詞がデ格句の実体の位置変化に注目する動詞であることを示している。②については、位置変化物（上記例：「セメント」）の占める空間と場所（上記例：「壁の穴」）の占める空間の大小関係を指摘している。

以上、「形式と意味」と「動詞の種類」に分け、壁塗り構文の特徴の概略を述べ、壁

塗り構文は、格パターンや用いられる動詞・名詞句によって意味内容が異なることを示した。したがって、二つの格パターンは、パラフレーズには解釈できないことになる。

2. メタファー表現の文法的制約に関する先行研究

空間は人間が直接身を置くことのできる場所であり、視覚や触覚によって直接把握できる具体的な存在である。一方、時間は我々が五感などによって直接把握できる対象とは考えられず、空間に比べて抽象的な存在であると言える。この抽象的な概念である「時間」は、複数の種類のメタファーによって形成されている。例えば、(11a)と(12a)の下線はそれぞれ空間移動の意味で用いられているが、(11b)と(12b)は時間的意味として用いられている。しかし、(11d)と(12d)は、用法上の制約があるため非文となる。(11d)の場合は、複合動詞としてメタファーは容認されるが、本動詞としては容認されない。(12c)は、格助詞が後続しており「近く」が名詞化している例であるが、メタファーとしての時間的な意味(12d)においては、このような用法は使えない。(11b)や(12b)の例は、既に慣用化されており、メタファーとしての使用意識はほとんどないかと思われるが、メタファー表現として使用される場合に文法的な制約が存在していることは、明らかである。

- (11) a. 土を植木鉢から取り出した。(空間)
b. 突然雨が降り出した。(時間)
c. 植木鉢をベランダに出す。(空間)
d. *突然雨が出した。(時間)
- (12) a. A 大学は駅から近い。(空間)
b. 平和が来る日は近い。(時間)
c. 近くで悲鳴のようなものが聞こえた。(空間)
d. *近くでこの計画が実施される予定である。(時間)

以下では、壁塗り構文における文法的制約に関する先行研究を取り上げる。

岸本(2001)は、下記のような例文を挙げ、壁塗り構文にかかわる名詞句には具象的な事物を指すものは可能だが抽象名詞の場合は可能でないものが存在することを指摘している。

- (13) a. *市長は、欲望にお金を満たした。
b. 市長は、お金で欲望を満たした。

- (14) a. 課長は、大きな杯に日本酒を満たした。
 b. 課長は、大きな杯を日本酒で満たした。

(岸本 2001 : 115)

(13)と(14)は、他動詞「満たす」の例であるが、(13a)のように「欲望」という抽象名詞の場合は、「欲望」が具体的な容器のように感じられてしまい、メタファーとしての意味では非文と解釈される。それに対し、(14)のように「大きな杯」と具体的な事物を指す場合は、その制約はないと説明している。大石(2010)は、岸本の分析内容を引用し、「欲望」を容器としてみるメタファーの実現が構文的に制約されていることの可能性に触れている。

さらに、岸本は英語の例(15)を挙げて、excitementのような抽象名詞は移動物として認知されず、その結果主語にはなれないが前置詞 with の目的語となることはできると指摘している。他方、(16)にあるように移動物である bees は問題なく両方に用いることができる。この点について岸本は、物理的な移動が可能かどうか文の容認性の判断基準になっていると分析している。

- (15) a. *Excitement buzzed in the garden.
 (*興奮が庭にざわめいた)
 b. The garden buzzed with excitement.
 (庭は興奮でざわめいた)

(岸本 2001 : 114)

- (16) a. Bees buzzed in the garden.
 b. The garden buzzed with bees.

岸本は、壁塗り構文の条件として使用される動詞に移動物の動きを指定する意味があり、かつ移動の結果とし場所に影響を与えるという意味があることを挙げている。しかしながら、メタファーが使用される際にどのような制約がかかり、また、その制約の動機付けについては言及されていない。

また、大石はメタファー表現の実現において、一方の構文形式が交替する他方の構文と比べて好まれるという言語現象について数値データを用い検証している。しかし、その際に働く認知的な動機付けについて詳細な分析は行っていない。

そこで次節では、認知言語学の分析方法の一つであるイメージ・スキーマを用い、壁塗り構文におけるメタファー表現の制約に関わる認知的な動機付けの解明を試みることにする。

3. イメージ・スキーマ⁽⁶⁾による考察

3.1 イメージ・スキーマと言語現象

山梨（2009, 2012）は、日常言語の構文の拡張関係の多くの部分は、図1のようにメタファーによる拡張を基盤とすると述べている。「襲う」という動詞を例に挙げれば、具象的な領域にある有生の主語(17a)「狼」が同じく具象的な領域になる無生の主語(17b)「大型台風」に拡張し、さらに抽象的な領域にある無生の主語(17c)「経済不況」へと変化すると説明できる。

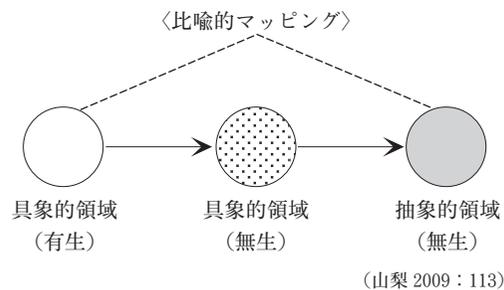


図1

- (17) a. 狼が獲物を襲った。
b. 大型台風が日本各地を襲った。
c. 経済不況がその国を襲った。

次に〈容器〉のイメージ・スキーマを例にイメージ境界のブリーチング⁽⁷⁾の認知プロセスについて確認する。(18a)の「校舎」は、物理的な容器として境界領域は明確である。それに対し、(18c)は境界領域が相対的に背景化されている。つまり、(18c)においては、明確な境界領域をもった出所を想起することはできない。このブリーチングのプロセスは(18a)から(18c)の方向に変容している。図2は、知覚的な経験を介して形成されるイメージに対応したものである。図2から〈容器〉のイメージ・スキーマ自体は変容せずに、その特徴がトポロジー的に継承されていることがわかる。同様に例(19)においても物理的空間から社会的空間そして心理的空間へと比喩的に拡張していることが分かる。〈容器〉のイメージ・スキーマは、図3のようになるが、ここでもイメージ・スキーマは、トポロジー的に継承されているが境界があいまいになっていることが分かる。

- (18) a. 校舎から子どもが出てきた。
 b. 歯茎からウミが出てきた。
 c. 東から月が出てきた。
- (19) a. A氏は会議室にいる。(図3a)
 b. A氏は会社の要である総務部にいる。(図3b)
 c. A氏は幸せの絶頂にいる。(図3c)

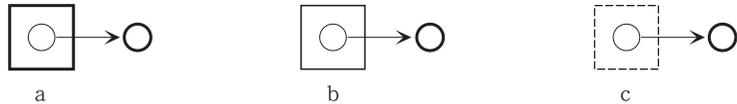


図2

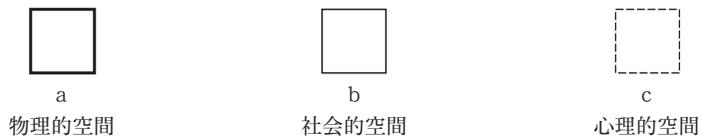


図3

山梨(1995)は、箱から物を出し入れするという我々の日常的な身体経験を通して「空間の一部が境界のある領域として認知される。我々はこの種の経験を介して容器のイメージ・スキーマを作り上げている。このスキーマは、我々をとりまく世界の一部を一種の入れ物として外部の空間から限定して理解することを可能とする認知枠の一種として機能している」と説明している。

次に〈容器〉のイメージ・スキーマとともに基本的なイメージスキーマとされる〈起点—経路—到達点〉のイメージ・スキーマを例に挙げる。ある対象がある経路に沿って移動するという状況を把握する場合、通常は移動の経路がプロファイルされ、そこに焦点が置かれることを示すが、焦点が移動の到達点に置かれる場合も考えられる。

- (20) a. Sam walked over the hill.
 b. Sam lives over the hill.

(山梨 2009 : 96)

(20a)では、経路としての the hill がプロファイルされるのに対し、(20b)では経路ではなく the hill を越えた到達点のプロファイルされている。この両者の認知プロセスの違いを山梨は図4に示している。

they function primarily as abstract structures of images. They are gestalt structures, consisting of parts standing in relations and organized into unified wholes, by means of which our experience manifests discernible order.

(Johnson 1987 : 205)

「人間の身体的運動、物体の操作、そして知覚的相互作用には、繰り返し生じるパターンがあり、このパターンがなければ、われわれの経験は混沌として理解不能なものになってしまう。」このパターンがイメージ・スキーマであり、組織化されたゲシュタルト構造をもつイメージ・スキーマは概念形成や事態把握に強く関係していると考えられる。特に Johnson はイメージ・スキーマのもつゲシュタルト的特徴を強調している。

3.2 イメージ・スキーマと壁塗り構文

動詞は、中心的役割を担う「参与者役割 (participant role)」と構文が持つ意味の中で文法項が担う要素「項役割 (argument role)」から構成されている。例えば、動詞「満たす」の参与者役割は、「満たす人」と「満たされる物」であり、「満たす人」は省略されることもある。

「満たす」(22a)が何をプロファイルされているかは、動詞「注ぐ」(23)と比較すると明確になる。「注ぐ」は注ぐという行為に比重が置かれている。一方、(22a)の「満たす」は、行為の結果に比重が置かれていることが分かる。「満たす」も「注ぐ」も同じような意味的なフレームを喚起しているが、プロファイルされる参与者役割が異なることになる。

- (22) a. タンクを燃料で満たす。
 ←満たすという行為の結果をプロファイル
- b. タンクに燃料を満たす。
 ←満たすという行為をプロファイル
- (23) Aさんは、コップに水を注いだ。
 ←注ぐという行為をプロファイル
- (24) a. 自分の人生を幸運で満たす。
 b. *自分の人生に幸運を満たす。

(24)の例は、「満たす」という行為の結果をプロファイルする場合は、正文となるが、行為をプロファイルする場合は、非文になることを示している。

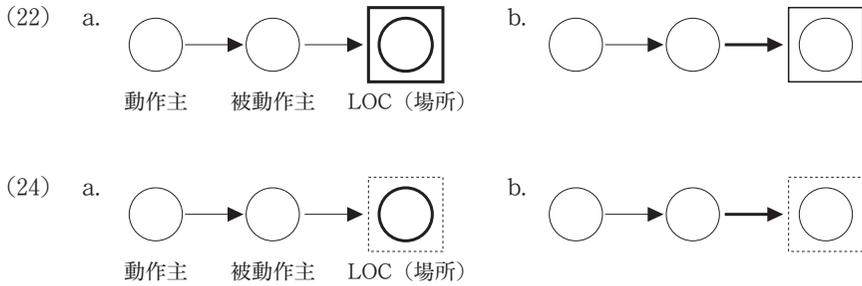


図 6

図 6 のイメージ・スキーマから分かるように(22b)は「満たす」という行為をプロファイルするため〈容器〉のメタファーである「自分の人生」という境界が曖昧なものには満たすことはできないことになる。一方、(24a)は行為の結果である状態がプロファイルされるので問題ないと判断できる。

以上のことから「満たす」のプロトタイプとして解釈される「～を～で満たす」はメタファーによって構文を拡張することが可能であるが、非プロトタイプと考えられる「～に～を満たす」は、それができないことになる。つまり、行為の結果にある状態変化が焦点化されている時は、メタファーが介入できることになる。

では、以下の構文は、どのように分析することができるだろうか。

- (25) a. 電話のベルが部屋中に鳴り響いた。
 b. 電話のベルで部屋中が鳴り響いた。
- (26) a. 彼の名がフランスばかりかヨーロッパ全土に鳴り響く。
 b. *彼の名でフランスばかりかヨーロッパ全土が鳴り響く。

複合自動詞である「鳴り響く」の参与者役割は、「鳴らせる人」と「鳴る物」であり、項役割は鳴らせた結果響く場所ということになる。動詞「鳴る」の場合も参与者役割が「鳴らせる人」と「鳴る物」であるが、「響く」という動詞が加わることで場所が必要となる。したがって、(25a)では、「電話のベル」がプロファイルされており、(25a)の方がこの構文のプロトタイプであると言える。プロトタイプであれば、メタファーを介して拡張することができるので、(26a)は可能だが、(26b)は不可能ということになる。つまり、構文においてプロトタイプと判断できる場合は、メタファーによる拡張が可能となるが、非プロトタイプの解釈が与えられる場合は、それができないと言えるのではないだろうか。この言語現象については、容器のイメージの観点からも分析できる。(26)の「ヨーロッパ全土」は、(25)の「部屋」に比べ、境界領域が相対的に背景化されており、場所をプロファイルする(26b)は容認されないことになる。

- (27) a. 部屋を花で飾る。
 b. 部屋に花を飾る。
- (28) a. 甲子園デビューを初完封で飾る。
 b. *甲子園デビューに初完封を飾る。

(27)では、場所(部屋)の変化の程度を指す「全体的解釈」と「部分的解釈」が関わっている。(27a)では、場所目的語構文において状態変化が完了する事態が起こっていると解釈されるので、全体的解釈がなされる。一方、(27b)では、部屋全体である必要はなく、部屋のどこかに花を飾るといった部分的解釈ができる。したがって、(28b)の甲子園デビューのどこかに初完封を飾るといった意味は成立しないことになり、メタファー表現である「飾る」は使えないことになる。

構文交替について黒田(2004)は、交替は「する」「しない」の二者択一ではなく程度の差があり、交替には方向性が認められると指摘している。P1:「(Zが) XをYでVする」が基本でP2:「(Zが) XにYをVする」が派生的であり、P1→P2という方向性を持つ場合と、P2:「(Zが) XにYをVする」が基本でP1:「(Zが) XをYでVする」が派生的でP1←P2という方向性を持つ交替があるという指摘である。ここでの「派生的」については、「派生は実体ではなく、単に『派生があるように見える』だけであると補足している。実際は、P1←P2の例は、少なく、研究対象として扱われてこなかった。上記の例(24a)「自分の人生を幸運で満たす。」は、まさしく方向性を考慮すれば、基本であり、(24b)「自分の人生に幸運を満たす。」は、基本ではないことになり、メタファー表現の使用に関する制約の動機付けを支持するものであると考えられる。

このようにイメージ・スキーマを言語現象の分析に用いることにより壁塗り構文におけるメタファー表現の文法上の制約の認知的な動機付けを明らかにすることができる。

結 語

本稿では、壁塗り構文に見られるメタファー表現の文法上の制約を明らかにし、その認知的な動機付けについて認知言語学的手法であるイメージ・スキーマを主に用い分析した。分析の際にイメージ・スキーマの中でも重要度が高いとされる〈容器〉のイメージ・スキーマと〈起点—経路—到達点〉のイメージ・スキーマを用いることの有効性を示した。その結果、メタファー表現は、プロトタイプと考えられる基本的な構文には使えるが、具象的な表現とは異なり、非プロトタイプである派生的に見られる構文には制約がかかることが明らかになった。

我々は、メタファーの実現に際し、語彙の選択だけではなく、構文も選択の対象にしていると言える。壁塗り構文以外にもメタファー表現と相性のよい構文が選択されるケースが考えられる。今後は、統計的処理を使い、より客観的にそのような事象の分析を試みたい。

《注》

- (1) メタファーという用語の意味には、比喻全般を意味する広義のメタファーと隠喩と言われる狭義のメタファーがある。広義のメタファーはレトリックや修辞という用語とほぼ同じ意味で使用される。本稿では、狭義のメタファー（隠喩）を対象とする。
- (2) 〈人生は旅〉という概念メタファーにおいては、「人生」を目標領域、「旅」を起点領域と考え、「人生」を語る時に「旅」の領域にある言葉を用いる。(例) 人生も半ばにさしかかり、到着点も見えてきた。
- (3) 概念ブレンディング理論は、メンタル・スペース理論 (theory of mental spaces) から発展したものであり、概念形成の基本パターンに関する理論である。この理論では、概念メタファー理論で用いられる「目標領域」と「起点領域」というような区別はせず、この2つに相当するインプット・スペース (input spaces) を設定し、創発的構造をもつ融合スペース (blended space) を構築している。メタファー表現の中には、起点領域から目標領域への写像だけでは説明できない言語現象を概念ブレンディング理論ではそれを可能にするとされる。つまり、ブレンディングの観点からメタファーを統合的に捉えることができると提唱している。
- (4) 壁塗り交替や場所格交替とも呼ばれる。交替という言語現象は、同じ名詞句と同じ動詞が共起している表現において真理の意味を変えずに、その格助詞の組み合わせが変わる現象であるとされている。しかし、交替はせず、意味の調節において構文が選択されるだけであるという指摘がある (黒田 2004) ので、本稿では便宜上「壁塗り構文」という用語を使用する。また、本稿の目的は、交替が起こっているか否かを問題提起することではない。認知言語学における「構文」とは、意味と形式のペアから成り立ち、プロトタイプと拡張の幅を有した言語的に有意なまとまりであると考えられている。つまり、構文それ自体が意味を担う言語単位であると考えられる。
- (5) 格パターンとは、文における名詞や動詞を捨象して格助詞のみを取り出した型であり、日本語の構文レベルの形式を担うものである。
- (6) イメージ・スキーマ (image schema) は、経験基盤主義に立脚した認知言語学で使われる用語であり、様々な身体経験をもとに形成されたイメージを抽象化・構造化した知識形態である。我々は、この抽象化されたゲシュタルト構造をもつイメージ・スキーマをもとに推論などを行っている。認知言語学的なアプローチにおいては、言語表現の意味拡張や構文レベルの構文的拡張などの分析に用いられている。例えば「容器のスキーマ」の基本構造は、内側・境界・外側から成り立っている。これは、我々の身体を（食べ物などのための）容器として捉えたり、（建物などの中に）含まれるものとして捉えたりする身体的経験に基づいている。
- (7) 本来の具体的な内容をもつ語彙の意味が抽象化していく意味変化の言語現象をブリーチングあるいは希薄化と言う。

参考文献

- 伊東朱美 (2015) 「日本語の移動変化動詞と場所格交替」『留学生日本語教育センター論集 41』 pp. 95-105. 東京外国語大学.
- 伊藤健人 (2008) 『ひつじ研究叢書〈言語編〉第 64 巻 イメージ・スキーマに基づく格パターン構文——日本語の構文モデルとして』ひつじ書房.
- 伊藤健人 (2013) 「イメージ・スキーマ」森雄一ほか (編) 『認知言語学 基礎から最前線へ』くろしお出版.
- 大石亨 (2010) 「メタファー実現への文法的制約とその動機付け」『明星大学研究紀要』第 17・18 号 明星大学情報学部.
- 大月実・進藤三佳・有光奈美 (2019) 『認知日本語学講座第 4 巻 認知意味論』くろしお出版.
- 小野寺美智子 (2011) 「概念メタファー理論に関する一考察——メタファーの認知的基盤と動機——」『拓殖大学語学研究』第 124 号 拓殖大学言語文化研究所.
- 小野寺美智子 (2018) 「時間メタファーへの認知的アプローチ——日本語の時間表現を中心に——」『拓殖大学論集人文・自然・人間科学研究』第 39 号 拓殖大学人文科学研究所.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店.
- 笠貫葉子 (2013) 「メタファー」森雄一ほか (編) 『認知言語学 基礎から最前線へ』くろしお出版.
- 川野靖子 (2001) 「いわゆる『壁塗り代換』における動詞の条件」『筑波日本語研究』6 号 pp. 61-72. 筑波大学.
- 岸本秀樹 (2001) 「壁塗り構文」影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』pp. 100-126. 大修館書店.
- 岸本秀樹 (2012) 「壁塗り交替」澤田治美編『ひつじ意味論講座 第 2 巻 構文と意味』pp. 177-200. ひつじ書房.
- 黒田航 (2004) 「いわゆる『壁塗り交替』について——構文は交替しない、単に(意味の相互調節に基づいて)選択されるだけである——」第 29 回関西言語学会 発表資料.
- 黒田航 (2007) 「比喩理解におけるフレーム的知識の重要性: 比喩表現の程度の差を明示できる比喩の記述モデルの提案」楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』ひつじ書房.
- ジョン・R. テイラー (2017) 西村義樹ほか編訳『メンタル・コーパス 母語話者の頭の中には何があるのか』くろしお出版.
- 瀬戸賢一 (2002) 「メタファー研究の系譜」『月刊 言語』第 31 巻 第 8 号 大修館書店.
- 中本敬子 (2012) 「メタファー理解プロセスと意味」『ひつじ意味論講座 第 6 巻 意味とコンテクスト』pp. 147-164. ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗 (2011) 『日本語のメタファー』くろしお出版.
- 松本曜 (2006) 「語におけるメタファー的意味の実現とその制約」山梨正明ほか (編) 『認知言語学論考 No. 6』pp. 49-93. ひつじ書房.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房.
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論——文法のゲシュタルト性』大修館書店.
- 山梨正明 (2012) 『認知意味論研究』研究社.
- Evans, Vyvyan (2019) *Cognitive Linguistics: A Complete Guide*. Edinburgh University Press.
- Fauconnier, G. and M. Turner. (1996) *Blending as a Central Process of Grammar*. In Goldberg, A. ed., *Conceptual Structure, Discourse and Language*. Stanford: CSLI publications.
- Feldman, Jerome A (2006) *From Molecule to Metaphor: A Neural Theory of Language*. MIT Press.

- Fillmore, C. (1966) *Toward a Modern Theory of Case*. Ohio State Univ. [田中春美・船城道雄 (訳) (1975) 『格文法の原理：言語の意味と構造』三省堂]
- Grady, J. (1997) *THEORIES ARE BUILDINGS*. In *Cognitive Linguistics* 8-4, pp. 267-290.
- Indurkha, Bipin (2016) *Toward a Model of Metaphorical Understanding*. In E. Gola and F. Ervas (Eds), *Metaphor and Communication*. John Benjamins Publishing Company.
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. University of Chicago Press. [菅野盾樹・中村雅之 (訳) (1991) 『心の中の身体』紀伊国屋書店]
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press [渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) 1986 『レトリックと人生』大修館書店]

関連 URL

国立国語研究所 コーパス検索アプリケーション「中納言」 <https://chunagon.ninjal.ac.jp>

(原稿受付 2019年11月5日)

スペイン語の母音長の一考察

— 母語話者の発話分析と長音を用いたカタカナ表記から —

松本 旬子

A Consideration of Spanish Vowel Duration

— Through an Analysis of Spanish Utterance and the Use of a Long Sound Symbol in the Japanese “katakana” Notation

Junko MATSUMOTO

SUMMARY

The aim of this study is to reveal Spanish vowels duration through an analysis of four Spanish native speakers pronunciation of Spanish phoneme continuums /C₁VC₂V/, which includes obstruent in C₁ and liquid in C₂, and the use of a long sound symbol (ー) in the Japanese “katakana” notation. The results suggest that these things; the Spanish can pronounce atonic vowels longer than tonic ones and each syllables by almost the same duration. On the other hand, we confirm that to avoid a long sound symbol producing tonic vowel in katakana notation is expected because there is not duration difference between tonic and atonic. Besides, there is not any definitive rule to use it. Therefore, we propose that, to acquire idiomatic Spanish pronunciation, native Japanese speakers should try to realize every syllables by the same duration not as like as the Japanese “katakana” notation with a long sound symbol.

Keywords: Spanish, vowel, duration, pronunciation, a long sound symbol, katakana notation

1. はじめに

言語をコミュニケーションの手段であると考えた学習者にとっては、学んでいる外国語をその母語話者のように「流暢に」話せるようになることだけが目標ではない。このことに異議のある人は少ないだろう。しかし少なくともコミュニケーションに支障をきたさないレベルの発音を身につけなければ、せっかく学んだ外国語もコミュニケーションの手段として機能せず、活用されずに終わってしまうことがある。

スペイン語を学ぶ日本語母語話者がその学習を無駄にしないために、学習者がスペイン語らしさを身につけるために、私たちスペイン語教員はどのような指導をすべきか。本稿では、スペイン語の母音長を考察する。スペイン語をカタカナ表記する際に見られる長音記号の使用の揺らぎに着目し、スペイン語母語話者は母音をどのくらいの長さで発しているのか検証し、理論面と実践面からの考察を試みる。そして最終的には日本語母語話者がスペイン語らしさを獲得するための具体的な提案を行うことを目標とする。

2. 先行研究と本稿の位置付け

2.1. 日本語母語話者のスペイン語の発音

かねてから日本語母語話者がスペイン語を発する際に行う方略として、他外国語の発音時同様、語中音挿入や語末の母音添加などが指摘されてきた（興津 1992, p.160; ロボ他 1993, p. XXVII; 北村・ルエダ＝デ＝レオン 1995, p.8, 木村 2015, p.10）。日本語が基本的には許容しない子音連続や閉音節に母音が挿入・添加されるためである。

ところが松本（2017）で行った日本語母語話者とスペイン語母語話者による発話分析で、日本語母語話者の音素連続/CCV/に見られる音挿入はスペイン語母語話者の elemento esvarabático⁽¹⁾と変わらないと考えられること、むしろ日本語母語話者は(/CV₁CV₂/の V₁の)母音をスペイン語母語話者ほど長く発していない点が問題視されること、その結果/CCV/と/CVCV/を区別せずに発話しているのではないかと思われる話者がいること、などが明らかになった。日本語母語話者にとってそう難しいとも思えない/CVCV/の発音が(/CrV/間に見られる)音挿入よりも、スペイン語らしさを獲得する妨げとなっているようなのである。

2.2. スペイン語のカタカナ表記に用いられる長音記号

外国語の音をカタカナ表記することが是か非かの議論はあるが、初学者用の教科書で原文にその「読み方」がカタカナで併記されているのを目にすることは少なくない。日本語以外の音を日本語で表現しようとするために限界があるのは当然であるが、スペイン語のカタカナ表記については特に長音表記の使用にばらつきがある。その例を確認する。

(1)にあげるのは、長音を用いないカタカナ併記を他で見たことがあると、経験的に筆者が判断したスペイン語の単語である（アクセントのある音節を下線で示す）。

(1)

「ドゥーチャ (ducha)」、「ビアーヘ (viaje)」(以上、中野 (2014, pp.12-13))

「アミーゴス (amigos)」、「エントゥラーダ (entrada)」(以上、山内他 (1998, pp.

18-19))

「ノソートロス (nosotros)」、「ティーオ (tio)」(以上, 瓜谷他 (2015, p. 22))

長音記号がスペイン語のアクセントのある母音⁽²⁾に続いて用いられていることがわかるが, 前述のとおり(1)で取り上げた単語は他では長音を用いずに表されることもあるのであった。「スペイン語のアクセント位置に相当するカタカナに音引き「ー」をつけるか否か(中略)に, 書き手の好みによる異論や, 同じ書き手でも単語によるゆらぎが生じ」(東京大学スペイン語部会 2008, p. iii) と言われる所以である。いつ用いていつ用いないかと言った指針はなく, 表記はもっぱら著者の判断に依っているのが現状だ。

2.3. 本稿の位置付け

これまでの筆者の研究で日本語母語話者は/CV₁CV₂/のV₁をスペイン語母語話者に比べて長く発していないことがわかっているが, 実際に/CVCV/をどのように発音すべきなのか。それを明らかにするために模範となるスペイン語母語話者の/CVCV/の発話がより丁寧に分析される必要がある。したがって本稿では, スペイン語母語話者が単語の語頭に現れる/CV₁CV₂/をどう発するか, 特にその母音(V₁・V₂)をどのくらいの長さで発するかを分析する。

同時に, スペイン語をカタカナ表記する際に長音表記を用いるか否かの揺らぎの根拠を探る。長音記号が用いられるアクセントのある母音は長音表記すべきほど長いのかをまず理論面から考え, つづいてスペイン語母語話者の/CVCV/の発話分析で示された結果と照らし合わせて考察する。

3. カタカナ表記で長音記号が用いられるスペイン語のアクセントのある母音は長いのか

3.1. 『スペインハンドブック』(原他 1982)に見られる固有名詞(地名)のカタカナ表記

スペイン語をカタカナで記すにあたり, 特に長音記号の使用に関して揺らぎが大きい中で, 『スペインハンドブック』(原他 1982)は「仮名表記の確立に向けてなされた一つの優れた試み」(安富 1992, p. 81)と評価できるかもしれない。1冊の本の中で使用するカタカナ表記の原則が定められているのである。同書で用いられるカタカナ表記の基準は「なるべく日本人の耳に聞こえる通りに表記」(原他 1982, p. vii)することである。そこで実際に同書で用いられているスペイン語固有名詞(地名)のカタカナ表記の中から12の例を(2)に抜き出した。

(2)

- | | | | |
|------------|------------|------------|----------|
| 1. バルセローナ | 2. アンダルシーア | 3. トレード | 4. バレンシア |
| 5. サンタンデール | 6. バダホース | 7. サンタ・クルス | 8. テルエル |
| 9. ビルバーオ | 10. マラガ | 11. パナマ | 12. ペルー |

一般的に定着している固有名詞（地名）のカタカナ表記よりも、長音表記が多用されている印象を受ける。たとえば、外務省のスペイン王国の基本事項を紹介するホームページで1. は「バルセロナ」と表記されている。

つづいて、これら固有名詞の原語のつづりを(3)に示す。アクセントのある音節は下線で示す⁽³⁾。なお、7. は複合的な地名であり、それを構成する前の構成素（Santa）は「通常強勢語であるが、アクセント句の一部を構成する場合は無強勢となる」（寺崎 2017, p. 82）ことからアクセントは後の構成素（Cruz）にのみかかると判断する。

(3)

- | | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. Barcel <u>o</u> na | 2. Andaluc <u>í</u> a | 3. Toled <u>o</u> | 4. Valenc <u>i</u> a |
| 5. Sant <u>a</u> nder | 6. Badajoz | 7. Santa <u>C</u> ruz | 8. Teruel |
| 9. Bilb <u>a</u> o | 10. M <u>a</u> laga | 11. Panam <u>a</u> | 12. Per <u>u</u> |

(2)と(3)を参照すると、やはりアクセントのある母音にいつも長音記号が用いられるわけではないことが確認できる。

3.2. スペイン語の母音の長さ

山田（1998, p. 24）はスペイン語は「英語のようにアクセントのある母音を約2倍に延ばしたりすることはない」としながらも、「強いて言えば、通常の発話における母音の長さは、長・中長・短の3種類に分けることができる」と語の中での位置によって母音を分類している。これは Navaro Tomás（2004, pp. 199-202）で言及された分類であるが、表1に山田（1998）がまとめた形で表を転記する。該当するアクセントのある母音を含む音節を下線で示した。

そこでこの分類に(3)をあてはめてた（表2参照）。なるほど「3. 短い母音」に分類されるものに長音表記は見られない（バレンシア、マラガ）。ところが、「1. 長い母音」に分類される1. の i, ii)には、長音表記されているもの（ペルー、サンタンデール、バダホース）と、されていないものがある（パナマ、クルス）。「2. 中程度に長い母音」に分類される中では、i)はすべて長音表記されている（バルセローナ、アンダルシーア、トレード、ビルバーオ）が、ii)は長音表記されていない（テルエル）。

表1 山田 (1998, p.24) による母音の長さの分類

1. 長い母音	i) 語末の音節中のアクセントのある母音: <u>cantó</u> , <u>comí</u> , <u>cantád</u> , <u>virtud</u>
	ii) 語末の音節で後に l, n 以外の子音が続くアクセントのある母音: <u>amar</u> , <u>trabajador</u> , <u>país</u>
2. 中程度に長い母音	i) 終わりから2番目の開音節中のアクセントのある母音: <u>casa</u> , <u>comida</u> , <u>oro</u>
	ii) 語末の音節で後に l, n が続くアクセントのある母音: <u>cristal</u> , <u>Juan</u> , <u>estación</u>
3. 短い母音	i) 終わりから2番目の閉音節中のアクセントのある母音: <u>carta</u> , <u>hurto</u> , <u>tonto</u>
	ii) 終わりから3番目の音節中のアクセントのある母音: <u>cántaro</u> , <u>níspero</u>

表2 山田 (1998, p.24) による母音の長さの分類とスペイン語の固有名詞の例

1. 長い母音	i) 語末の音節中のアクセントのある母音: <u>Panamá</u> パナマ, <u>Perú</u> ペルー
	ii) 語末の音節で後に l, n 以外の子音が続くアクセントのある母音: <u>Santander</u> サンタンデール, <u>Badajoz</u> バダホース, <u>Santa Cruz</u> サンタ・クルス
2. 中程度に長い母音	i) 終わりから2番目の開音節中のアクセントのある母音: <u>Barcelona</u> バルセロナ, <u>Andalucía</u> アンダルシア, <u>Toledo</u> トレード, <u>Bilbao</u> ビルバオ
	ii) 語末の音節で後に l, n が続くアクセントのある母音: <u>Teruel</u> テルエル
3. 短い母音	i) 終わりから2番目の閉音節中のアクセントのある母音: <u>Valencia</u> バレンシア
	ii) 終わりから3番目の音節中のアクセントのある母音: <u>Málaga</u> マラガ

3.3. アクセントの規則

日本語となった外来語には「語末から3番目のモーラを含む音節にアクセント核を付与する」(窪蘭 1999, p.203) とするアクセントの規則がある。一方スペイン語のアクセントは、原則として、母音・n・sで終わる語の場合は後ろから2番目の母音に、n・s以外の子音で終わる語の場合は一番後ろの母音にある。それ以外の位置にアクセントがある場合は、アクセントがある音節の母音にアクセント記号(´)をつける。(3)ではこの外来語のアクセントの規則とスペイン語のアクセントの規則が一致しない場合に、スペイン語のアクセントを優先して長音記号が用いられているようだ(例:“Toledo”は外来語のアクセントの規則に従うと「トレード」となるが、スペイン語では「レ」にアクセントが置かれるので「トレード」と表現されている)。しかし、やはり例外もある(“Teruel”, “Panamá”は外来語のアクセントの規則に従うと「テルエル」・「パナマ」となるはずだが、「テルエール」・「パナマー」とは表記されていない)。

3.4. まとめ

そもそも『スペインハンドブック』(原他 1982) は日本語母語話者に聞こえるように表記すると謳っているものであるため、理論上の定義と一致するわけではないのかもしれない。しかし実際に知覚調査がなされた結果に基づくものなのか、その根拠も示され

ていない⁽⁴⁾。

外国の固有名詞のカタカナ表記には絶対的な法則がないのであれば⁽⁵⁾，1冊の本の中で表記原則を定め統一を図るのは大事なことであろう。しかし同書は，音声学的観察結果を尊重すると述べながらも従来慣用表記は尊重しており，原則の例外が多い⁽⁶⁾。スペイン百科事典のようなものを目指すという執筆の目標は十二分に達成されていると考えるが，単純にスペイン語のカタカナ表記，特に長音表記という点に注目するならば煩雑を極めるだけである。

このように，同書に限らず，著者の嗜好に依って用いられる（あるいは用いられない）長音表記は，理論上の母音の長短とも外来語や原語のアクセントの規則とも一致しないことがわかった。この結果から長音表記が多用されることに疑問を抱かざるを得ず，その使用についてはより慎重になるべきであると考えられる。

4. スペイン語母語話者による/CVCV/の発話分析

4.1. 方法

取り扱うのはスペイン語の二重子音⁽⁷⁾ 12種類（pr, br, fr, cr, gr, tr, dr, pl, bl, fl, cl, gl）⁽⁸⁾と，同じ子音音素を含む/C₁V₁C₂V₂/に/ki/を後続させた無意味語で，阻害音をC₁に，流音をC₂に持つ。C₁が/p, b, f, k, g/の場合V₁は/u/，C₁が歯破裂音/t, d/の場合はV₁は/o/とし⁽⁹⁾，V₂には母音5種類（/a, e, i, o, u/）を充てた計60種類である。すなわち，CVrVは35種類，CVIVは25種類である（表3参照）。これらの60種類の無意味語がキャリア・センテンス“Leo el término X（「Xという語を読みます」の意）”のX部分にランダムに表示されるパワーポイントを作成した。調査協力者にはMacBook Air（13-inch, 2017; Apple, Tokyo, Japan）のディスプレイに表示されたキャリア・センテンスと無意味語を「自然な速さ」で朗読するよう依頼した。意味語の発音は出身地や社会的地位，居住区などの影響を受ける可能性があるため⁽¹⁰⁾，無意味語を用

表3 使用した60の無意味語（CVrV 35種類、CVIV 25種類）

puraqui	pulaqui	buraqui	bulaqui	furaqui	fulaqui
purequi	pulequi	burequi	bulequi	furequi	fulequi
puriqui	puliqui	buriqui	buliqui	furiqui	fuliqui
puroqui	puloqui	buoqui	buloqui	furoqui	fuloqui
puruqui	puluqui	buruqui	buluqui	furuqui	fuluqui
toraqui	doraqui	curaqui	culaqui	guraqui	gulaqui
torequi	dorequi	curequi	culequi	gurequi	gulequi
toriqui	doriqui	curiqui	culiqui	guriqui	guliqui
toroqui	doroqui	curoqui	culoqui	guroqui	guloqui
toruqui	doruqui	curuqui	culuqui	guruqui	guluqui

いて純粋な音としての分析を試みることにした。

録音は、異なる時期に異なる場所で3回に渡って実施された。1回目は、マドリード⁽¹¹⁾出身の30代女性1人に対し、2009年3月セルバンテス文化センター東京内の教室にてPCMレコーダ（SONY LINEAR PCM RECORDER PCM-D1）とその内蔵マイク（ステレオ）を用いて行なわれた。2回目は、2016年7月初旬に小田原の閑静な住宅街に佇む一軒家の離れで、マドリード出身の50代男女各1人を対象に行われた。3回目は2018年7月初旬、拓殖大学文京キャンパス内の筆者研究室に於いて、カスティージャ・イ・レオン⁽¹²⁾出身の40代男性1人を対象に行われた。2回目・3回目の録音で使用した録音機器はオリンパス マルチトラックリニア PCMレコーダ LS-100とその内蔵マイクである。すべて録音は、調査協力者と筆者のみがいる室内で、突発的な雑音が入らないことを波形上で確認しつつ行われた。

録音した音声を、MacBook Air（同上）にインストールしたAudacity（Audacity Team. Version 2.3.1）で発話ごとに切る編集作業を行ったのち、Praat（Boersma and Weenink. Version 6.0.33）で分析した。音声資料の波形、スペクトログラムを表示し、耳で聞き、波形の振幅が大きくなっているところで母音のあたりをつけ分節ラベリングした。図1に分析例を挙げる。調査協力者1人あたり有効発話数60を4人分、計240発話を分析対象とした。

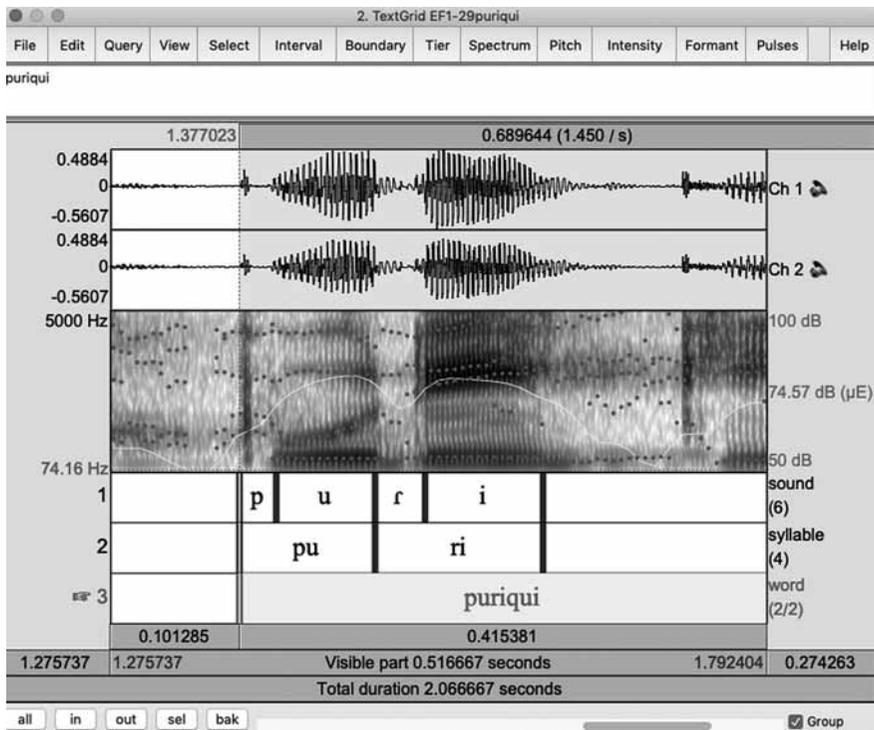


図1 音声資料の分析例（EF1の/purikiの/puriの部分）

4.2. 結果

4.2.1. 母音の長さ

図1のようにラベリングして母音の開始時刻と終了時刻を確定し、持続時間を計測した。結果は表4の通りである。最左列は調査協力者に便宜上つけた番号である。EFはスペイン語母語話者女性、EMはスペイン語母語話者男性を表す。最上段には音素連続の種類と()内にその数を、その下には各調査協力者が発話した該当音素連続内の平均の $V_1 \cdot V_2$ の長さを示した。長さの単位は秒(s)で、小数第4位を四捨五入し小数第3位までを表示した(以下すべての表に共通)。 $V_1 \cdot V_2$ の間には統計的有意差の有無に関わらず数値を比較し不等号記号を記した。最下列は調査協力者4人の平均の値、その上の列は標準偏差である。

まず CV_1rV_2 の欄を見る。EF1だけが V_1 よりも V_2 が長い。他の調査協力者は V_2 よりも V_1 が長く、調査協力者4人の平均値を見ても同様の結果である。EF1は V_1 よりも V_2 がわずかに長かったが有意差は見られなかった($t(34)=0.343, n.s.$)⁽¹³⁾。他の調査協力者3人は V_2 よりも V_1 が有意に長く(EF2: $t(34)=12.967$, EM1: $t(34)=19.089$, EM2: $t(34)=3.222$, すべて $p<.01$)、また調査協力者4人の平均値は V_2 よりも V_1 が長い有意傾向が見られた($t(3)=2.545, .05<p<.10$)。

表4 V_1 と V_2 の長さ(s)

	CV_1rV_2 (35)		CV_1lV_2 (25)	
	V_1	V_2	V_1	V_2
EF 1	0.075 <	0.076	0.059 <	0.078
EF 2	0.105 >	0.053	0.077 >	0.062
EM 1	0.150 >	0.052	0.132 >	0.083
EM 2	0.110 >	0.052	0.700 >	0.061
標準偏差	0.027	0.010	0.266	0.010
平均	0.110 >	0.058	0.085 >	0.071

つづいて CV_1lV_2 を見る。こちらもEF1だけが V_1 よりも V_2 が長い、他の調査協力者は V_2 よりも V_1 が長く、調査協力者4人の平均値も同様の結果であった。EF1は V_1 よりも V_2 が有意に長く($t(24)=4.166, p<.01$)、EF2とEM1は V_2 よりも V_1 が有意に長く(EF2: $t(24)=3.225$, EM1: $t(24)=6.669$, ともに $p<.01$)、EM2は V_2 よりも V_1 が長い有意傾向が見られた($t(24)=2.024, .05<p<.10$)。調査協力者4人の平均値では、 $V_1 \cdot V_2$ 間に有意差は見られなかった($t(3)=0.987, n.s.$)。

4.2.2. 母音の種類別の長さ

表4で示した調査協力者4人の平均値を母音の種類ごとに分類して表示したのが表5である。母音の種類に注目する。V₁が/u/と/o/の2種類あるのはCV₁rV₂である。/u/の平均は/o/の平均よりも長い両者に有意差は見られなかった(CV₁rV₂: $t(33) = 0.489, n.s.$)。V₂を見ると、CV₁rV₂でもCV₁lV₂でも/a/はもっとも長く発せられる母音であることがわかる。CV₁rV₂のV₂は長い方から/a/>/e/>/u/>/i/>/o/となっている。分散分析を行なった結果、群の効果が有意であった($F(4,12) = 5.21, p < .05$)。多重比較⁽¹⁴⁾によると、/a/は/i/と/o/よりも有意に長かった($MSe < 0.01, p < .05$)。CV₁lV₂のV₂は長い方から/a/>/e/>/i/>/u/>/o/となっているが、分散分析を行った結果、群の効果が有意ではなく母音の種類による長さによる有意差は見られなかった($F(4,12) = 1.80, n.s.$)。

表5 母音の種類別長さ

CV ₁ rV ₂ (35)				CV ₁ lV ₂ (25)					
V ₁		V ₂		V ₁		V ₂			
u (25)	0.112	a (7)	0.068	}	}	u (25)	0.085	a (5)	0.077
o (10)	0.107	e (7)	0.061			*	e (5)	0.076	
		i (7)	0.052			*	i (5)	0.071	
		o (7)	0.053				o (5)	0.063	
		u (7)	0.060			u (5)	0.068		

4.2.3. 第一音節(C₁V₁)と第二音節(C₂V₂)の長さ

最後に第一音節(C₁V₁)と第二音節(C₂V₂)の持続時間を計測した結果を表6に示す。音節の持続時間は、それぞれのCとVの合計とした。C₁は有声の場合は声帯振動が始まったところからV₁の開始時刻までを、無声の場合はバーストの直前からV₁の開始時刻までを持続時間とした。C₂はV₁の終了時刻からV₂の開始時刻をその持続時間とした。C₁V₁・C₂V₂の間には統計的有意差の有無にかかわらず数値を比較し不等号記号を記した。

表6 CV₁とCV₂の長さ

	CV ₁ rV ₂ (35)			CV ₁ lV ₂ (25)		
	C ₁ V ₁	<	C ₂ V ₂ (rV ₂)	C ₁ V ₁	<	C ₂ V ₂ (lV ₂)
EF 1	0.114	<	0.128	0.125	<	0.171
EF 2	0.147	>	0.108	0.140	<	0.142
EM 1	0.203	>	0.108	0.213	>	0.169
EM 2	0.138	>	0.103	0.132	<	0.154
標準偏差	0.032		0.009	0.035		0.012
平均	0.150	>	0.112	0.152	<	0.159

C_1V_1 よりも C_2V_2 の平均値が大きかったのはEF1と、EF2とEM2の CV_1lV_2 のときであり、それ以外の発話はすべて C_1V_1 が C_2V_2 よりも長い。4人の平均値は CV_1rV_2 では $C_1V_1(rV_2)$ が長いものの、 CV_1lV_2 では $C_2V_2(lV_2)$ が長い、4人の C_1V_1 と CV_2 の平均値の差は CV_1rV_2 のときも CV_1lV_2 のときも有意ではなかった ($CV_1rV_2: t(3)=1.756$, $CV_1lV_2: t(3)=0.345$, とともに n.s.)。

4.3. 考察

スペイン語のアクセントの規則に従うならば、今回用いた無意味語/ $C_1V_1C_2V_2ki$ /は V_2 にアクセントがある語である。アクセントのある母音は、語の中で最大の調音エネルギーを受け (Quilis 2006, p. 150), 発音には調音器官の緊張を伴うので (アクセントのない) 弛緩時よりも多くの時間を要する。そのため、母音はアクセントがあれば長く、アクセントがなければ短くなると考えられている (Gil Fernández 2005, p. 130)。アクセントの有無による長さの差は大きくはないものの、アクセントのある母音が高いことは Pereira y Soto-Barba (2011), Cuenca Villarín (1996-1997), Marín Gálvez (1995) でも確認されている。ところが、本研究で明らかになった母音の持続時間は、このようなスペイン語の母音に関する現在の一般的な認識や先行研究結果とは異なるものとなった。

唯一、これらに即した結果だったのはEF1の発話である。EF1の発話ではアクセントのある V_2 の平均値がアクセントのない V_1 よりも大きかった。 CV_1rV_2 ではそこに有意差は見られなかったが、 CV_1lV_2 では V_1 よりも V_2 が大きく、その差は有意であった。音素連続を構成する C_2 が r か l かによって、アクセントの有 (V_2) 無 (V_1) が母音の持続時間に有意差を生み出す場合とそうでない場合があるということにはなるが、EF1の発話結果はアクセントのある母音はない母音よりも長くなるという考え方は十分に支持し得るものであろう。しかしEF1以外の調査協力者3人の発話では、 V_2 よりも V_1 の平均値が有意に大きく、 V_1 が長く発せられる傾向があるという結果であった。調査協力者4人のうち1人 (あるいは3人) に見られる事象は、確率・統計の観点からすれば偶然に起こったものではないと言い切れないが ($p=0.6250$, n.s.)⁽¹⁵⁾, アクセントがない母音がアクセントのある母音よりも長く発せられることがあるという事実を示した意義はあるだろう。

Navarro Tomás (1917, p. 372) の調査では、3音節から成り後ろから2番目の母音にアクセントがある語の場合、 V_2 の持続時間を1とすると V_1 は平均で0.56の持続時間を示し、 V_1 は V_2 の半分よりも少し長いとされている。ここで用いられているのは意味語であるが、語の構成は本研究の無意味語/ $C_1V_1C_2V_2ki$ /と同じであるので同様の計算をすると、本研究で得られた調査協力者4人の平均の V_2 の持続時間を1とするならば、

$C_1V_1rV_2$ のときの V_1 は 1.90, $C_1V_1IV_2$ のときの V_1 は 1.20 の持続時間を示すこととなった。 $C_1V_1rV_2$ のときの V_1 は V_2 の 2 倍程度の長さとなった。 V_1 が V_2 よりも長くなった理由は何か。

感嘆や強調のために語末のアクセントのない母音が「i serenooo!, i vivaaa!」といった具合に長くなることはあるが (Navaro Tomás 1917, p.384), 本研究の V_1 は語末の母音でないため、この説明が当てはまらない。

調査協力者の発話を繰り返し聴いているうちに気づいたことがある。調査協力者は次々に現れる無意味語を瞬時に単語としてとらえて発することができず、音節ごとに読み上げたのではないか。そのため V_1 が長く発せられることになったのではないか、ということだ。自然な速度での朗読を依頼しているので適度な速さを保つ注意も要しただろう。アクセントは規則通り V_2 にあるが、ランダムに表示される見慣れぬ無意味語を読み上げている感じが感じられるのである。第一音節を発しつつ第二音節と第三音節を読んでいるために V_1 が長くなったのではないか、とは考えられないか。Pereira y Soto-Barba (2011) が、言語外の要因、たとえば調査に不慣れであると言ったような要素も発話される母音の長さに影響を与え得ると結論づけていることは、この気づきを支持するものと言えよう。ただ、見慣れぬ語を読み上げたことが V_1 が長く発せられた主因であるならば、これは本研究の大きな反省点である。あらかじめ調査協力者に無意味語のリストを見せておく等の準備をしておくべきであった。

とは言え、そもそも本研究で利用したコーパスはこれまでの研究で使用してきたものであるため C_1 は阻害音、 V_1 は /u, o/, C_2 は流音と限られた音素連続であった。しかし、限定的な音素連続であっても無意味語の発話分析を行ったことで、アクセントの有無と母音の長短の新たな関係性を明示することとなった。意味語を用いた先行研究ではスペイン語の母音の持続時間はアクセントがあれば長いと結論づけられていたが、無意味語を用いた本研究結果がそれらとは異なったことは少なからず意味があろう。ある語の中でアクセントのある母音が常にもっとも長く発音されるわけではないこと、その理由は、本研究に於いては推測の域を出ないが、Pereira y Soto-Barba (2011) の説から不慣れな状況であると言った言語外の要因にもスペイン語の母音の長さは影響を受け得る可能性を示唆することができた。

なお、本研究を通して得られたその他の結果として、第一音節 (C_1V_1) と第二音節 (C_2V_2) の長さに有意差がなかったこと、 V_2 についてはその種類によって長さに有意差があったこと⁽¹⁶⁾ が挙げられる。 V_1 と V_2 間に見られた有意差が音節の比較の際には見られなくなった点は興味深い。アクセントのある音節はアクセントのない音節よりも長いとする Navaro Tomás (2004, pp.206-207) の説ではなく、スペイン語には長い音節や短い音節はなく、すべての音節が実際に同じ長さであるとする Iribarren (2005, p.

38) の見解に資する結果であると考えられる。しかし、そもそも音節の等時性とは印象によるもので「物理的な持続時間（長さ）が等しいわけではない」（寺崎 2017, p. 81）と言われているのである。母音の差よりもスペイン語の子音の種類による長さの差は小さいとも言われているが（Navaro Tomás 2004, p. 204）、本研究では C_1 と C_2 の差が V_1 と V_2 の差を埋め合わせる役割を果たしたのか、音節の長さを計測するにあたり定めた計測方法（ C_1 は有声の場合は声帯振動が始まったところから V_1 の開始時刻までを、無声の場合はバーストの直前から V_1 の開始時刻までを持続時間とした一方、 C_2 は V_1 の終了時刻から V_2 の開始時刻をその持続時間としていた）のためか、その理由は今後の研究で明らかにしていきたい。

また、 $/C_1V_1C_2V_2/$ の V_2 の種類によって長さに有意差があったことは、一般的には開口度が広い母音ほど狭い母音よりも長くなる内在的時間長（intrinsic duration）（窪菌 1999, p. 41）がスペイン語にも見られるのかもしれない。この点についても、今後分析数を増やし研究が行われるべきであると考えられる。

5. 発 展

本研究で取り扱った音素連続 $/CV_1CV_2ki/$ は表 1・2 の「2. 中程度に長い母音」の i) にあたり、(2) の固有名詞を参考にすると、 $/CV_1CV_2ki/$ の V_2 は日本語母語話者の耳には長く聞こえるとされ、カタカナで表すときに長音表記が用いられる可能性の高い音素連続であることがわかる。ところが、無意味語を用いてではあるが、実際に発話分析を行ってみると、本研究における母音の持続時間の比較では V_1 が V_2 よりも有意に長かった。理論的には中程度に長いと分類され、たとえ日本語母語話者の耳に長く聞こえる母音だと考えられたとしても、このようにアクセントのある母音がアクセントのない母音よりも短く発せられることがあったのである。スペイン語が音節等時性を持つ言語であると考えられるならば、奇妙な結果ではない。これを踏まえて、筆者は下記の見解を強く支持したい。

アクセントのある音節は若干長めに発音されることがありますが、せいぜい 10 分の 1~2 秒ぐらいで、のぼす音のように意識するほどの長さではありませんので、基本的にはアクセントのある音節もない音節も長さは同じだと考えていてちょうどいいぐらいです。（東京外国語大学言語モジュール）

スペイン語に限らず外国語の音を日本語母語話者が発する際に見られる音挿入・添加の方略については本稿冒頭でも触れたが、カタカナ表記を試みる時にも同様の現象が

起こる。閉音節には母音が添加され、子音連続には母音が挿入されてモーラを形成し、カタカナ1文字が割り当てられる。日本語の音節構造に合わせた形になるため、原語の音に出来るだけ近い状態を表そうとしつつも、音節数と文字（モーラ）数が異なり原語とはだいぶかけ離れてしまうこともある（1音節である“cruz”が3文字（3モーラ）「クルス」となったのはこの一例である（(2)(3)参照⁽¹⁷⁾）。ただこれは開音節を好む日本語の音節構造に合わせる、日本語の文字で記そうとするために致し方なく行われる措置である。しかし、アクセントのある母音を長音表記することは、このような日本語にない音節構造を回避するために用いられる手段とは次元の違う話だ。

日本語はモーラ等時性のリズムを持っており、長音は1モーラである。また音の長短が分別的であり、たとえば母音の長短の音声的対立には [kado]（角）と [kaado]（カード）がある（川原 2013, p. 191）。「トレド」と「トレード」に対立がある訳ではないので、3音節である“toledo”をわざわざ「トレド」ではなく「トレード」と4文字（4モーラ）で表す必要はない。“toledo”は各音節が等時性を持って発音されるべきである。加えて本研究結果でも示唆されたとおり、場合によっては「ト」や「ド」が「レ」よりも長く発せられることもあるのである。アクセントのある「レ」が、理論的に中程度に長い母音であるからと言って、2モーラになるほどではない。

日本語母語話者のスペイン語の発音に見られたアクセントのない母音を短く発する傾向を改善するために、日本語がモーラ等時性を持つ利点を活かし、教員はスペイン語を学ぶ日本語母語話者に対して、“toledo”の3音節（この場合は「トレド」と3モーラと言い換えることもできる）を、それぞれを等しく、だいたい同じ長さになるよう発することを心がけさせることが重要なのだ。これが本研究結果を踏まえた、日本語母語話者がスペイン語らしさを獲得するための発音指導への提案である。

外国語の音をカタカナで書くには限界があるので、筆者個人としてはたとえ初学者に対してであっても外国語にカタカナを併記するのは避けるべきだと考える。初学者はつづりよりも併記されたカタカナを読み、その後も自ら原語にカタカナを振り続け兼ねないからだ。視覚的なインプット（たとえば「トレド」と「トレード」の差）がその先の学習にどのような影響を及ぼすのか科学的に証明するのは困難であるが、少なくとも1つの単語ではなく文章を読む段階に差し掛かったときにカタカナを読み上げていては、その内容が非常に伝わりにくいことは、外国語の教員であれば熟知している事実であろう。

しかし固有名詞はカタカナ表記せざるを得ない。課題は多いが（岡本 2018）、日本語母語話者への聞こえ方を基にするにせよ、原語の音をできる限り忠実に再現するにせよ、表記せざるを得ないからには実際に行われた調査分析結果に沿うべきである。聞こえ方を基にするのであれば、幅広く一般的な調査が行われなくてはならないだろう。原語の音の忠実な再現を目指すのであれば、本研究のような原語に関する研究結果を反映すべ

きである。アクセントのあるスペイン語の音を長音表記するか否かは個人の感覚に依るため揺らぎが大きい現状に対し、これまでも用いる必要はないとする使用に消極的な意見は見られていたが、本稿では長音記号は用いるべきではないと一歩踏み込んだ提言をしたい。これが、スペイン語母語話者は必ずしもアクセントのある母音を長く発していないという本研究から得た結論である。

6. おわりに

スペイン語ではアクセントのある音節の母音はより強く、より長く、より高くと特徴づけられており、それゆえ、同じ条件で発せられる場合アクセントのある母音はアクセントのない母音よりも長く大きな音で発音される (Real Academia Española y ASELE 2011, p. 105) と一般的に認識されている。ところが今回の無意味語を用いた発音分析で、アクセントのある V_2 がアクセントのない V_1 よりも短く発せられることがあること、スペイン語の各音節の長さには有意差がないことが明らかになった。また母音の長さはアクセントの有無や種類、語の中での位置のみならず、不慣れた語を読むといった発話状況の影響も受ける可能性があることも示唆された。そして、アクセントのある母音が長く発せられるわけではないとの結果から議論を発展させ、スペイン語をカタカナで表す際にアクセントのある母音を長音表記すべきではないと提言した。

また、各音節の長さが等しくなるように発することを心がける、これが日本語母語話者がスペイン語らしさを身につけるためのキーである明言したのは大きな前進であろう。筆者はこれまでの研究から、日本語母語話者は単純にスペイン語の母音が短くならないよう発することに留意すべきだと考えていた。しかし本研究結果から、短い音節や長い音節ができないよう発することが重要なのだ、との見解に至った。アクセントのある音節の母音の発音は、長音記号を用いて2モーラで表されるような持続時間を目指すのではなく、より強く高くという点を念頭に置く必要がある。そしてアクセントのない音節の母音は、発音がおざなりになることのないよう丁寧に発することを意識すべきである。これらの点に留意して、私たちスペイン語教員は日本語母語話者へ発音指導を行なっていかなければならない。

《注》

- (1) Elemento esvarabático とは、スペイン語母語話者が破裂音 (/p, b, t, d, k, g/) あるいは唇歯摩擦音 (/f/) + はじき音 (/r/) で構成される音素連続 (/pr, br, tr, dr, kr, gr, fr/) を発話した際に、2つの子音間に挿入される母音に近い音響的要素である。Quilis (2006, pp. 337-338) によれば、1892年に Rodolfo Lenz がチリの知識人の間で見られる要素であると初めて指摘したものである。その後 Navarro Tomás (1918, pp. 385-386) や Gili Gaya

- (1921, p. 274), Malmberg (1965, pp. 31-39) によっても言及されており, Real Academia Española y ASALE (2011, p. 252) では「…二重子音の1つ目の子音から(2つ目の子音の)形状へ移行する際の調音器官の支えとして機能する(筆者訳)」と説明されている。また Rico Ródenas (2012, p. 85) は「物理的には存在しているが, スペイン語話者はその要素を聴きもしない(筆者訳)」と述べている。
- (2) スペイン語のアクセントについては 3.3. 参照。
- (3) 注(2)同様, スペイン語のアクセントについては 3.3. 参照。
- (4) 安富(1992)の知覚調査の研究では, 日本語母語話者による長音・短音の判断はアクセントのある音節の母音の持続時間のみに関係する訳ではないと結論されている。
- (5) 興津(1992)は, スペインという国名について, 日本ではイスパニアとスペインという二つの呼称が通用するとし「原語に近い書き方をするのが原則であると謳いながら, スペインのように英語を使っているのは(中略)改めるべきである」(興津 1992, p. 17)と指摘している。
- (6) たとえば Madrid は, 音声学的結果では「マドリー」, 慣習では「マドリード」と「マドリッド」があると考えられるが「日本人はスペイン語の発音に日本語の促音的なもの聞きがちであるが, スペイン語はそれを極端に嫌うので(中略)促音表記は用いない」(原他 1982, p. vii)とし, 「マドリード」を採用する一方, Valladolid は「バヤドリー」とする, など複雑である。
- (7) スペイン語では阻害音・流音連続は1子音として扱われ, これらの子音音素連続を日本におけるスペイン語教育の世界では「二重子音」と呼ぶのが主流である。この呼び名は, 山田(1998), 興津(1992), ロボ他(1993), 北村・ルエダ=デ=レオン(1995)など多数で使用されている。
- (8) スペイン語の二重子音は/b, k, f, g, p, t/+l/および/b, k, d, f, g, p, t/+r/の13種類だが, /tl/を二重子音と取り扱うことには異論があり「(/tl/は二重子音と)見なされないこともある」(山田 1998, p. 21)ため, ここでは除外した。
- (9) 音挿入・音添加には/u, o, i/の可能性があり, 環境によって選択される。/o/は歯茎破裂音/t, d/の次に, /i/は硬口蓋破裂音/tʃ, dʒ/の次に挿入され, /u/はもっとも一般的な挿入母音として多く採用されてきた(いる)(窪菌 1999, p. 231, 小林 2005, pp. 29-30)ため, 本研究でもこの慣習に従った。なお, 無意味語/CV₁CV₂ki/はスペイン語のアクセントの規則(3.3 参照)からV₂にアクセントが置かれることが予想される。
- (10) Pereira y Soto-Barba (2011), Navarro Tomás (1917) 参照。
- (11) 前掲の外務省ホームページの表記に従った。
- (12) 注(11)同様, 前掲の外務省ホームページの表記に従った。
- (13) 対応のある*t*検定(両側)を使用した(以下すべての*t*検定に共通)。
- (14) Holm 法を使用した。
- (15) 直接確率計算1×2(両側)を使用した。
- (16) 4.2.2. で, 母音の種類による長さの差は有意である場合もない場合もあったが, V₂では/a/はもっとも長く発される母音であることは明らかになっていた。
- (17) 下線の母音が挿入・添加され[ku.rú.su] (モーラの切れ目を「.」で示した)3モーラとなる。

参考文献

- 瓜谷良平・瓜谷望(2015)『スペイン語の入門』新版, 白水社。
- 岡本佐知子(2018)「外国の地名表記の現状と課題——教科書および副教材における表記の「ゆ

- れ」から——』『北海道文教大学論集』19, 59-71.
- 外務省『国・地域>欧州>スペイン王国』, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/spain/index.html> (2019年8月29日最終参照).
- 川原繁人 (2013) 「日本語の特殊拍の音響と知覚——促音を中心として——」『日本音響学会誌』69巻4号, 191-196.
- 北村光世・ルエダ＝デ＝レオン エクトル (1995) 『日本人のためのスペイン語』再版, エクセルシア.
- 木村琢也 (2015) 「第1章 音声学・音韻論」高垣敏博 (監修) 『スペイン語学概論』1-14, くろしお出版.
- 窪園晴夫 (1999) 『日本語の音声』岩波書店.
- 興津憲作 (1992) 『外国語から見た日本語』近代文藝社.
- 小林泰秀 (2005) 『日英外来語の発音』溪水社.
- 寺崎英樹 (2017) 『発音・文字』大学書林.
- 東京外国語大学言語モジュール『2.4 アクセントの位置』, <http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/es/pmod/practical/02-04-01.php> (2019年3月2日最終参照).
- 東京大学スペイン語部会 (編) (2008) 『Viajeros 東京大学スペイン語教材』東京大学出版会.
- 中野久夫 (2014) 『はじめてのスペイン語』新版, 明日香出版社.
- 原誠・小林利郎・コントレラス エンリケ・牛島信明・黒田清彦 (編) (1982) 『スペインハンドブック』三省堂.
- 松本旬子 (2017) 「日本語母語話者によるスペイン語の音素連続/CrV/と/ CV₁rV₂/の発音——Elemento esvarabáticoとV₁の長さの比較分析——」『Hispanica』61, 111-126.
- 安富雄平 (1992) 「スペイン語の母音の持続時間：日本語の長音との比較において」『ロマンス語研究』25, 81-86.
- 山内路江・ヴェディーニ パルーマル (1998) 『はじめてのスペイン語：耳で覚える』ナツメ社.
- 山田善郎 (監修) (1998) 『中級スペイン文法』第3刷, 白水社.
- ロボ フェリックス・エレサ アムンシアタ・ロボ ルシア (1993) 『現代スペイン語入門』第12版, 大修館書店.
- Audacity Team “Audacity version 2.3.1: Free Audio Editor and Recorder Computer program.” <http://www.audacityteam.org/copyright/> (2019年8月15日最終参照)
- Boersma, Paul y Weenink, David “Praat version 6.0.33.” <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/> (2019年1月31日最終参照)
- Cuenca Villarín, María Heliodora (1996-1997) “Análisis instrumental de la duración de las vocales en español.” *Philologia Hispalensis* 11(1), 295-307.
- Gil Fernández, Juana (2005) *Panorama de la fonología española*. 3rd reprint. Madrid: Síntesis.
- Gili Gaya, Samuel (1921) “La r simple en la pronunciación española”. *Revista de Filología Española* 8, 271-280.
- Iribarren, Mary Carmen (2005) *Fonética y fonología españolas*. Madrid: Síntesis.
- Malmberg, Bertil (1965) *Estudios de fonética hispanica*. Traduction of Edgardo R. Palavecino. Madrid: CSIC.
- Marín Gálvez, Rafael (1995) “La duración vocálica en español.” *ELUA* 10, 213-226.
- Navarro Tomás, Tomás (1917) “Cantidad de las vocales inacentuadas.” *Revista de Filología Española* 4, 371-388.
- Navarro Tomás, Tomás (1918) “Diferencias de duración entre las consonantes españolas.” *Revista de Filología Española* 5, 367-393.
- Navarro Tomás, Tomás (2004) *Manual de pronunciación española*. 28th edition of 1918,

- Madrid: CSIC.
- Pereira, Daniel Ignacio y Soto-Barba, Jaime (2011) “Duración absoluta de las vocales del español urbano y rural de la provincia de Ñuble.” *Boletín de filología* 46(1), 153–160.
- Quilis, Antonio (2006) *Tratado de fonología y fonética españolas*. 2nd reprint of the 2nd edition of 1999, Madrid: Gredos.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2011) *Nueva gramática de la lengua española: Fonética y fonología*. Barcelona: Espasa.
- Rico Ródenas, Jorge (2012) “El acento y la sílaba en la clase de ELE”. En Juana Gil Fernández (ed). *Aproximación a la enseñanza de la pronunciación en el aula de español*. Madrid: Edinumen.

(原稿受付 2019年10月1日)

Diligence and Dissipation:

A Critique of Capitalism in Eugene O'Neill's *The Iceman Cometh*

Yuji OMORI

Abstract

In his canonical plays, Eugene O'Neill repeatedly expressed warnings about an avaricious capitalist world. One group of O'Neill's characters can be subdivided into two types in terms of their attitudes toward economic activities. The first type includes business-minded characters, whose blind pursuits of material wealth have often been noted by scholars as the playwright's target of criticism. The second type includes characters who ridicule the capitalist ethos of diligence and economy and instead devote themselves to dissipation.

Marcel Mauss discusses how gift/countergift reciprocity was the dominant mode of exchange in archaic societies, where both excessive concentrations of power and financial inequalities were thus avoided. In such societies, the aimless, private accumulation of wealth was ridiculed as a disgraceful act of parsimony. Community leaders were instead required to be generous enough to lavishly spend their accumulated wealth on public feasts. Georges Bataille further notes that the consumption of wealth, rather than its production, was the primary object of human economic activities in early societies. In contrast, in a modern capitalist society in which earned profits are accumulated for further production, business-minded figures are admired regardless of whether they are generous and convivial.

With reference to the above anthropological perspectives, this article discusses how Hickey in *The Iceman Cometh*, who retains some traces of archaic generous revelers, serves as a medium for the playwright to critically depict the capitalist society while Hope's bar on stage functions as an ambivalent refuge in that society.

Dissipated Characters as Remote Descendants of Archaic Generous Revelers

From his early years, Eugene O'Neill maintained great interest in social ideas such as Marxism and anarchism and, in his canonical plays, repeatedly expressed warnings about a greedy capitalist world. One group of O'Neill's characters can be subdivided into two types in terms of their attitudes toward economic activities such as labor, savings, and consumption. In *Desire Under the Elms* (hereafter *Elms*), Ephraim Cabot, a pious and diligent character, represents nineteenth-century Puritanism in which "wealth was viewed as a manifestation of God's blessing" (Floyd 274). Cabot's greed and faith are inseparable. The Puritan or Protestant ethos was later secularized to form a capitalistic business mindset in

pursuit of material wealth regardless of divine favor. Characters with such a business mindset can be categorized as the first type of character. Andrew Mayo in *Beyond the Horizon*, who abandons his family farm to become a shrewd businessman, and William Brown, “the Omnipresent Successful Serious One” in *The Great God Brown* (496, hereafter *Brown*), are good examples of this type of character. Despite their success in the early stages of their careers, these business-centered characters fail in the end. Scholars and critics have accordingly noted their blind pursuit of material wealth as the playwright’s target of criticism.

On the other hand, several characters ridicule the ethos of diligence and economy and instead devote themselves to dissipation. Jamie in *Long Day’s Journey Into Night*, Jim Tyrone in *A Moon for the Misbegotten*, Theodore Hickman (Hickey) in *The Iceman Cometh* (hereafter *Iceman*), and Erie Smith in *Hughie* can be included in this second type of dissipated character. James O’Neill Jr., who wasted his life on alcohol, women, and horse racing, has often been mentioned as the model for this second type of character; however, the meaning of these characters’ dissipation should be further explored beyond a biographical interpretation. A useful frame of reference for this discussion can be found in anthropological studies on gifting and consumption. In particular, Marcel Mauss asserts that gift/countergift reciprocity was the dominant mode of exchange in archaic clan societies, by which both excessive concentrations of power and financial inequalities were avoided (just as they were naturally avoided in earlier hunter-gatherer societies, which we shall discuss later). The aimless, private accumulation of wealth was ridiculed as a disgraceful act of parsimony. Community leaders were instead required to be generous enough to spend their accumulated wealth on lavish public feasts. For example, “considerable amounts of goods that ha[d] taken a long time to amass [were] suddenly given away or even destroyed, particularly in the case of the potlatch ... not only [were] useful things given away and rich foods consumed to excess, but one even destroy[ed] for the pleasure of destroying” (Mauss 74). As Georges Bataille maintains, “the ‘expenditure’ (‘the consumption’) of wealth, rather than production, was the primary object” of human economic activities as exemplified in those ancient societies (Bataille 1991, 9). In contrast, in a modern capitalist society in which profits are accumulated for further production, business-minded figures are admired regardless of whether they are generous and convivial. To quote Bataille again, “the acquisitive businessman, devoting all his hours to work in order to expand his business, was in the New World what the saint or the man of honor was in old Europe” (Bataille 1976, 209 [my trans.]).

The Rope is one of the earliest plays in which O’Neill briefly tackles these sprouting socioeconomic themes. Abraham Bentley in the early one-act play is a pious and avaricious hard worker like Cabot in *Elms*, though a little feeble-minded with age. He has been saving and hiding fifty twenty-dollar gold coins in the barn as a legacy to Luke, his only prodigal son. Notably, upon his return after many years’ wanderings around the world, Luke gives a silver coin to Mary, his little

niece, and lets her throw it to the ocean as she pleases, stating, “That’s the talk, kid. That’s all it’s good for — to throw away; not buryin’ it like your miser folks’d tell you” (558). In a later scene, when discussing their prospective inheritance from Abraham with Sweeney, his brother-in-law, Luke further states, “I don’t want no truck with this rotten farm. . . . What I wants [sic] is cash — regular coin yuh kin spend — not dirt. I want to show the gang a real time, and then ship away to sea agen or go bummin’ agen. I want coin yuh kin throw away — same’s your kid chucked that dollar of mine overboard, remember?” (567). Luke’s mobile, nomadic lifestyle and dissipation are not only connected with his dislike for the capitalistic private accumulation of property, but also with a fulfillment of comradeship and festivity. As a piece of sea surface cannot be owned as a private property, his life at sea literally manifests his disbelief in capitalistic values, too. The ending scene, in which Mary finds the hidden gold coins by accident and playfully throws them to the ocean one after another, recalls the ancient potlach in which valuable items were often thrown away to the sea. The play thus presents an ironical statement on what Marx calls the gold fetish.

Socioeconomic issues over dissipation, diligence, and stinginess are pursued in a fully developed way in *Iceman*. Among the several profligate characters in O’Neill’s plays, Hickey in *Iceman* particularly resembles those archaic generous revelers in terms of his characteristic Dionysian conviviality and generosity, as he annually contributes to the community of drunkards at Hope’s bar. In fact, along with the regulars in the anticapitalist refuge of Hope’s bar, Hickey functions as a medium for the playwright to critically depict a modern capitalist society. Hickey is a particularly interesting case in that he is not only a debauched figure but also a businessman who is required to be sober and industrious. O’Neil’s critique of capitalism, more specifically speaking, lies in the fact that Hickey’s life eventually falls apart when he can no longer hold these two fundamentally contradictory aspects within himself.

An Anticapitalist Refuge for Lumpen Proletarians

Iceman, written in 1939, is set in Harry Hope’s bar and inn in New York City in 1912. It is important to understand what the bar stands for in its relationship to the world beyond its doors, and for that purpose, it should be noted that Hope was once a petty Tammany political activist. Setting up clubs in each voting district to obtain votes from new immigrants, Tammany Hall served as a community-based political organization. It provided new immigrants with daily necessities such as food and fuel as well as temporary shelter and helped immigrants find employment in police and fire departments and in other municipally related positions, such as street cleaners and garbage collectors. On the other hand, Tammany Hall was notorious for political corruption, including buying votes from immigrants, abusing its power to appoint police officers and to issue business licenses to new bar owners, accepting bribes, and maintaining collusive ties with

the criminal underworld.

It is not certain whether Hope was politically active enough to offer poor immigrants food or temporary shelter at his place. Judging from the way he takes care of regulars at the bar, however, it would come as no surprise if he did offer some help to the poor. He was apparently acquainted with many local public officials, including the police chief, to whom he even sent a letter of recommendation for Joe Mott seeking to open a gambling house. In addition, at one point, Hope nearly became a nominee for a member of the municipal assembly. However, he lost his political ambitions when his beloved wife, Bessy, passed away twenty years previously. Hope has not set foot outside of his bar since then and has since lost contact with the outside world. Regularly accommodating the destitute after Bessy's death, Hope's place has consequently become a haunt for many lumpen proletarians. Among the regulars at the bar are Pat McGloin, a former police lieutenant who was arrested for accepting a bribe; Ed Mosher, a former circus man and a fraud; Joe Mott, a former proprietor of a Negro gambling house who habitually offered bribes to police officers; and Willie Oban, a graduate of Harvard Law School who has developed a drinking problem since his father was arrested for illegal stock exchanges. The profiles of these characters suggest that outside of the onstage bar is a corrupt and greedy society where, according to one-time anarchist Larry Slade, "the cannibals do their death dance" (570). To borrow a favorite phrase of Hugo Kalmer, another former anarchist, the society can rightly be compared to Babylon the Great in the Apocalypse. As Michael Endes states, "If Babylon in the Apocalypse symbolizes a state of civilization in which what should not be traded are sold and bought, a modern capitalist society can be rightly called a Babylon because everything is viewed from the perspective of trade there" (Kawamura 35 [my trans.]). If commodity exchange were to spread across all societal realms under a fully developed capitalist economy, reciprocal communities would eventually collapse. While a gift connects the sender with the receiver, a commodity does not make a connection between the seller and the customer, and thus, human connections are inevitably weakened. The inhuman state that a capitalist society can potentially bring about is implied in the fact that, of the regulars at Hope's bar, only three prostitutes and their pimp-bartenders keep in contact with the outside world in the play.

Hope's onstage bar is not simply a reminder of the corruption of the outside capitalist world. Similarly to the proprietor, most of the regulars hardly work and merely keep themselves confined to the bar. Drinking and fantasizing about revolutionary social reforms or returning to their former jobs or home countries, they are basically wasting their lives away. However, they seem content with their lives at the bar because these down-and-outers are connected with each other through a sense of togetherness and form a friendly, if strange, community. Cecil Lewis and Piet Wetjoen, who fought against each other in the Boer War, laugh out loud together with their arms about each other's shoulders. At Hope's bar, gender and racial discrimination are held in suspension insofar as both Joe Mott and the

prostitutes are warmly welcomed (albeit with some reservations) as part of the community. Such arrangements would have been impossible when Hope's respectable wife was alive, as Hope giggles, "I'll bet Bessie is doing somersaults in her grave!" (600). Without family bonds, most of the regulars are lonely and helpless in many ways; however, more positively, they are also free, as they are not tied down by social relationships in the outside world. It is telling that many of them once made a living in the entertainment business, such as a circus, theater, and a gambling hall, which often requires moving around. Their natural inclination for mobility has contributed to the formation of a new, free, and equal community. As Larry states, Hope's bar is "the No Chance Saloon. It's Bedrock Bar, The End of the Line Caf?, The Bottom of the Sea Rathskeller!" However, it also serves as "the last harbor" (577) or a refuge where those defeated by the outside capitalist world can finally find themselves at peace. Of course, the bar cannot function as a refuge without Hope because he is the one who provides the jobless lodgers with food, drinks, and accommodations using the proceeds from other customers. Obviously, the refuge is not in any way part of Hope's political activities in pursuit of status or honor, as he has been indifferent to municipal politics for a long time. He helps these regulars out of hidden, but genuine, sympathy. A free, equal, and friendly communal life, which resembles the so-called primitive communism of ancient mobile hunter-gatherer societies, is thus realized in Hope's bar and inn. This is probably why the place is named *Hope's*, although the communal life is fragile and Hickey later throws it into chaos.

The group's dissipated lifestyle of drinking day and night and indulging themselves in empty talk is beyond the pale; however, a refuge is where people are liberated from a variety of common social constraints. As Larry states, "Worst is best here, and East is West, and tomorrow is yesterday" (589); right or wrong, this refuge exists in contrast to the competitive capitalist world in which great importance is placed on industry and sobriety. Therefore, drinking alcohol "whose consumption does not enable us to work more — or even deprives us, for a time, of our strength to produce" (Bataille 1991, 119) is affirmed, allowing the regulars to make random speeches instead of seriously telling truths. Indeed, as a refuge, the bar is humorously summarized near the end of the first act in Mosher's joke about a quack: regarding work as "the deadliest habit known to science," the doctor holds the belief that "if you drink a pint of bad whiskey before breakfast every evening, and never work if you can help it, you may live to a ripe old age. It's staying sober and working that cuts men off in their prime" (614-615). Hope's bar is thus established as an anticapitalist refuge in contrast to the world beyond the rarely used door, forming a strange site for the playwright to critically depict the outside world. It is strange partly because the regulars used to be part of the greedy society and apparently still dream of returning to their former lives. They are obviously not in the best position to criticize society; however, the way in which they nevertheless do so certainly gives credence to the drama and prevents it from becoming too didactic a social problem play.

Communal Life Disrupted by the Gospel of Death

Every year, when Hope's birthday approaches, Hickey drops in at the bar and generously treats and enlivens everyone there. The regulars regard the jovial traveling salesman as "a great one to make a joke of everything and cheer you up" (571), eagerly looking forward to his visit in act 1 as if waiting for a savior's arrival. Professionally skilled at winning people over, Hickey keeps everyone entertained and generously pays for their drinks. He usually behaves as though he were a genuine giver who wants nothing in return, bringing "kindness and laughter" (691) and increasing the sense of happiness in the community. As he is a successful salesman who brings money and goods into the bar, Hickey may seem to represent a capitalistic force from the outside world at a glance; however, he appears as a generous annual gift-giver, a Santa Claus figure, prioritizing sharing his wealth with friends over accumulating it for his personal benefit. It is important to remember here that O'Neill, doubting that the audience could understand the play during wartime, postponed its publication and performance until 1946. This postponement was good judgment because the spirit of gift-giving came to be widely appreciated in postwar America. For example, within a few years after the war, Christmas developed into the commercial event it is today in which children wait for the arrival of Santa Claus, who comes bearing gifts. The mythical figure functions quite well as an ingenious device to hide the fact that Christmas presents are commodities purchased in advance, enabling children to be filled with a great sense of wonder and happiness. This new American way of celebrating Christmas spread rapidly around the world. It was also in the late 1940s that America implemented the Marshall Plan to offer enormous financial support to war-torn European regions without demanding direct repayment. Gift-giving, or the consumption of wealth for the benefit of others, was thus conspicuously practiced as an alternative mode of exchange in place of the capitalistic mode of commodity exchange.

Given these circumstances, Hickey as a generous friendly dissipater exactly fits into the spirit of postwar America to the degree that it seems as if O'Neill almost anticipated the coming spirit. However, the playwright focuses on how difficult and contradictory it is for Hickey, or anyone else for that matter, to remain a generous consumer in a capitalist society, where an individual's accumulation of private property is emphasized as a social value, consequently generating vicious competition, separating individuals from one another, and undermining a sense of shared community. Hickey is attracted to Hope's bar because it functions as an oasis in such a society; however, he is increasingly trapped and torn between two sets of contradictory values, such as diligence versus dissipation and conjugal love versus communal friendship, until he eventually ruins his life. When Hickey finally appears on stage the day before Hope's sixtieth birthday, he is no longer the convivial "Dionysian Hickey"

(Manheim 133) he has always been. He announces his abstention from alcohol, stating, "I finally had the guts to face myself and throw overboard the damned lying pipe dream that'd been making me miserable ... and then all at once I found I was at peace with myself and I didn't need booze any more" (609). He then begins a campaign against pipe dreams, preaching to the group the gospel of facing their true selves. Under Hickey's clever manipulations, they begin to break their usual rule of respecting each other's pipe dreams. Consequently, their supportive community of mutual acceptance, peace, and friendship is disrupted by a series of quarrels over a lot of issues, including race, gender, and war. Hickey thus urges them to leave the bar to realize the pipe dreams of which they have previously been proud. Even Hope, influenced by Hickey, makes an unfriendly, business-oriented speech in a disagreeable mood at his own birthday party:

Like Hickey says, it's going to be a new day! This dump has got to be run like other dumps, so I can make some money and not just split even. People have got to pay what they owe me! I'm not running a damned orphan asylum for bums and crooks! Nor an Old Men's Home for lousy Anarchist tramps that ought to be in jail! I'm sick of being played for a sucker! (646)

His midnight birthday party goes from bad to worse and ends with a funereal atmosphere. The next morning, the regulars leave the bar one after another. Naturally, they cannot realize their pipe dreams, which are only stories they tell when they are carried away by the power of alcohol. For instance, Harry Hope manages to leave the bar for the first time in twenty years but immediately returns when he fails to cross the street at the nearby corner, falsely insisting that he was almost run over by an automobile. He soon admits that the automobile was imaginary; however, his fear of automobiles seems to make sense. Travis Bogard maintains that "what lies outside is a world without value, a hostile society to which no man can possibly belong" and that the threatening automobile is "a symbol of a mechanized, animalistic, spiritless world, a world in which God is dead" (Bogard 414-415). However, the automobile is not so much emblematic of the nihilistic world as it is a symbol of the socioindustrial state of America in the 1910s when Henry Ford, a great contributor to the shaping of America into a full-scale capitalist society, was revolutionizing the automotive industry with innovative techniques of mass production. Shortly thereafter, Ford was also one of many businessmen to support the National Prohibition Act in hopes of obtaining higher productivity in his automobile plants. Automobiles are the products of the capitalist social values and practices against which the regulars at the bar have turned their backs for such a long time in their drunken laziness. It is no wonder that they all return to the bar in almost no time. However, their pipe dreams that romanticize the past and through which they cherish a faint hope for the future are lost and rendered invalid. Their previously friendly community has been fractured, leaving them drained of their former vitality. Drinking whiskey

has no effect and only makes them feel as though they were “drinking dishwasher!” (689). In contrast to the miracles of Dionysus and Jesus Christ, who could change water into wine, it is as though Hickey has cast a black spell on their whiskey. Hickey, who has always been the Dionysian life of the party, is converted to “the great Nihilist” (622), “the Iceman of Death” (667), or an antisavior who brings the gospel of death. It is difficult to understand why Hickey is given the two conflicting personas of the Dionysian reveler and the devilish killer at a glance. As we shall see, however, his transformation has much to do with the slow but steady influence of the modern Babylon-like capitalist system on him, and what the iceman stands for is the key to understanding it.

The Double Meaning of the Iceman

As is well known, the figure of the iceman included in the title of the play is derived from a common bawdy joke about a wife who has an affair with an ice vendor visiting her home while her husband is away. Hickey’s favorite joke reaches its punchline when the husband returns home. He “calls upstairs, ‘Has the iceman come yet?’ and his wife calls back, ‘No, but he’s breathin’ hard’” (Berlin 98). O’Neill used the archaic usage *cometh* in the title to refer to the Bible by association (Berlin 98; Day 9). “The Parable of Ten Virgins” is particularly relevant here: ten virgins were waiting for the arrival of a bridegroom; however, all of them fell asleep, as he did not come as soon as expected. Although he finally arrived at midnight, five of them missed the chance to meet him because they did not prepare enough oil for their lamps. (Matthew 25: 1–13). The bridegroom in the Bible signifies Jesus Christ, and therefore, union with him in wedlock means to conquer death and to be given eternal life. According to Cyrus Day, the adulterous union with the iceman, as opposed to the one with Christ in the parable, “must, then, be a parody of union with the bridegroom, and signify surrender to death” (Day 11). Similarly, both critics and Larry in the play identify Hickey, who has killed his wife (as we shall discuss in more detail later), with the iceman — the cold anti-Christ-like figure bringing death. Hickey and the ice vendor are both salesmen, and besides, the image of the cold ice that the vendor sells must contribute to the ready identification between the vendor and Hickey, who has turned into a cold-blooded killer. However, the iceman in the original indecent joke is only a man of strong sexual desire who does not hesitate to violate social norms and have an affair with a married woman. He is not a killer. That is, the story should cause laughter because the iceman is a Dionysian figure associated with life and sexuality rather than death. Because the iceman can be seen as both Dionysian and anti-Christian, the iceman figure is suitably connected with Hickey as a Dionysian reveler of life who has been degraded into a devilish killer.

In further consideration of this issue, it is useful to refer to a story from *Linga Purana*, a sacred book of Shivaism from India. Shiva, an Indian nature deity similar to Dionysus, is often depicted as a lustful young man wandering in the

forest or tempting the wives of sages. The story of the sage Sudarshana and his wife is particularly interesting when compared with the iceman story because the two stories share the same motif of a wife having an affair with a man while her husband is away from home. According to Alain Danielou, the story can be summarized as follows:

One day, the sage Sudarshana (Beautiful-to-behold), who wished to vanquish the god of Death by his own virtues, said to his chaste wife, 'Never must you refuse to honor a guest. A traveler is always the image of Shiva, and everything belongs to him.' Dharma (moral law) then took the appearance of a wandering monk and approached the sage's dwelling during his absence. The wife of Beautiful-to-behold offered him the customary hospitality. Once satiated, he said, 'I have had enough cooked rice and other food; now you must give yourself to me.' She therefore offered herself to him. At that moment, Beautiful-to-behold returned and called his wife. But it was the guest who replied, 'I am making love with your wife. Simply tell me what I must do now, since I have finished and am satisfied.' Beautiful-to-behold said to him, 'Excellent man! Take your pleasure in peace; I shall go away for a while.' Dharma then revealed himself to him and said, 'By this act of piety, you have vanquished death.' (Danielou 215)

In a culture where sexuality and spirituality constitute a perfect whole, nature gods such as Dionysus or Shiva and similar sacred beings may manifest themselves in this paradoxical way, as they are beyond our social rights and wrongs. From a modern perspective of women's human rights, however, the story may sound problematic in that the wife is treated as if she was an object of her husband's possessions and even Dharma treats her as if she was an object of sexual pleasure. It tells a typical situation in patriarchy where female voice is silenced and female sexuality is objectified. Compared with this story, the iceman joke may sound progressive in that the wife is not silenced, even speaks up the punchline, and seems to have an affair by her own free will, but the iceman story is ultimately only a bawdy joke reflecting a worldly culture, where sexuality is separated from spirituality and even widely commodified. Given a commercial value, sexuality is inversely degraded and lowered there. Importantly, while the visitor in the story of *Linga Purana* is a wandering monk, in the iceman joke, he is a salesperson, thus suggesting a sociocultural background of commercialism. As we shall see, the full story of Hickey's fall which he elaborates in a very long confession in the last act, reveals how he has been in a losing game because his Dionysian nature is incompatible with the commercially-oriented social demands for diligence, discipline, and sobriety.

Dionysian Compulsion Returns as the Repressed

Hickey's long confession reveals that his abandoned pipe dream was to become a respectable husband for his beloved wife, Evelyn, by conquering his faults, which included habitual diversions with women as well as periodic wasteful binges. Born into a minister's family in a small town in the Midwest, Hickey was a notorious pleasure seeker, visiting pool rooms and a brothel even in his youth. Importantly, there were two factors that supported the development of his spendthrift habits. One was a spirit of opposition to his avaricious father, who was good at "whooping up hellfire and scaring those Hoosier suckers into shelling out their dough" (693). His rebellious disposition should be regarded as both Dionysian and anticapitalistic because O'Neill must specify that Hickey's father is stingy (just like Eric Bentley in *The Rope* and Ephraim Cabot in *Elms*) to reflect what Karl Marx states in *Capital*. According to Marx, a hoarder "makes a sacrifice of the lusts of the flesh to his gold fetish. He acts in earnest up to the Gospel of abstention. ... Hard work, saving, and avarice are, therefore, three cardinal virtues," and the "boundless greed for riches ... is common to the capitalist and the miser; but while the miser is merely a capitalist gone mad, the capitalist is a rational miser" (Marx Ch. 2, Sec. 3). As a reaction against his avaricious father, Hickey seeks to satisfy his earthly pleasures by consuming money rather than accumulating it.

The other factor is an inclination toward nomadism (a trait shared by some of the regulars at the bar), which makes him feel that he must always "keep on the go" (693). Again, an anthropological perspective can facilitate an understanding of the issue. In the earliest band societies of hunter-gatherers, according to Kojin Karatani, "it was not possible to stockpile goods, and so they were pooled, distributed equally." (Karatani x). Nomadism kept them free and equal and formed what Friedrich Engels once called primitive communism referring to "the collective right to basic resources, egalitarianism in social relationships, and absence of authoritarian rule and hierarchy" in human society (Scott 180). Fixed settlements in later ages made possible the accumulation of wealth, which "inevitably led to disparities in wealth and power." During this time period, the aforementioned obligations of gift/countergift reciprocity spontaneously appeared in archaic societies "in the form of a compulsion, as Freud's 'return of the repressed'" to avoid the risk of unequal economic gaps among community members (Karatani x-xi). Since wealth and power are inevitable parts of human desire, it is difficult, particularly for the privileged, to dispose of them; however, when a society becomes excessively unequal, an ancient nomadic sense of equal and communal life compulsively returns as the collectively repressed content to form a reciprocal mode of exchange. A similar Freudian return of the repressed can be found on a personal level, which is exactly what seems to have been happening in Hickey, who is a distant descendant of archaic revelers. A nomadic

mindset urges Hickey to engage in consumption and makes him throw money away on entertaining his friends at the bar until the urge becomes something close to a compulsion as a result of being continuously repressed by capitalistic social norms.

Longing for a free and mobile life, Hickey chose to become a traveling salesman. Interestingly, traveling salesmen in the nineteenth century were widely mythologized as outlaws who “drink to excess, chase women, and generally flout middle-class notions of respectability” (Spears 4). This perception amplifies the image of the Dionysian Hickey, because the fertility god was also detested for his orgies by sensible people in ancient Greece, similarly to Shiva in India. It is not surprising that Hickey recalls his youth and states, “home was like jail, and so was school, and so was that damned hick town” (694). As Michel Foucault makes clear, after the popularization of imprisonment as punishment rather than premodern physical torture, disciplinary techniques introduced for criminals in prisons provided the model for other modern institutions of control, including schools, hospitals, factories, and the military. In the sense that these disciplinary controls have fully permeated institutional culture, modern society can be considered to be a “carceral archipelago” (Foucault 298). The Dionysian, free and untamed, must be reformed, just as Dion Anthony, whose first name is that of the Greek god, is overcome by a feeling of suffocation, crying out in *Brown*, “Wake up! Time to get up! Time to exist! Time for school! Time to learn! Learn to pretend! Cover your nakedness! Learn to lie! Learn to keep step! Join the procession! Great Pan is dead! Be ashamed!” (482).

Evelyn, on the other hand, is from a prominently wealthy family in the town, and they also belong to the strict Methodist church, which led the charge in the temperance movement. Naturally, her parents were furiously opposed to her relationship with Hickey; however, the young couple were passionately drawn to each other and eventually got married. Although traveling salesmanship attracted the young Hickey with its freedom-evoking image, in reality, he has become merely a small cog in the capitalist system of the early twentieth century. He is successful in the profession, efficiently turning a profit, as he inherited from his minister father a natural skill at winning people over. However, in the end, his Dionysian blood is incompatible with the modern organizational and familial realms that require discipline and diligence. Every time Hickey makes a mistake, Evelyn, like a typical Methodist who believes in salvation through penitence, forgives him in agony, gently encouraging him to reform himself. Hickey, for his part, pledges not to make a mistake again but fails each time. Unfair resentment and hatred toward her, as well as a guilty conscience, begins to accumulate in him until he can no longer bear the warring emotions and compulsively shoots his sleeping wife before heading out for his friend’s memorable sixtieth birthday party.

According to David E. Schoen, addiction ultimately takes “complete and total control of the individual, psychologically... in an inherently destructive and

ultimately life-threatening way. It is not an addiction unless it is a death sentence — not life in prison, not fifty years, with probation or time off for good behavior” (Schoen 3-4). Schoen further assumes that the concepts of the “archetypal shadow/archetypal evil” are “integral aspects of the psyche” that operate in alcoholism and addiction (Schoen 67). Linda Leonard also sees “a feature typical in relationships patterned in the addict/codependent mold” in Hickey and Evelyn (Leonard 25). In general, while alcoholic patients must notice by themselves that they must quit drinking rather than being instructed to do so, their families take care of them regardless and, by doing so, unwittingly enable them to continue drinking. Despite their dependence on their enablers, alcoholic patients often hate and verbally or physically attack them from a guilty conscience. Given that addiction and alcoholism are among the topics that O’Neill repeatedly takes up in his plays, it is natural that Hickey’s murder of his wife can be interpreted as a pathological case resulting from his addiction as the ultimate devilish killer. Although Hickey seems to believe his new pipe dream that he killed Evelyn out of love to bring peace to her, it is only a self-defensive fabrication to make his cruel act sound beautifully romantic and to avoid facing the truth (just as the pipe dreams function for the other characters). No one kills a loved one out of love, although possible exceptions are when the latter suffers from a terminal illness and wishes for euthanasia or when the former wishes for a double suicide with the latter. Hickey’s case might be considered a type of double suicide because he is seemingly determined to go to the electric chair throughout. Ultimately, however, the idea of turning himself in should be an afterthought. The real truth is that despite his authentic love for Evelyn, Hickey is so obsessed with his own drinking that she has become an obstacle. Thus, he kills her out of an uncontrollable outburst of hatred, which he blurts out when he recounts the moment that he actually shot her: “Well, you know what you can do with your pipe dream now, you damned bitch!” (700).

Evelyn was the greatest obstacle for Hickey exactly because they were deeply in love. Certainly, he was “insane” (701) or out of his normal frame of mind due to his compulsive thirst (after all, he is not a cruel killer by nature). Just as Jimmy Tomorrow’s heavy drinking was secretly responsible for ruining his marriage, which he finally admits when dismantling his dearest pipe dream, Hickey’s compulsive, if less frequent, drinking habit, which may or may not be medically considered an addiction, is also prominently responsible for his cruel act. An ironic paradox lies in the fact that Hickey would not have developed such an uncontrollable compulsion in a social system equipped with interfaces for accessing the positive aspects of the Dionysian, including a sense of convivial and friendly togetherness, as opposed to solitary salesmanship and other business-oriented social values.

Another bad habit of Hickey’s also results from his Dionysian nature. He explains his philandering on the road as follows:

It was only a harmless good time to me... I'd get bored as hell. Lonely and homesick. But at the same time sick of home. I'd feel free and I'd want to celebrate a little. I never drank on the job, so it had to be dames. Any tart. What I'd want was some tramp I could be myself with without being ashamed — someone I could tell a dirty joke to and she'd laugh. (696)

Hickey needed this kind of female company because he could not enjoy telling Evelyn indecent jokes at home: "She'd always make herself laugh. But I could tell she thought it was dirty, not funny" (697). Evelyn was saint-like, devoid of sexuality and physicality; she was a half-woman who refused to live female wholeness, so to speak. Her ethereal mode of existence is implied in multiple ways. Evelyn never appears on stage. At one point, Hickey even says that "it *isn't human* for any woman to be so pitying and forgiving" (698 [emphasis mine]). No other character except Hickey has seen her or her picture, as, after murdering her, Hickey tears up the one he had always carried around in his pocket. Ann C. Hall rightly contends, "Evelyn's Madonna role offers no place for female sexuality; sex and virtue are mutually exclusive," and therefore, "Hickey's response was to seek solace in prostitutes who afforded him a mirror for his sexual fantasies" (Hall 33). To be sure, prostitutes are also half-women in the opposite sense from Evelyn as they are regarded as sex objects totally devoid of spirituality. Obviously, chasing after them cannot give Hickey a permanent solution. The fact that Hickey repeatedly tells the iceman joke everywhere reveals Hickey's long-standing, hidden discontent with Evelyn, who did not dare to openly share sexual pleasure with him or, ultimately, to cherish humans as physical beings. Evelyn is somewhat similar to Elsa in *Days without End*, whom Lionel Trilling describes as "a humorless, puritanical woman who lives on the pietistic-romantic love she bears her husband and on her sordid ideal of his absolute chastity" (Trilling 300). However, the playwright's criticism is ultimately directed not at Evelyn but at society itself, which distorts the whole image of human existence by separating spirituality from sexuality to the degree that the latter is demeaned and traded as a commodity.

Hickey has been doomed to fail since he was a young, rebellious pleasure seeker going against the hypocritically respectable community in his hometown because, as mentioned above, the untamed, out-of-the-norm Dionysian must be controlled and reformed into a sober and industrious subject suitable for the modern disciplinary capitalist system. In other words, no one in modern society can exist as a Dionysian figure in the true sense of the word, which is why Evelyn devoted herself to reforming Hickey. Evelyn, being from the local industrialist family, was an advocate of such social demands; however, this fact does not trivialize her forgiving love for him because, otherwise, her Dionysian husband could not have survived in disciplinary capitalist society. Just as Dion's original Pan-like mask was transformed into a Mephistophelean mask in dissipation when he was torn between his wife, Margaret, and the prostitute Cybel in *Brown*, Hickey

was thus degraded from a mirthful Dionysian figure to a devilish murderer in sociocultural circumstances where a Dionysian figure cannot maintain his own sacred existence. What D. H. Lawrence states about Pan is useful to understand the broader cultural context here: “Pan became old and graybeard and goat-legged, and his passion was degraded with the lust of senility. His power to blast and to brighten dwindled. His nymphs became coarse and vulgar. Till at last the old Pan died and was turned into the devil of the Christians” (Lawrence 23). While basically sharing the same idea of the degrading impact of platonic Christianity upon the Dionysian with Lawrence (and several other writers), O’Neill was also aware of the similar effects of Babylon-like capitalism. Hickey’s case is a disastrous example of the devilish fall of Dionysus or Pan. As a matter of course, these social and cultural contexts nevertheless in no way justify Hickey’s cruel act.

It cannot be emphasized enough, however, that a primitive communism with warm, if strange, human connections was realized at Hope’s bar. That is why Hickey headed there in the dark before dawn as if possessed by an obsession, which came at the cost of his beloved wife’s life and, by extension, his own life as well. Hope, “the kindest, biggest-hearted guy in the world” (645), and Hickey, “the kindest, biggest-hearted guy ever wore shoe leather” (706), both represented the spirit of generosity and festive consumption in the bar that provided a refuge from the capitalist world. What should be recognized from Hickey’s retreating figure as police detectives escort him out as a murder suspect near the end of the play is that, after all, the play is a tragicomedy of a man who cannot properly adapt to a greedy capitalist world that overemphasizes diligence, economy, and competition in pursuit of profit. From this viewpoint, Hickey’s life story becomes more familiar to the audience and readers in the early twenty-first century because we are still in a capitalist society, where the mode of commodity exchange that disconnects human relations in principle is dominant on a global scale. A refuge such as Hope’s bar could spontaneously appear anywhere, like Freud’s return of the repressed, and, as in Hickey’s case, the repressed often returns in the form of a compulsion. Some visitors might be steeped in joy in a friendly atmosphere of freedom and equality and offer materials for a variety of dramas — tragic, comic, or both. The only hope is that new business models are recently emerging: some connect their business with charity for local communities while others are creating a new trend of sharing culture, proposing alternative values in place of private ownership and enhancing human connections beyond the economic gap. Theoretically, a disastrous case such as Hickey’s should be less likely to happen.

Note

A shorter version of this article was presented in Comparative Drama Conference in Orland, Florida in 2017.

Works Cited

- Bataille, Georges. *La Limite De L'Utile (Fragments) in Oeuvres Complètes VII* (Paris, Gallimard, 1976).
- Bataille, Georges. *The Accursed Share, Vol. I.*, Trans. Robert Hurley (New York: Zone Books, 1991).
- Berlin, Normand. "Endings" in Harold Bloom, ed., *Eugene O'Neill's The Iceman Cometh* (New York: Chelsea House, 1987).
- Bogard, Travis. *Contour in Time: The Plays of Eugene O'Neil* (Oxford: Oxford UP, 1988).
- Danielou, Alain. *Shiva and Dionysus*, Trans. K. F. Hurry (London: East-West Publications, 1982).
- Day, Cyrus. "The Iceman and the Bridegroom" in Harold Bloom, ed., *Eugene O'Neill's The Iceman Cometh* (New York: Chelsea House, 1987).
- Floyd, Virginia. *The Plays of Eugene O'Neill: A New Assessment* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1985).
- Foucault, Michel. *Discipline & Punish: The Birth of the Prison*, Trans. Alan Sheridan (NY: Vintage, 2012).
- Hall, Ann C. "*A Kind of Alaska*": *Women in the Plays of O'Neill, Pinter, and Shepard*. (Carbondale: Southern Illinois UP, 1993).
- Karatani, Kojin. *The Structure of World History: From Modes of Production to Modes of Exchange*, Trans. Michael K. Bourdaghs (Durham: Duke UP, 2014).
- Kawamura, Atsunori. *Ende's Will*, (Tokyo: NHK Publishing, Inc., 2000).
- Lawrence, D. H. *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence* (London: Heinemann, 1936).
- Leonard, Linda Schierse. *Witness to the Fire — Creativity & the Veil of Addiction* (Boston: Shambala, 2001).
- Manheim, Michael. *Eugene O'Neill's New Language of Kinship* (Syracuse: Syracuse UP, 1982).
- Marx, Karl. *Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production*, Vol. 1, Trans. Samuel Moor and Edward Aveling (Hertfordshire: Wordsworth Editions, 2013), Kindle Book.
- Mauss, Marcel. *The Gift: Forms and Functions of Exchange in Archaic Societies*, Trans. W. D. Halls (London: Routledge, 2002).
- O'Neill, Eugene. *The Iceman Cometh in Complete Plays: 1932-1943*, (New York: The Library of America, 1988).
- O'Neill, Eugene. *The Great God Brown in Complete Plays: 1920-1930* (New York: The Library of America, 1988).
- Schoen, David E. *The War of the Gods in Addiction — C. G. Jung, Alcoholics Anonymous, and Archetypal Evil* (New Orleans: Spring Journal Books, 2009).
- Scott, John ed. *A Dictionary of Sociology* (Oxford: Oxford UP, 2014).
- Spears, Timothy B. *100 Years on the Road — The Traveling Salesman in American Culture* (New Haven: Yale University Press, 1995).
- Trilling, Lionel. "The Genius of O'Neill" in Oscar Cargill, et al., *O'Neill and His Plays: Four Decades of Criticism* (New York: New York UP, 1961).

(原稿受付 2019年10月24日)

クロスカントリーコースを用いたトレーニングが ランニングフォームへ与える影響

米重 修一・中雄 勇人

Effects of cross-country training on running form

Shuichi YONESHIGE・Hayato NAKAO

要 旨

長距離走において、長時間の運動を行う必要性から、エネルギー効率の良い動作が必要である。

不整地を走るクロスカントリートレーニングで、接地の感覚や体幹の状態などが変化する現象を意図的に作り出すことで接地位置や重心高の変化などを感じ、身体のコントロール能力を身に付け、効率の良い疾走フォームの習得ができないかを考えた。

大学陸上部に所属しており、中長距離走を専門としている男子8名にクロスカントリーを用いたトレーニングを、400m程度の起伏や段差などが含まれた不整地コースにて、400 m×10 本程度のインターバルトレーニングを週2回行わせた。1ヶ月間行わせた結果を、デジタルカメラにて撮影し、映像を動作解析ソフトを用いて解析した。1ヶ月間のクロスカントリートレーニング前後を比較すると、同様のストライドやピッチであっても、重心高は変化しないものの重心の上下動が減少した。クロスカントリートレーニングを行うことで、無意識に走運動の効率化を図ろうとアップダウンの激しい中でも姿勢の安定化を図ろうとするため、重心の上下動を抑えた、効率の良いランニングフォームの獲得に繋がる可能性が示唆された。

キーワード：クロスカントリー、重心高、ランニングフォーム

I. 緒 言

陸上競技は、走る、跳ぶ、投げるといった基本的な運動において記録を競い合う競技である。記録を左右する要因として、重い物体を遠方へ投擲するパワーなどを生み出す筋力や、運動を持続させるための持久力に関連する心肺機能などの体力要素があげられる。しかしながら、いかに高い体力を有していても、それを効率よくコントロールすることができなければ、記録を伸ばすことは難しい。よって、陸上競技においては、高い

運動エネルギーを生み出すための体力と、それをコントロールして、走・跳・投という、基礎的な運動での最高のパフォーマンスを引き出すことが求められる。基礎的な運動は、幼少の頃より長い時間をかけて形成されているものが多く、その最たるものとして疾走動作は、長い成長過程で形成されてきたことから、生活環境や運動歴の影響を強く受ける可能性があり、フォームの改善には時間がかかることに加えて、自然に行ってきた行為であることから、意識して動作を調整した経験が少なく動作改善が困難である。

過去から、疾走動作については多くの研究がなされている、特に高い疾走速度を必要とする短距離系の種目においては数多くの研究がなされており^{1) 2) 3) 4) 5) 7) 9) 10)}、効率の良い疾走動作やトレーニング方法などが報告されている。また、長距離走においてもいくつかの報告が見受けられ^{6) 8)}、接地時のエネルギーロスの観点から動作解析などがおこなわれている。効率の良い疾走動作を身につけることは、記録向上になくはならない要素となっているとともに、長距離走においては、長時間の運動を行う必要性から、エネルギー効率の良い動作が必要となり、足が地面に接地する際に前方で足が接地することで発生する減速や、接地時間の増加に伴うパワーロスなどを抑える必要があり、高い重心位置を維持するために重心の近い位置で接地を行う技術などを身につける必要がある。先行研究において長距離走における効率的な走動作についての報告は行われている一方、効率的な疾走動作を短時間で身につける方法についての報告は見受けられない。これは接地の位置や重心高の調整などは自然と行っている動作であることから意識して動作を調整することが困難であり、意識して動作を調整しようとする、普段無意識に行っている動作に対して意識的に変更しなければならず、力みなど一時的な疾走速度の低下に繋がる可能性が考えられるからであろう。よって、効率の良い疾走動作が簡便に身につくように、疾走を行う際の接地の感覚や体幹の状態などが変化する環境を意図的に作り出すことで接地位置や重心高の変化などを感じることで身体のコントロール能力を身につけ、効率の良い疾走フォームの習得につながるトレーニング環境を実現できないかを考えた。

そこで本研究では、不整地を走るクロスカントリーをトレーニングに取り入れることで、疾走動作にどのような影響を与えるのかを検討することを目的とした。

II. 方 法

(1) 対 象

対象は、大学において陸上競技部に所属しており中長距離を専門としている男子選手8名とした。すべての被験者に本実験の趣旨、内容ならびに危険性についてあらかじめ説明し、参加の同意を得た。

(2) クロスカントリートレーニング

クロスカントリーを用いたトレーニングとして、400 m 程度の起伏や段差などが含まれた不整地コースを設定し、10 本程度のインターバルトレーニングを週 2 回 1 ヶ月間行わせた。

(3) 疾走フォームの解析

1 ヶ月間のクロスカントリートレーニングを行う前後にそれぞれ、疾走動作の変化を検討するための走動差の撮影を行った。被験者には十分なウォーミングアップを行わせた後、400 m のグリーンサンドの陸上グラウンドにおいて全力疾走の 8 割程度の速度で 150 m 走を行わせた。その際の 150 m の疾走動作をデジタルビデオカメラ（Panasonic 社製 HDC-300）を用いて、スタートから 100 m 地点の直線走路における疾走動作を撮影した。撮影した映像をコンピュータに取り込み、動作解析ソフト Frame-DIAS V（DKH 社製）を用いて、2 次元 4 点実長換算法によって 1 サイクルの走動作の解析を行い、各測定項目の数値を算出した。また、ストライドおよびピッチの算出は撮影したカメラ映像から指定区間内における右足もしくは左足の接地から再び右足もしくは左足が接地して離地するまでの 1 サイクルをコンピュータに取り込み、ストライドおよびピッチを算出した。また、1 サイクルの疾走動作中において、両足の大転子中心を結んだ点から、最もつま先が前方に離れた点を通過した際の距離をつま先の振り出し距離、後方に最も離れた位置を通過した際の距離をつま先の後方最遠距離とした。重心高については、左右の大転子中心と地面との距離、重心の上下動については 1 サイクル中の左右の大転子中心の y 軸方向の移動範囲とした。

(4) 統計処理

測定値はすべて平均値±標準偏差で示した。各測定項目について、クロスカントリートレーニング前後の比較は対応のある t-test によって検定した。統計処理の有意性は 5 %未満で判定した。

Ⅲ. 結果

対象の 1 ヶ月間のクロスカントリートレーニング前後の各測定項目の値を表 1 に示した。150 m 走の疾走速度を比較すると、トレーニング前で 7.33 ± 0.25 m/s、トレーニング後で 7.20 ± 0.29 m/s と有意な差は認められなかった。また、ストライドやピッチといった疾走速度に係る項目においても有意な差は認められなかった。疾走時の足が地面

表1 トレーニング前後の各測定項目結果

		Pre	Post	
		Mean±SD	Mean±SD	
ストライド	m	2.06±0.19	1.98±0.25	
ピッチ	step/s	1.79±0.12	1.74±0.05	
つま先の振り出し距離	m	0.770±0.062	0.723±0.069	
つま先の後方最遠距離	m	0.664±0.060	0.643±0.037	
重心高	m	0.739±0.038	0.742±0.042	
重心の上下動	m	0.182±0.030	0.157±0.022	*
接地滞空時間比*	%	1.016±0.236	1.094±0.063	

※接地滞空時間比：滞空時間を接地時間で割った値

Values are expressed as mean±SD.

p<0.05

に接地している時間と両足ともに空中に浮いている対空時間の比率を比較した結果、両数値に有意な変化は認められなかった。また、つま先の振り出し距離、つま先の後方最遠距離、重心高の各項目において差が認められなかったものの、重心の上下動の項目において有意な差が認められ、クロスカントリートレーニングを行ったあとの方が、前に比べて有意に重心の揺れが軽減されていることが認められた。

IV. 考 察

陸上競技の長距離走において、最も記録に影響を与える要素として有酸素能力が挙げられるその指標として最大酸素摂取量が用いられている。最大酸素摂取量は長距離走の記録とも有意な相関関係が認められており、最大酸素摂取量を高めることにより筋肉に運動の際に必要な十分な酸素が取り込まれ、エネルギー産生が大きくなることでパフォーマンスの向上につながる。しかしながら、トレーニングを重ねていくと最大酸素摂取量の増加が頭打ちになり、その後はエネルギーを効率よく利用することができなければ、記録の向上は困難となることから、さらなる記録の向上には疾走動作の効率化（ランニングエコノミーを向上させる）が重要となってくる。本研究においては、エネルギー効率の良い動作を身につけるために、あえて不整地においてトレーニングを行うことで接地の感覚や体幹の状態などが変化する環境を意図的に作り出すことで身体のコントロール能力を身につけ、効率の良い疾走フォームの習得につながるのではないかと模索した。クロスカントリートレーニングは、様々な場所で取り入れられており心肺持久力の向上に伴う有酸素能力の強化や、アップダウンを利用した、下肢や体幹筋力などの疾走動作を維持するために必要な筋力の向上など、多くの効果が期待されている。その中にはフォー

クロスカンントリーコースを用いたトレーニングがランニングフォームへ与える影響の改善効果も期待されているが、その効果を検討した報告は見受けられない。今回、1ヶ月間という短い期間のトレーニングであったが、前後の動作を比較した結果、重心の上下動の項目において有意差が認められ、クロスカンントリートレーニングを行うことで重心のブレが軽減されたとの結果が得られた。エネルギーロスを少なくするランニングフォームを考えるに当たり、重心の位置が安定していることは非常に重要な要素である。重心が上下に動くということは、重心が沈んでいく際に膝関節が過度に屈曲している可能性が考えられ、この影響が設置時間の増加につながる要因となると思われる。また、一度沈み込んだ身体を持ち上げる際にもエネルギーを消費する。今回、重心の上下のブレが軽減された理由として不整地を走行することで、複雑に変化する接地面の状態に対応するために、整備されている場所を走る際とは異なり、無意識に体幹を安定させる筋出力の調整力が身についたのではないかと考えられる。また、インターバルトレーニングという強度の高いトレーニングとして取り入れたことで、無意識に走運動の効率化を図ろうとアップダウンの激しい中でも可能な範囲で姿勢の安定化を図ろうとした結果が現れているのではないかと考える。しかしながら、不整地などを利用して、接地面の変化に柔軟に対応できるようにするということは、球技などの急激な姿勢変化を伴うスポーツの走動作によく見られるように、膝関節を屈曲させ重心高を低い状態に保つことで、様々な状況の変化に対応できる姿勢に変化してしまった可能性も考えられる。しかしながら、今回の研究では、トレーニングを行った後も重心高には変化が認められなかったことから、重心位置を高く保つ走りが継続されており、陸上競技において求められている高い重心位置を保ちながら、重心の上下動を抑えた効率的な走りが身につけられたと考えられる。重心高が上がることで、接地の際のブレーキとなりうる足の振り出し動作が低減され、接地時間も短くなることから足の離地距離も低減し、いわゆる足が後方に流れる動作が防止できるかと考えたのだ、本研究においては、重心の上下動以外の項目において有意差が認められなかった。これは、トレーニング期間が1ヶ月と短かったことや、ランニングを行う際の注意事項として、接地後の足の回収を素早く行い、いわゆる「地面を蹴って走ろうとしない」ような声掛けを行うことで今後改善されると考えられる。よって、クロスカンントリーのトレーニングを行うことで、重心の上下動が抑えられ効率的なランニングフォームの獲得に繋がる可能性が示唆された。

V. まとめ

大学陸上中距離男子選手を対象に、クロスカンントリーコースを用いたインターバルトレーニングを実施した結果、トレーニング前後において同様のストライドやピッチであっても、重心高は変化しないものの重心の上下動が減少しエネルギーロスの少ないランニ

ングフォームへの変化が認められたことから、クロスカントリーのような不整地を用いたトレーニングを行うことにより重心が安定した効率の良いランニングフォーム獲得に繋がる可能性が示唆された。

引用・参考文献

- 1) Chapman AE, Caldwell GE. Factors determining changes in lower limb energy during swing on treadmill running. *J Biomech*, 1983, 16(1) 69-77.
- 2) Prilutsky BI, Gregor RJ, Ryan MM. Coordination of two joint tectus femories and hamstrings during the reg swing phase of human walking and running. *EXP Brain Res*, 1998, 120(4) 479-486.
- 3) Vonstein W. Some reflection on maximum speed sprinting technique. *New Studies in Athletics*, 1996, 11(2-3) 161-165.
- 4) 尾縣貢・中野正英 (1991) 疾走能力に影響を及ぼす動作要因. 奈良教育大学紀要 40(2) : 21-28.
- 5) 末松大喜・西嶋尚彦・尾縣貢 (2008) : 男子小学生における疾走能力の指数と疾走中の接地地点の動作との因果構造. 体育学研究 53 : 363-373.
- 6) 高橋昌宏・前田正登・野村治夫・柳田泰義 (2000) 長距離走の接地局面における下肢の三次元動作分析. 神戸大学発達科学部研究紀要 8(1) : 241-253.
- 7) 土江寛裕・櫛部静二・平塚潤 (2010) 最大スプリント走時の走速度, ピッチ・ストライド, 接地・滞空時間の相互関係と, 競技力向上への一考察. 城西大学研究年報. 自然科学編 33 : 31-36.
- 8) 中雄勇人・小倉庸輔・谷田彪・石田真規 (2014) : 長距離走における接地動作の違いがパフォーマンスに及ぼす影響. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 49 : 85-92.
- 9) 福田厚治・伊藤章 (2004) 最高疾走速度と接地期の身体重心の水平速度の減速・加速:接地による減速を減らすことで最高疾走速度は高められるか, 体育学研究 49(1) : 29-39.
- 10) 前田正登 (1999) 短距離走における足の接地に関する研究, スポーツ方法学研究 12(1) : 193-201.

(原稿受付 2019年10月31日)

山口中学校の英語教育に関する研究

— 外国人講師に焦点を当てて —

保 坂 芳 男

English Education in Yamaguchi Middle School:

With a focus on Native English Teachers

Yoshio HOSAKA

Abstract

Yamaguchi Prefecture hired native English teachers at all five of their middle schools, in order to enhance the quality of English education during the early 20th century. I have previously published papers focusing on English education in Iwakuni middle school (2012), Tokuyama middle school (2013), Toyora middle school (2017), and Hagi middle school (2018).

In this paper I would like to focus on native English teachers at Yamaguchi middle school, which has been a center of Yamaguchi Prefecture since 1863. In 1895, Alfred D Charlton was hired as the first native speaker there. 14 more native speakers were hired up until 1919.

Some of them moved to Yamaguchi College of Commerce after or before working at Yamaguchi middle school, or at the same time. Almost all of them had graduated from master courses. Generally their academic careers were of very high quality.

This system influenced greatly not only students at five middle schools but also the native English teachers teaching there. E. Gauntlett moved to Yamaguchi from Kanazawa and explored Akiyoshido. It is one of the largest limestone caves in the world. Owing to religious prosecution from Buddhists, he was forced to move to Tokyo to teach at Tokyo University of Commerce.

キーワード：旧制山口中学校，英語教育史，お雇い外国人，ガントレット，井上歌郎

1. はじめに

山口県の県庁所在地は山口市である。そこに明治3年設立の山口高等学校がある。文化13（1816）年上田鳳陽が「山口講堂」を創立，それを源流とするのが現在の山口高

等学校である。

明治3年に出された「大学規則」,「中小学規則」に基づき山口藩は学制改革を行った。明治3年11月23日,藩校山口明倫館を山口県山口中学と改称した。現在の山口高校は,この年を起源としている。後に,毛利家立鴻城学舎,私立防長教育会山口中学校等の変遷を経て,明治28年山口県尋常中学校が開校した。昭和23年には山口県立山口高等学校(新制)となり,現在まで,政界では岸信介(20期),佐藤栄作 両元総理(24期)等,財界では中安閑一(20期)元宇部興産社長・会長等,学界では,河上肇(1期)元京大教授・経済学者等,山口県のみならず日本を代表する多くの人材を輩出している。

文久3(1863)年に毛利藩の藩庁が萩から山口に移って以来,山口市は山口県の中心で県庁所在地であり,山口中学校は山口県を代表する旧制中学校であった。

2. 沿 革

山口高等学校のHPに沿革が記されている。それをまとめたものが資料1である。その詳細は『百年史』^①を参照されたい。

山口高等学校の沿革が複雑なのは,途中で山口高等中学校,山口高等商業学校,旧制の山口高等学校に発展して行くからである。その中で中等教育に関する部分の沿革を取り出し簡潔にまとめると以下の様になる。

山口中学校の起点は明治3年に山口明倫館を山口中学と改称した年にある(『百年史』, p.20)。明治5年の学制に従って山口中学は山口変則中学と改称した。しかし,変則中学への官費の支出は原則行われず,経営が不振となり廃止となった。明治6年地方費による変則小学の設置が認可され,山口変則小学が設置された。これは尋常小学とは異なり,内容は中学に準じた。しかしながらこの山口変則小学も経営困難になり明治7年8月に廃止された。この山口県教育の危機に際して毛利家の援助などをもとに明治8年1月,鴻城学舎が開校された。鴻城学舎は明治11年5月名称を山口中学とし私立山口中学が誕生した。この私立山口中学は明治13年6月県立となりここに山口県の中等教育の基礎が確立された。

当時の中学校には,尋常科(3年)と高等科(3年)があり,高等科が後に山口高等中学校や山口高等学校(旧制),山口高等商業学校に発展した。尋常科は,明治34年には山口県立山口中学校になりそのまま終戦を迎えた。

現在の山口高等学校,その直接の前身である旧制山口中学校は,明治28年,山口高等中学校の予備門として設立された山口学校在山口県尋常中学校に改組された。その年に卒業した生徒を一期生としている。

本研究では,尋常科の部分を中心に山口中学校の英語教育の発達,変遷について論述

をすすめることにする。

3. 山口中学校の英語教育

山口中学校の英語教育の歴史についての先行研究は、山口県を代表する中学校でありながら管見の限り、池田（1979）、永添（2002）など極めて少ない。というのは資料の少なさによるとも考えられる。山口中学校の資料の多くは太平洋戦争中の空襲や昭和27年の火事で焼失しているのである。

山口では早くから洋学に力を注いできた。慶応4年には三田尻海軍局にベデルを、明治4年に岩国英国語学所ではイギリス人の H. A. Stevens（保坂，2007，2008a，2008b）を雇用した。また、明治3年には山口明倫館兵学寮にフランス語教師クロセーを雇った。さらに明治4年には山口中学にドイツ人の Berlin と英国人ダルネーを、明治5年には萩中学にドイツ人 Hiller 夫妻（保坂，2018）を雇用した。

3.1 明治前半期の外国語教育

(1) ダルネーの採用

山口中学校の英語教育は英学寮にダルネー夫妻を招いたことに始まる。明治5年の学制では外国人を雇用する学校は対象外であったため、山口県では明治3年に設置した洋学寮⁽²⁾を存続させることができた。

ダルネーに関しては契約書や学則が残されている。それによると、ダルネーの採用は明治4年で月給が200^{ドル}弗である。それから1年ごとに50弗昇給する契約である。しかし明治6年、妻が病気のため神戸に戻った（資料2）。

授業内容に関しては英学寮の当時の教科書（パーレーの『万国史』など）から推測することができる。当時としては標準的な教科書を用いているが現在の中等教育と比べるとかなり高度な英語教育を行っていたと考えられる（資料3）。

(2) 選択必修外国語としてのドイツ語教育

山口中学校では明治16年3月に新潟県出身の司馬享太郎を三等教諭に任じ、新入生に対して英語の代わりにドイツ語の選択必修も認めた。当時の中学校教則大綱では中学校における外国語は英語に限られており、特別な場合は英語に代えてドイツ語、フランス語を課すことができるとなっていた。そこで、山口中学校では、英語とドイツ語の選択必修制にした（『百年史』，p.46）。

当時のドイツ語教師としては、明治17年に東京外国語学校を卒業して赴任した山口小太郎（後の東京外国語学校教授）、黒田岩之助、久後元長（後の五高ドイツ語教師）、

山上義雄がいた（『山口中学校本分校明治十七年報』）。

ドイツ語を専攻した学生の多くは山口中学校を卒業後、独逸語協会学校に進学した。

(3) 高等小学校への英語教師の派遣

明治19年の森有礼による一連の教育改革によって高等小学校が成立した。明治19年公布の小学校令では4年制の尋常小学校につながる4年制の高等小学校が設置された。その後明治23年には地域の状況に応じて高等小学校は2年制～4年制となった。明治40年の改正では義務教育年限が6年に延長され、高等小学校は小学校課程の上級2ヶ年（特別な場合3ヶ年も可）となった。ここでは英語は従来のまま「土地ノ情況ニ依リ」加設できる特別な科目で、明治44年の改正では、英語科は商業科の中で付随的に教授できるとされたが、科目からは除外された。

山口県文書館に、山口高等中学校の教員が県内の高等小学校に英語の教員として派遣された記録が残されている。

明治20年の「私立防長教育会関係山口高等中学校一件」（教育24）に当時、山口高等中学校の英語教員であった堅田少輔の出張記録が残されている。それによると、堅田は明治20年7月14日山口を出発し、山口及び徳山高等小学校に出張し、18日に山口に帰るとある。同様に同月20日にまた山口を出発し、豊浦高等小学校に出張し24日に山口に戻ったとある。特に徳山高等小学校では、第3学年を対象に第三リードルを半分教え、第2学年には第二リードルを70ページ教えた。第1学年には綴字を37ページ、第一リードルを36ページ教えている。堅田は明治4年コロンビア大学に数年在学し帰国した（『防長人物百年史』, pp. 224-225）。江利川（2006）は、高等小学校設置当時の英語教師に関して「小学校専科英語教員の英語力は、やはり中学校の卒業生レベルであったといえよう」（p. 170）と分析している。これから判断すれば、山口高等中学校の教員の派遣は画期的な政策であったと考えられる。

3.2 山口中学校の日本人英語教師

(1) 井上 歌郎

『百年史』に井上歌郎の教え子、藤本萬治の回想が残されている（p. 149）。

井上歌郎先生 英作文の達者な先生で、そのピッチの早さや板書の見事さなどは一流であった。背の低い頭の丸い先生で、少ししわがれ声で自由自在に話され、生徒が書記に懸命な時に窓際でチョークを抛りなげては受け取るという余裕ふりで、羨ましく思ったものだ。先生の授業中は質問など英語でさせられた。

正確な勤務時期は不明だが回想を残した藤本萬治は八期の卒業（明治 35 年卒）である。

それから判断すると井上歌郎は明治末期に山口中学校に勤務していたことになる。井上はその後東京の私立大成中学校教諭、千葉県の大多喜中学校³⁾に勤務した（鈴木, p. 153）。

井上は数多くの訳書参考書等の著書を執筆している。

『英文法学』（訳書）（松成堂出版, 1894 年）

『弗蘭克林自叙伝』（註釈）（岡崎屋書店, 1897 年）

『英和對譯新式尺牘軌範：全』（東京英語学会, 1897 年）

『英文法初歩＝New elementary English grammar for Japanese students』

（開新堂書店：後凋閣書店：岡崎屋書店, 1897 年）

『英和実用会話』（後凋閣書店, 1898 年）

『英文和譯例題集』（岡崎屋書店：修學堂, 1898 年）

『英語学自修全書』（東京英語学会, 1898 年）

『簡易英語』（少年英語叢書, 第 1 編）（東京英語學會, 1901 年）

『英文法と英作文』（建文館, 1908 年）

『英和會話：最新優良』（岡崎屋書店, 1910 年）

『ヒューマンインタコース講義』（早稲田図書出版協会, 1917 年）

これだけの著作を残しながら井上に関する研究を管見の限り知らない。今回の調査で判明したのは大多喜中学の後身の大多喜高等学校に彼の履歴書（資料 4）が残されていたということである。それによると鳥取出身の井上の英語力の基礎は共立学校、東京大学で養成されたようである。その後、山口中学校に勤務中の明治 32 年にいわゆる文検に合格し、師範学校尋常中学校高等女学校の英語科教員免許状を取得した。当時は、「難関の文検に合格するために厳しい試験勉強を自らに強いることによって、高度な英語力と豊富な専門的な知識を身につけていった」（田邊, 2012, p. 39）、「20 世紀に入った頃から、文検合格者に学力があり、との評判が立つようになったよう」（寺崎他（編）, p. 37）とあるように、文検合格者はかなりの英語力を有していたようであった。

(2) その他の日本人英語教師

『百年史』には、明治時代の英語教員として木幡忠（p. 151）、黒金泰信（p. 151）への回想がある。木幡は昭和 4 年に校長として再赴任する。黒金は米沢出身、明治 36 年東京大学文学部哲学科卒業、明治 43 年山口中学校に英語教員として赴任、大正 8 年に

徳山中学校長に栄転。その後三重県を経て長崎高等商業学校教授、そして大正8年第6代山口中学校校長になる。「山口中学校の中興時代が現出したのは黒金校長の訓育方針によるところが大きい」(p. 281)。「授業ぶりはまるでどこかの大学教授から講義を受けているよう」(p. 282)であった。

大正時代には、近藤春和教頭に対する回想があり、「予習をやかましく言われ、その訳は極めて綿密であった」(p. 285)。山根文平は広島高等師範学校の卒業で、「流暢な発音と訳読で生徒を魅了した」(p. 286)。彼は後に興風中学校の第四代校長(大正12年～昭和19年)になった。

昭和期の教員としては昭和4年に防長教育会の依頼で山形中学校長の木幡忠が第8代校長になった。木幡も東京大学文学部哲学科出身で明治期に山口中学校の英語教員に赴任、明治43年に金沢中学校教頭に転出、その後各中学校長を経て山口中学校に校長として再度の来任となった。他には名物教師の鳥坂欣一がいた。「先生は親分肌のユニークな存在で英語は達者、スポーツは万能(略)軍国調台頭の趨勢下であってリベラリストとして旗頭的存在」(p. 421)であった。

3.3 山口中学校の外国人講師

山口中学校には明治33年～大正8年、外国人講師(資料5)が勤務した。外国人講師の待遇は、当時の校長(月俸100円)よりも高額で月俸150円であった。明治43年からは月俸165円となった。家賃の一部も補助し、山口県は財政的処置を講じて英語教育の強化に努めた(『百年史』, pp. 154-155)。

(1) Alfred D Charlton⁽⁴⁾

『百年史』には米人チャートンとあるが、リバプール大学出身であること(『山口高等商業学校沿革史』, p. 227, p. 345)や、後述のE. Gauntlettに住居を貸したことなどの状況から、イギリス人でCharltonであると考えられる。山口中学校には、明治28年4月～明治29年7月、明治30年4月～明治30年7月の勤務である。以前は、第一高等中学校に、明治24年～明治30年まで勤務している(「国立公文書館」蔵の辞令)。また、山口大学にはカタカナで書いた署名とカタカナの印鑑で押印した資料が残されている。これらから日本語が達者であったことが予想される。

山口中学校の勤務時は山口高等学校と兼務していた。その後山口高等商業学校にも勤務し明治39年7月に退官、長年の勤務に対して防長教育会より記念品が贈呈された(『山口高等商業学校沿革史』, pp. 523-524)。さらに明治40年8月～大正2年9月、学習院に勤務している(『学習院大学五十年史』下巻, p. 60)。

(2) William Albert Davis (1865-1949)

Davis は、山口中学校には、明治 33 年 11 月～明治 34⁽⁵⁾年 4 月の勤務である。『百年史』には彼に関する記述は皆無である。が、彼の宣教師、英語教師としての活躍は、『日本キリスト教歴史大事典』、『来日メソジスト宣教師事典』に詳しい。アメリカ南メソジスト監督教会宣教師として 1891 年に来日し、宇和島 (91-96)、松山 (96-99) に伝道。この間、1890 年来日の南メソジスト宣教師バイス (Bice Mary F. 1865-1924) と 1893 年に結婚。いったん帰国して 1900 年妻と共に再来日し、山口 (-01)、京都 (01-15)、で伝道した後、関西学院 (15-20) に勤めた。(略) 20 年に帰米。21 年までカリフォルニアの日本人を対象に伝道。(『日本キリスト教歴史大事典』、『来日メソジスト宣教師事典』)。一方で、大正 5 年～大正 8 年、関西学院普通部・旧制中学部に勤務(『関西学院高中部百年史』, p. 446)。京都二中に、明治 38 年頃勤務(『京都府教育当事者職氏名』(明治三十八年五月調査), p. 3) した。

(3) L. H. Tracey

山口中学校に明治 34 年 4 月～明治 35 年 7 月勤務(『百年史』, p. 154)。『日本英学風土記』では、L. H. Trasy (p. 553) とあるが Tracey が正しいか。米人で「温和な人柄」(『百年史』, p. 154) であった。

(4) Lemond P. Gorbald

山口中学校に明治 35 年 6 月～明治 37 年 9 月勤務(『百年史』, p. 154)。『日本英学風土記』にも同様の記述 (p. 553) がある。Raymond か。「活発でユーモラスな人であった。(略) 生徒の中には、ゴルボルト先生などを野田の外人宿舎に訪ねてバイブルクラスに参加し、英語の親しみを覚えたものもいた」(『百年史』, p. 155)。補習科でも 10 人程度で教えていたらしい。「授業中教室では殺風景だというので、亀山公園を散歩しながら英会話の練習をしたことあがった」(『百年史』, p. 155)。「ゴルボルト先生によって、当時全国的に台頭しつつあった渡米熱が、わが山口中学校でも煽られた」(『百年史』, p. 155)。彼の勤務中の明治 36 年、英語研究会が発足した。これも外国人講師の影響とみられる(『百年史』, p. 155)。

(5) Moll Graves Pointon

山口中学校に明治 37 年 9 月～明治 39 年 8 月勤務(『百年史』, p. 154)。『日本英学風土記』では、Mole Grapes Pointon (p. 553) とある。Pointon ではなくて Boynton か。

(6) C. Arthur Reed

山口中学校に明治 39 年 8 月～明治 41 年 8 月勤務（『百年史』, p. 154）。『日本英学風土記』では S. Arthur Reed (p. 553) だが、『山口高等商業学校沿革史』（p. 529, p. 571, p. 572）から C. A. Reed とも考えられる。Japan Directory（第 40 巻上）（1910 年上）でも、C. A. Reed との表記している。

(7) William H Braddock

山口中学校には W. B. Braddock, 明治 41 年 8 月～明治 43 年 8 月勤務（『百年史』, pp. 154-155）とある。『日本英学風土記』では、William. Balock Braddock (p. 553) とある。YMCA 派遣教師, プリンストン大学卒の W. H. Braddock か（重久, p. 4）。

(8) Edward Gauntlett (1868-1956)

山口中学校の外国人講師の中では Gauntlett の研究はかなり進んでいる。1 つは、彼が山田耕柞の姉の恒と結婚し日本に永住したことによる。もう 1 つは彼の教え子や親族による研究が行われたことによると思われる。

資料 6 は Gauntlett の年譜である。立教中学での教え子の一人である古田隆也氏の『G. E. L. ガントレットの足跡と生涯』を筆者がまとめたものである。

また、曾孫の彩子^{サイコ}氏が「国際化の先駆者 — 明治中期に来日したある英国人の一生」（聖心大学大学卒業論文）としてまとめておられる。一方で山口在住時代に関しては河口昭氏が、岡山時代に関してはエスペラント関係者等が数多くの研究を行っている。

Gauntlett は、明治 40 年、金沢の第四高等学校から山口高等商業学校に転勤した。金沢の厳しい冬が夫の体に良くないと判断した妻の恒の決断によるものであった。山口では山口高等商業学校の英語教員として明治 40 年 9 月～大正 5 年 7 月までの約 9 年間勤務した。その時期に、明治 42 年 9 月から明治 43 年 3 月のわずか半年だけではあるが、山口中学校にも勤務した。しかし、山口では彼が組織したバイブルクラスが盛況となり危機感を感じた地元民から排斥運動が起こった。その結果、東京に移ることになった。そのあたりの様子を古田氏が以下のように書いている（p. 39）。

彼は指導していたバイブルクラスは段々盛んになった。そして下関管下の山口準教会の形を執るようになった。ところが山口は神道の盛んな所であった為か、キリスト教が拡大される事には或る人物を刺激して、それがもとで体の良い排斥運動が起こった。（略）古い昔の教え子であった佐野善作が校長である東京高商が商科大学に昇格するので、（略）佐野校長から東京商科大学への招聘の話があった。（略）以来二十五年の間を東京の商科大学に教える身となつた。

山口では病気が回復し、余暇を利用しての秋吉台地や長門峡の調査、教科書の出版等、充実した日々を過ごしていたが、地元の排斥運動のせいで東京に引っ越しすることになった。

本研究では英語教育史の観点から Gauntlett の功績をまとめてみた。以下の引用は特に出典の断りがない場合はすべて古田隆也氏の『G. E. L. ガントレットの足跡と生涯』（上下巻）による。古田氏は国会図書館所蔵の Gauntlett の著書をすべて目に通して分析されており、その力作の中から、教育者としての Gauntlett に関する記述に焦点を当てて論じたい。

① 教えることが大好き

「英語教師として東京高等商業、千葉中学、麻布英和中学、岡山第六高校、金沢第四高校、山口高等商業、立教大学、立教中学、文化学院、自由学園、横浜高等商業」（上、まえがき）以外にもたくさんの学校で教えていた可能性がある。筆者が調べた限りでは、他に、鴻城義塾（山口市）で明治 41 年～大正 3 年まで英語を教えたという記録が残されている。

「65 才の時でも週 30 時間位、東京のあちこちで教えていた。（略）長い年月の間教えて、週 30 時間以下の事はなく、その上、家庭でも随分教えていました」（p. 35）との回想が示すように Gauntlett は教えることが好きであった。

② 声色を使った授業

「高商では英会話・英習字を教わったが英会話の授業なども、声色を使ったりして大変面白かった。それに英国の民話なども話して下さったので、学生はむしろその時間を期待していた。（略）先生は授業時間中は絶対に日本語を使わなかった。（略）大変うまい日本語」（p. 24）であった。教職が彼の天職であったように思われる。

③ 工夫した採点法

「採点に関しては、注意深く採点法を考え、色々の記号で誤りを典型的に表わすようになっていました」（p. 35）。この採点法がどんな方法か残念ながら明らかにすることができなかった。

④ 生徒が理解し易い発音

彼の英語の発音は Mid-Atlantic Accent であったとの孫の鳴瀬久子の回想が残っている。

祖父は非常に多趣味の人でしたが、決して教育者であることを忘れませんでした。その一つの表れが彼の英語の発音でした。19世紀の人間でありながら、彼は、現在、一番聞きやすく、判りやすい Mid-Atlantic Accent で何時も話をしたり、教えたりしておりました。英国の発音とアメリカの発音の中間的なもので、誰にでも判りやすい英語を教えておりました。(p.47)

学生の視点に立った授業を行っていたことも多くの教え子から慕われた理由の一つではあるまいか。

⑤ ユーモアと冗談の名人

東京の日曜学校の生徒の回想 (p.50) が残されている。

ある時、私達に英語の小話をしてくださいました。無神論者の父親とその子供の話です。あるとき、父親が、「God is nowhere.」と書いた紙を、その子に渡しました。つまり、「神なんてどこにもいない」と、子供はしばらくその紙面を見ていましたが、「God is now here」と読みました。「神はそこに居られる」と言う訳です。

⑥ 改造兌換紙銀行券 1 円、5 円及び拾円の発行年と Gauntlett の英文執筆に関する考察 (pp.42-43)

明治 21 年発行の五円紙幣の裏側の英文は「Promises to Pay the Bearer on Demand Five Yen in Silver」と書かれている。この英文を書いたのが Gauntlett であったようである。

ガントレットの来日が明治 23 年 8 月 4 日であるから、発行の準備期間等を考えると、来日前に、この英文の原稿が書かれたと考えられる。

明治政府は紙幣印刷のためイタリア人のキヨッソーネを雇用した。彼がイギリスに英文の原稿を依頼したと思われる。「一円札の裏面の英文は、光栄なことに私の「手書きのもの」であると言う話を聞きました」(p.42) という教え子の証言もあるが、他にも状況証拠から判断しても古田氏は信憑性が高いと判断している。

彼の著作についても古田 (2003, pp.72-78) が詳しい。彼のイギリスでの建築会社や美術学校での勤務経験を生かして日本で英習字帖、教科書を発行し、好評であった。江利川 (2006) は、「*New Scientific Copy Books* (6 冊) がよく使用されていた」(p.189) と述べている。

(9) **James B Ayres**

James P エイレス、山口中学校に、明治43年4月～明治43年9月および明治44年4月～明治44年7月勤務とある（『百年史』, p. 154）。Japan Directory には J. B. Ayres とある（JD, 1985, p. 47）。

(10) **John Beecher**

明治43年8月～大正元年8月勤務（『百年史』, p. 154）。

(11) **Jacey Edwin. Moncrieff**

以前は萩中学校に明治43年9月～大正元年8月、勤務していた。マスター・オブ・アーツ（イリノイ大学）取得、明治45年9月1日に山口高商嘱託講師に就任（『山口高等商業学校商沿革史』, p. 575）。その後山口中学校に大正元年8月～大正3年3月まで兼務（『百年史』, p. 154）。

以後、萩中と山口高商のルートが確立し、山口高商勤務中は山口中学校の教員も兼ねることが普通となった。

(12) **William John Sutherland**

Sutherland の場合は逆で、最初に明治41年8月～明治43年8月まで山口中学校に勤務（『百年史』, p. 154）。その後萩中学校に大正元年9月～昭和3年4月まで勤務、さらに大正3年9月以降は山口高商にも勤務、「日本語がわからず、通訳付で授業した」（『山口高等商業学校商沿革史』, p. 576）。オーベリン大学の卒業である。

(13) **Frank Grayson Adams**

山口中学校に大正3年8月～大正5年9月勤務（『百年史』, p. 154）。Frank・クレソン・Adams、ベーツ大学、ハーバード大学院経済科卒、大正3年8月～大正5年9月山口高商業に勤務（『山口高等商業学校商沿革史』, p. 576, p. 753）。萩中教師との記述（池田, p. 553）もあるが、『山口県立萩高等学校百年史』では確認できない。見出しのスペルは、萩中勤務の Frank Grayson Adams という池田（p. 553）による表記を採用した。萩中での外国人講師の空白期の 大正3年4月サザーランドの後任で半年勤務した可能性が考えられる。

(14) **Lloyd ・イー・マウンド**

Lloyd イーモンドが山口中学校に大正6年10月～大正7年8月勤務とある（『百年史』, p. 154）。一方で池田（1979）では、Lloyd Iemond とある。『山口高等商業学校

商沿革史』(p. 755)には大正6年～大正7年に勤務, ロイド・イー・マウンドとの表記がある。どの表記が正しいかは特定はできないが, 25期卒業生(大正8年卒)から以下のような回想が残されている。

先生は英国人。とくに発音はやかましかった。全員が完全に覚えないと, 黒板いっぱいとその単語を書いていた」(25期, 元同志社大教授・篠田一人)、『山口高校いま同窓生は』, p. 38) (略) 毎時間, 小さな鏡を持ち込み, 生徒の口の開け方や形を教えていた先生もおり, 「このやさしい指導がいまでも忘れられない」(25期, 山口市で数学塾を営む片岡慶二)、『山口高校いま同窓生は』, p. 39)。

(15) Reba Hood Shaw

当時山口高商に勤務していた Glenn William Shaw の妻である。彼女は, 山口中学校に大正7年9月～大正8年3月, 勤務とある(『百年史』, p. 154)。彼女は後に大阪府女子専門学校に勤務しているがその時の資料の多くは, リーバ・フット・ショーとなっている(『大阪府女子専門学校十年史草稿』)。「レバ・エム・ショー, 京都市立商業実修学校に, 大正5年12月～大正6年7月, 勤務」(『五十年史』, p. 117)との記述もあり, 同一人物と考えられるがどれが正確な表記かは不明である。なお, 池田(1979)では, Leverhood Shaw と表記されている(p. 553)。しかしながら Reba Hood Shaw が正しいようである⁶⁾。

夫の Glenn は『出家とその弟子』などの翻訳家として有名。1916年来日, 大阪高等商業学校, 市岡中学, 今宮中学, 山口高等商業学校, 大阪外国語学校, 和歌山高商などで教える。詳細は速川(2004)を参照のこと。彼は日本語が堪能で, 後に日本のGHQに勤務した。

おわりに

池田(1979)は, 山口県独自の外国人講師雇用制度を, 「全国に稀に見る例で, さすがに明治期長閑の勢威を誇った, いかにも山口県らしい豪華さである」と述べ高く評価している(p. 553)。

さらに池田(1979)は, 「明治末迄山口中学校は高校進学率で全国の首位に在った。それは県下に山高中・山高商・^{マア}(山高校)が在り, 明治17年毛利元徳・井上馨が主張して30万円の基金で防長教育会が進学学生を援助したためである」(p. 564)とも述べている。また, 上級学校へ進んだ人の多くは「外人の発音をしらない他府県の生徒に比べ, 外人教師の講義がスムーズに受け入れられた」(『山口高校いま同窓生は』, p. 39)と

回想している。

以上のことから山口中学校は、受験だけでなく実用的な面からも外国人講師を雇用するなど充実した英語教育が行われていたことが窺える。また、山口中学校の外国人講師の多くは修士号を取得しており山口高等商業学校の教員も務める場合が多くこれは全国的には極めて珍しい現象である。同県の萩中学校も同様であったが、独自の奨学金制度と並んで、外国人雇用制度も山口県が教育県と言われる所以であろう。

《注》

- (1) 『百年史』の正式名は『山口県立山口高等学校百年史』である。引用が多いため、『百年史』と略した、詳細な書誌情報は参考文献で確認して欲しい。
- (2) 明治元年、山口明倫館の兵学寮に英学科が設けられた。明治3年の藩の一連の教育改革で、明倫館から組織変えとなった山口中学内に新設されたのが洋学寮である。その中の1つが英学所（英学寮）と考えられるが詳細は不明である（『山口県教育史』p.216）。他に独学所、仏学所があった。
- (3) 大多喜高校に残されている履歴書から判断すると、井上の山口中学校での勤務は明治32年から休職する明治36年までと考えられる。井上歌郎はこれほどの著作を残しながら研究対象とされて来なかった。鈴木（1978）では井上は後に大多喜中学校の校長になったとしている。大多喜高校に残されていた履歴書によると井上は大多喜中学校では、校長ではなく教員の身分であった。
- (4) 外国人講師の記述等は主に『百年史』を採用した。その他の資料を含め検討した結果、一番妥当だと思われる表記、情報を本論文に記載した。おそらく間違いも多いであろうが訂正は今後の研究に待ちたい。
- (5) 『百年史』（p.154）では、Davisの勤務は明治35年4月までである。一方、『日本キリスト教歴史大辞典』では明治34年までである。次の講師、Traceyの赴任が明治34年なので、『百年史』の記述が間違いであると判断した。
- (6) Shaw夫人に関しては、「倉田百三とキリスト教：英訳本『出家とその弟子』をとおして」などの論文を書かれている日本英学史学会中国四国支部の野村勝美先生に教えて頂いた。

参考文献

- 朝日新聞社（編）（1982）.『山口高校 いま同窓生は』山口高校同窓会発行。
- 池田哲郎（1979）.『日本英学風土記』篠崎書林。
- 江利川春雄（2006）.『近代日本の英語科教育史』東信堂。
- 学習院大学五十年史編纂委員会（編）（2001）.『学習院大学五十年史』下巻、学習院大学。
- 関西学院高等部百年史編纂委員会（編）（1989）.『関西学院高中部百年史』関西学院高中部。
- 京都府教育会（1904）.『京都府教育当事者職氏名』（明治三十八年五月調査）京都府教育会。
- 重久篤太郎（1967）.「YMCA 英語教師」『日本英学史研究会報告』第74号、pp.1-4.
- ジャン・W. クランメル（編）（1996）.『来日メソジスト宣教師事典 1873-1993年』教文館。
- 末弘錦江（1966）.『防長人物百年史』山口県人会。
- 鈴木彦二郎（1978）.「三浦勘之助の歩いた道」『英学史研究』第11号、pp.153-163.
- 立脇和夫監修（1997）.『JAPAN DIRECTORY 明治幕末在日外国人・機関名鑑』ゆまに書房。
- 田中巖（1941）.『同窓会報』第37号、山口県立山口中学校同窓会発行。

- 田邊祐司 (2012). 「英語教師の英語力をめぐって：文検からの視座」『専修大学外国語教育論集 (40), pp. 25-45.
- 寺崎昌男・「文検」研究会 (編) (2003). 『「文検」試験問題の研究 — 戦前中等教員に期待された専門・教職教養と学習』学文社.
- 永添祥多 (2002). 「明治後期～大正中期の中学校における外国人教師の役割：山口県における外国人教師制度を事例として」, 『教育學研究』69(4) : pp. 506-517.
- 日本キリスト教歴史大事典編集委員会 (編) (1988). 『日本キリスト教歴史大事典』教文館.
- 野村勝美 (1996). 「倉田百三とキリスト教：英訳本『出家とその弟子』をとおして」『英學史會報』19号, pp. 13-21.
- 速川和男 (2004). 「翻訳者としての Glenn. W. Shaw」『東日本英学史研究』(日本英学史学東日本支部紀要) 第3号, pp. 10-18.
- 府女専資料刊行会 (編) (2014). 『大阪府女子専門学校十年史草稿』大阪公立大学共同出版会.
- 古田隆也 (2003). 『G. E. L. ガントレットの足跡と生涯』自費出版.
- 保坂芳男 (2007). 「岩国英国語学所教師ステーベンスに関する研究 — 採用経過, 契約を中心として —」『英学史論叢』(日本英学史学会中国・四国支部研究紀要) 第10号, pp. 23-32.
- 保坂芳男 (2008a). 「岩国英国語学所卒業生の進路に関して — 教師ステーベンスの影響に焦点をあてて —」『英学史論叢』(日本英学史学会中国・四国支部研究紀要) 第11号, pp. 3-12.
- 保坂芳男 (2008b). 「岩国英国語学所に関する研究 — 教育内容と教授法の解明を中心として —」『日本英語教育史研究』第23号, pp. 101-122.
- 保坂芳男 (2012). 「H. D. Leland に関する研究：岩国中学での教育活動を中心に」『日本英語教育史研究』第27号, pp. 31-49.
- 保坂芳男 (2013). 「明治期山口県における外国人講師制度に関する研究」『LET 研究紀要』(第1集) pp. 43-50.
- 保坂芳男 (2017). 「豊浦中学の英語教育に関する研究：外国人教師に焦点を当てて」『人文・自然・人間科学研究』拓殖大学人文科学研究所発行, pp. 75-90.
- 保坂芳男 (2018). 「萩中学の英語教育に関する研究：外国人教師に焦点を当てて」『英学史研究』(日本英学史学会研究紀要) 第51号, pp. 39-63.
- 松村幹男 (1997). 『明治期英語教育研究』辞游社.
- 山口県 (2000). 『山口県史 史料編 近代 I』山口県発行.
- 山口縣教育會 (1925). 『山口縣教育史 上卷』大同印刷舎.
- 山口県教育会 (編) (1986). 『山口県教育史』山口県教育会発行.
- 山口高等商業学校 (編) (1940). 『山口高等商業学校沿革史』山口高等商業学校発行.
- 山口県立徳山高等学校百年史編纂委員会 (編) (1985). 『山口県立徳山高等学校百年史』山口県立徳山高等学校発行.
- 山口県立山口高等学校百年史編纂委員会 (編) (1972). 『山口県立山口高等学校百年史』山口県立山口高等学校発行.

(原稿受付 2019年10月31日)

資料1 山口高校の沿革（山口高等学校 HP 等より筆者が抜粋）

文化12年	上田鳳陽 山口講堂を創立。
弘化2年	山口講堂を山口講習堂と改称。
文久3年	山口講習堂を山口明倫館と改称。
明治3年	山口明倫館を山口中学と改称
明治13年	県下を5中学区に分け、県立山口中学校を中心に経営、山口のみ高等・尋常（予科）の両中等科を置く。
明治19年	山口高等中学校の成立明治27年山口高等学校の成立
明治28年	私立防長教育会山口中学校の校舎及び生徒を引継ぎ、山口高等学校予科生徒を編入し山口県尋常中学校と改称、第一回卒業生を出す。
明治34年	山口県立山口中学校と改称、補習科を置く。
明治38年	山口高等商業学校の成立
大正8年	官立山口高等学校開校。
昭和23年	学制改革により山口県立山口高等学校、同併設中学校と改称。 通信教育部設置。

資料2 ダネー関連資料

契約書 太政類典

二四 十月 四年

山口県学校教師トシテ英人「ダネー」ヲ雇入

文部省伺

山口県伺

当県洋学篤志ノ者年々多人数（略）英人「ダネー」ト申者初年一ヶ月二百弗第二^二月一ヶ月二百五十弗第三^三カ年一ヶ月三百弗都合三カ年ノ期限マテ雇入（略）

九月二十五日 文部省

ダネー契約解除

二十二 十月二十八日 六年

山口県出張文部省雇英人ダネー雇止

文部省伺

山口県出張当省御雇外国教師英人ダネー明治四辛未十一月一日ヨリ向三^三カ年月給初年二百弗毎一年五十弗ノ増額ニテ御雇入相成居候處同人妻病氣ニテ療養トシテ神戸表へ引移（略）以テ鮮約ノ儀申出候ニ付遇ル九月三十日限暇差遣候條此段御届申出候也

十月二十八日 文部省

資料3 (二) 英学寮 (『山口県教育史 上巻』 pp. 333-338)

学 則

- 一 此校ニ於テ生徒ノ人員三十人ヲ限り若シ欠員アラハ篤志者ヲシテ是ニ満タシム
- 一 生徒ノ等位ヲ六級ニ分チ各級教科ノ多少同一ナラスト雖モ教師三年ノ期限ニ応シ一級六ヶ月之定課トシ六箇月ノ終至テ験試ヲ加ヘ生徒学業之進否ニ依リ点涉ス若シ生徒怠惰ニシテ一箇年ヲ経猶一級ヲ卒業シ能ハサル者ハ退校ヲ命ス
- 一 教師伝習之時間ヲ朝九字ヨリ夕一字迄五時間ヲ以テ定員ノ生徒ヲ教授ス
- 一 英語ヲ和語ニ訳スルハ其ノ言ノ適否雅俗ニ注意シ誤謬或ハ彼ニ達シ此ニ疎キノ弊無キヲ要ス
- 一 六級ヨリ一級ニ至ル迄各算学ヲ兼学セシム
- 一 生徒彼ノ六級終ラハ大学専門学科ニ入り修業ヲ要ス故ニ左之教則中高等ノ学科ヲ記セズ

教 則

第六級

- 一 習字 筆勢又西洋二十六文字 十二段習字本之内第一第二第三
- 一 綴字 短綴字之文字及其発音 ウヘブストル氏綴字本
- 一 読方 和語ニ訳ス サンドル氏第一語国書
- 一 算学 数目命位法ヨリ加減乗除

第五級

- 一 習字 小字頭字 前書続キ第四、五、六、七
- 一 綴字 長綴ノ文字及其発音 前書
- 一 読方 和語ニ訳ス 前書之続第二、三、
- 一 会話 ベルリンジ氏英仏通弁書之初編
- 一 算学 度量権衡法最大等数約分通分加分減分乗分除分

第四級

- 一 習字 細字頭字其他 前書之続キ第八、九、十、十一、十二、
- 一 読方 和語ニ訳ス 前書第四、五、
- 一 会話 単語対応日用之語ヨリ書翰之模例 前書
- 一 書取 教師時ニ応シ題ヲ命シ其誤ヲ訖正ス
- 一 文法 文字論ヨリ句読頭字ノ用等 モルレー氏文典其他
- 一 作文 和語ヲ英語ニ訳ス
- 一 地学 両半球ノ大意ヨリ各国ノ支配強弱広 気候地質等 ガイ氏地理書
- 一 算学 正比例転比例自乗比例連続比例交互比例互較法漸加漸減比例

第三級

- 一 書取
- 一 作文 和語ヲ英語ニ訳ス
- 一 史学 古人ノ行跡成敗等詳得スヘシ パーレー万国史
- 一 地学 天体論三球互ニ使用之解等 前書
- 一 算学 差文平方法点鼠加減乗除同奇零数生活乘法括法等

第二級

- 一 作文 記文高等文
- 一 算学 点鼠問題測量術等
- 一 史学 前科習熟

第一級

- 一 文法 前科習熟 クヘケンボス文典其他
- 一 史学 前科習熟
- 一 窮理学 固堅体流動体抵抗力重力等

資料4 井上歌郎の履歴書（一部簡略）

明治 3年	鳥取市川端 4 丁目で出生
16年 7月	鳥取市公立循誘小学校の小学中等科卒業
17年 9月	鳥取県立尋常中学校に入る
22年 9月	東京私立共立学校に入る
27年 7月	第一高等学校第一部英法学科卒業
9月	東京帝国法科大学（英法律学科）
32年 2月	山口中学校英語教師
33年 3月	師範学校尋常中学校高等女学校英語科教員免許状
33年 9月	英語科主任
36年 1月	休職
36年 3月	東京私立大成中学校英語科講師
37年 1月	私立東洋商業専門学校英語科講師
44年 9月	大多喜中学校教諭
大正 2年 5月	大多喜中学校舎監
10年 4月	新潟県立新津高等女学校校長

資料5 山口中学校外国人教師一覧（『百年史』（p. 154）他より筆者が作成）

講師名	出身地	在任期間
Alfred D. Charlton	英国	明治28年4月～明治29年7月 明治30年4月～明治30年7月
W. A. Davis		明治33年11月～明治34年4月
L. H. Tracey		明治34年4月～明治35年7月
Lemond P. Gorbald		明治35年6月～明治37年9月
Moll Graves Boynton		明治37年9月～明治39年8月
C. Arthur Reed		明治39年8月～明治41年8月
William B. Bradock		明治41年8月～明治43年8月
Edward Gauntlett	英国	明治42年9月～明治43年3月
James B. Ayres		明治43年4月～明治43年9月 明治44年4月～明治44年7月
John Beecher		明治43年8月～大正元年8月
J. E. Moncrieff	米国	大正元年8月～大正3年3月
William John Sutherland	米国	大正3年3月～大正3年8月
Frank C. Adams	米国	大正3年8月～大正5年9月
Lloyd E. Mound		大正6年10月～大正7年8月
Reba Hood Shaw		大正7年9月～大正8年3月

資料6 Gauntlett 年表（古田隆也（2003）の年表（pp. 83-110）を筆者が要約）

1868年	12/4 イギリス教会の牧師ジョンと母フランセスの次男として Wales の Swansea に生まれた。
1880年	Swansea 市のグラマースクールに入学
1881年	E. ガントレット兄弟は、1885年まで Brighton のグラマースクールに転校
1884年	明治22年（1888年）まで E. Gauntlett は「南ケンジントン科学及び美術学校」スウォンジー分校の助教授となる。
1889年	E. ガントレット渡米（サンフランシスコ）したが思うような仕事がなかった。
1890年	8/14 E. ガントレット横浜到着
1891年	4月～25年3月 東京高等商業学校で英語・ラテン語の講師
1892年	4月～明治28（1895）年3月 千葉中学校に勤務
1894年	この夏、軽井沢で山田恒と初めて出会った。
1895年	4月から明治33（1900）年7月まで麻布英和中学校に勤務
1898年	10/28 恒と結婚
1900年	8月から明治39（1906）年7月まで岡山第六高等学校へ英語教師として赴任
1905年	エスペラント通信講座開始
1906年	8月から明治40（1907）年7月まで金沢の第四高等学校へ転勤

1907年	9月から大正5（1916）年7月まで山口高等商業学校の英語講師として勤務
1916年	8月から昭和10（1935）年3月まで東京高等商業学校の英語講師として勤務
1919年	11月から、私立立教学院、立教大学講師を昭和11（1936）年まで兼任。昭和15年まで立教中学校の講師をしていた。
1925年	8/28 勲四等旭日小綬章を受賞
1935年	1/25 勲三等瑞宝章を受章。3月東京商科大学講師を退職
1941年	1月から昭和19（1944）年9月まで、横浜高等商業学校の英語講師 5/6 日本国籍を取得
1944年	自由学園及び横浜高等商業学校を9月に辞任。
1945年	10月から昭和22（1947）年3月まで終戦連絡中央事務局嘱託、総裁官房翻訳課勤務
1947年	4月外務省嘱託、大臣官房勤務に昭和23（1948）年迄勤務する
1953年	3月外務省講師、外務省研修所講師辞職（49年から）、84歳
1956年	7/26 自宅の新宿区百人町380で死去



退職の辞

橋 本 信

(拓殖大学北海道短期大学教授)

本年2020年3月をもって退職するにあたり、ご挨拶を申し上げます。1987年4月本学農業経済科助教授として幸運にも採用され、以来33年間専任教員として仕事をさせていただきました。これもひとえに数多くの教職員のおかげであり、深く感謝申し上げます。

赴任当初5年間は旧校舎の納内町で学生と生活を共にするような教員生活が新鮮であったとともに、教育者として様々な面で鍛えられたと懐かしく思い出されます。

ヘーゲル法哲学の研究で研究者の道を歩み始めたのですが、精神現象学の解読なしではさらに前進できないという想いがあり、精神現象学の「理性」の章まで継続的に論文を書き進めるつもりでいました。

1992年に現校舎への移転をきっかけに地域との関わりが深くなり、それが研究にもそのまま反映することになりました。民衆史掘り起し運動に関わることで、「人間的普遍性・社会的特殊性・身体的個性」というカテゴリーを定式化することに取り組みました。地域おこしに関わることで、グリーン・ツーリズムの取組みを北空知の仲間と一緒に始めることになりました。それだけではなく、本学の教育課程内の一科目に取り入れられることで、担当教員の責務からいくつかの論文などを執筆もしました。

この6年間は「人口減少社会」という問題をグローバル・ナショナル・ローカルな視点で取り組まなければならないと考え、2年ゼミナールのテーマに設定してきました。このテーマでは論文という形での結実を見ていないのですが、現実と理論の両面で現在進行形のままであると考えています。現在進行形のを現在の学生たちにどのように伝えることができるのかが現在の大学教員にとって、とりわけゼミナール教育にとって問われていることなのかもしれません。

退職後も研究者の道を歩むつむりの私にとって原点回帰が求められていると実感しています。私にとっての原点回帰はヘーゲル法哲学研究の本格再開に他なりません。牛歩の歩みであっても、持続的に続けて行くつもりですので、今後ともよろしく願いいたします。

橋本信教授 略歴

〈生 年〉

1949年6月27日 北海道名寄市生まれ

〈学 歴〉

1973年3月 北海道大学文学部哲学科卒業 文学士
1975年4月 北海道大学文学研究科修士課程入学
1977年3月 北海道大学文学研究科修士課程修了 文学修士
1978年4月 北海道大学文学研究科博士課程入学
1984年3月 北海道大学文学研究科博士課程単位取得修了満期退学

〈職 歴〉

1987年4月 北海道拓殖短期大学農業経済科助教授採用
2000年10月 拓殖大学北海道短期大学環境農学科教授

〈主要業績〉

1990年3月 「人間＝生活過程論構想序説」 拓殖大学論集 184号
1992年3月 「人間的意識の経験」 拓殖大学論集 196号
1995年4月 「感覚における人間的意識の経験」 拓殖大学研究年報 25号
1997年12月 「知覚における人間的意識の経験」 拓殖大学論集 227号
1999年11月 「時代の暴力と民衆の論理」 唯物論研究年報 4号
2002年10月 「アイデンティティの経験をめぐって」 札幌 唯物論 48号
2003年3月 「日本におけるグリーン・ツーリズムの現状と可能性」 拓殖大学論集 250号
2005年4月 「新規就農による地域活性化」 月刊社会教育 594号
2006年2月 「深川輝人工房の実践と成果から」『北海道再生のシナリオⅡ』
2009年3月 「日本のグリーン・ツーリズムにおける農業・農村体験の意義」 拓殖大学論集 272号
2016年3月 「北海道におけるグリーン・ツーリズムの新たな局面」 拓殖大学論集 302号



感謝のことば

マーティン メルドラム
(工学部准教授)

勤続 23 年間、澁刺とした若い方々と過ごした時のなかで、老いを感じたことはありません。しかし突然に、定年の時は訪れました。国際学部の元気な学生の皆様と、より生真面目な工学部の学生の皆様、両方の学部で教えることができたことは幸いでした。とりわけ、米国留学をめざし勤勉な、勇気ある国際エンジニアの皆様に教える機会をもつことができたことに、深く感謝します。学生の皆様がのちに卒業し、いい就職先が決まると知らせてくれた時は嬉しく、教職に就いたことへの充実感に包まれていました。

また、私を信じ、初の国際学部、その次に国際エンジニアコースとの、その準備段階から参加させてくださり、それらのプロジェクトを成功に導いた拓殖大学に感謝いたします。

最後に、言葉の問題と知識不足で手順よくできなかった時に、辛抱強くサポートしてくださった同僚と、スタッフの皆様に感謝申し上げます。飲み込みが悪かったことを詫言ひなければなりません。私の教え子であった GPA の学生には言わないでおいください！ 心の内を明かすならば、定年というより卒業するような気持ちです。卒業していく学生のように、今までのような支えなしで、これからどうやって生きていこうかと考えあぐねています。

入学式では希望に満ちた新入生を迎え、卒業式では色鮮やかな着物をまとった、意欲溢れる学生を送り出す、大学の行事はいつもとても楽しみでした。

皆様とともに過ごした思い出は、美しい国際八王子キャンパスの研究室の窓から見えていた景色、春の桜、夏の濃い緑、秋の色鮮やかな紅葉、冬の雪景色とともに、いつまでも私の心から消えないことでしょう。

マーティン メルドラム准教授 略歴

〈生 年〉

1954年 8月21日 スコットランド生まれ

〈学 歴〉

1975年 9月 1日 (英国) ストール・カレッジ 応用物理学部 物理学専攻入学

1976年 6月 1日 (英国) ストール・カレッジ 応用物理学部 物理学専攻卒業 (ONC)

1976年 9月 1日 (英国) グラスゴー工科大学応用物理学部 物理学専攻入学

1979年 6月 1日 (英国) グラスゴー工科大学応用物理学部 物理学専攻卒業 (HNC)

1988年 4月 1日 (英国) ヘンリー・マネージメント・カレッジ ビジネス・マネジ
メント専攻入学

1990年 6月15日 (英国) ヘンリー・マネージメント・カレッジ ビジネス・マネジ
メント専攻卒業 (BMD)

〈職 歴〉

1975年 7月 1日 Strathclyde Regional Council, Ayrshire, UK. Lab Technician
(至 1986年 9月)

1984年 4月 1日 Sunshine Business School, 池袋, 東京, 日本 英語教師 (至 1986
年 2月)

1986年 3月 1日 Euro Press Ltd. London, U.K. 営業マネージャ・経理 (至 1988年 2
月)

1988年 2月 1日 Overseas Courier Service, London, U.K. 宣伝部長 (至 1989年 1月)

1988年 2月 1日 MM Marketing, Wimbledon, London, U.K. 社長 (至 1991年 1月)

1988年 2月 1日 インタースクール 東京, 日本 英語 翻訳等 教師 (現在に至る)

1991年 2月 1日 日本科学技術翻訳協会, 東京, 日本 英語教師 (至 1991年 12月)

1996年 9月 1日 中央大学 文学部 東京, 日本 非常勤講師 (至 1999年 7月)

1998年 9月 1日 拓殖大学 工学部 東京, 日本 非常勤講師 (至 1999年 7月)

2001年 4月 1日 拓殖大学 工学部 東京, 日本 特別非常勤講師 (至 2010年 4月)

2001年 4月 1日 調布学園短期大学 人間福祉学科 (現 田園調布学園大学) 東京, 日
本 非常勤講師 (至 2008年 3月)

2005年 4月 1日 東京女学館短期大学 国際教養学部 東京, 日本 非常勤講師 (至
2010年 3月)

2010年4月1日 東京工業大学 リーダーシップ教育院 東京, 日本 特任准教授

2010年4月1日 拓殖大学 工学部 東京, 日本 准教授

〈主要業績〉

2009年10月 “Grammar Makes Pictures” Makes Grammar Make Sense 拓殖大学
論集 人文・自然・人間科学研究第22号

2011年3月 Word Choice from the Fifth Dimension 拓殖大学 語学研究第124号

2015年3月 The Kinesthetic Method 拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究第
33号

2015年3月 Written Corrective Feedback (WCF): Problems and Solutions 拓殖
大学 語学研究第132号

拓殖大学研究所紀要投稿規則

(目的)

第 1 条 拓殖大学（以下、「本学」という。）に附置する、経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所、理工学総合研究所及び人文科学研究所（以下、「研究所」という。）が刊行する紀要には、多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し、研究活動の促進に供することを目的とする。

(紀要他)

第 2 条 研究所の紀要は、次の各号のとおりとする。

- (1) 経営経理研究所紀要『拓殖大学 経営経理研究』
- (2) 政治経済研究所紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
- (3) 言語文化研究所紀要『拓殖大学 語学研究』
- (4) 理工学総合研究所紀要『拓殖大学 理工学研究報告』
- (5) 人文科学研究所紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』

2 研究所長は、次の事項について毎年度決定する。

- (1) 紀要の『執筆予定表』の提出日
- (2) 投稿する原稿（以下、「投稿原稿」という。）及び紀要の『投稿原稿表紙』の提出日
- (3) 投稿原稿の査読等の日程

(投稿資格)

第 3 条 紀要の投稿者（共著の場合、投稿者のうち少なくとも 1 名）は、原則として研究所の兼任研究員および兼任研究員（以下「研究所員」という。）とする。

2 研究所の編集委員会が認める場合には、研究所員以外も投稿することができる。

(著作権)

第 4 条 投稿者は、紀要に掲載された著作物が、本学機関リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。

2 共同執筆として紀要に掲載する場合には、共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し、投稿代表者に承諾書を提出しなければならない。投稿代表者は、共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

(執筆要領および投稿原稿)

第 5 条 投稿原稿は、研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。

- 2 投稿原稿は、図・表を含め、原則として返却しない。
- 3 学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は、紀要に投稿することはできない（二重投稿の禁止）。

(原稿区分他)

第6条 投稿原稿区分は、次の表1、2のとおり定める。

表1 投稿原稿区分：経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所及び人文科学研究所

(1)論文	研究の課題、方法、結果、含意(考察)、技術、表現について明確であり、独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
(2)研究ノート	研究の中間報告で、将来、論文になりうるもの(論文の形式に準じる)。新しい方法の提示、新しい知見の速報などを含む。
(3)抄録	経営経理研究所、政治経済研究所、言語文化研究所、人文科学研究所の研究助成要領第10項(2)に該当するもの。
(4)その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿(公開講座記録等)については、編集委員会において取り扱いを判断する。また、編集委員会が必要と認めた場合には、新たな種類の原稿を掲載することができる。

表2 投稿原稿区別：理工学総合研究所

(1)論文、(2)研究速報、(3)展望・解説、(4)設計・製図、(5)抄録(発表作品の概要を含む)、(6)その他(公開講座記録等)

- 2 投稿原稿区分は、投稿者が選定する。ただし、紀要への掲載にあたっては、査読結果に基づいて、編集委員会の議を以て、投稿者に掲載の可否等を通知する。
- 3 紀要への投稿が決定した場合には、投稿者は600字以内で要旨を作成し、投稿した原稿のキーワードを3～5個選定する。ただし、要旨には、図・表や文献の使用あるいは引用は、認めない。
- 4 研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表(原稿)の投稿原稿区分は、原則として論文とする。
- 5 研究所研究助成を受けた研究所員が、既に学会等で発表した研究成果(原稿)は、抄録として掲載することができる。

(投稿料他)

第7条 投稿者には、一切の原稿料を支払わない。

- 2 投稿者には、紀要3部を贈呈する。
- 3 投稿者が研究所員の場合には、掲載の抜き刷りを50部まで無料で贈呈する。50部を超えて希望する場合は、超過分について有料とする。

(リポジトリへの公開の停止及び削除)

第8条 投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合または編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には、リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

(その他)

第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については、編集委員会の議を以て決定する。

(改廃)

第10条 この規則の改廃は、研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附則

この規則は、平成29年4月1日から施行する。

拓殖大学人文科学研究所紀要 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領

1. 発行回数

紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』（以下、「紀要」という）は、原則として年 2 回発行する。原稿提出期日および発行は、次のとおりとする（厳守）。

(1)	原稿は、 6 月末日締切 - 10 月発行
(2)	原稿は、 10 月末日締切 - 3 月発行

2. 執筆予定表

投稿希望者は、研究所が定めた日までに、紀要の執筆予定表に必要な事項を記入・捺印し、学務部研究支援課（以下、「研究支援課」という。）に提出する。

3. 使用言語

使用言語は、日本語又は英語とする。ただし、これら以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に人文科学研究所編集委員会（以下、「編集委員会」という）に書面にて申し出て、許可を受ける。

許可を受けた原稿は、必ず外国語に通じた人の入念な校閲を受けたものに限る。

4. 様式

投稿する原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿 2 部を、編集委員会に提出する。

- (1) ワープロを使用する際は、A4 判の白紙片面を縦長に用い、横書きで、1 行 39 文字、1 ページ 34 行で印字する。その際、天地、左右各 30 mm 程度の余白をとっておく。縦書きの場合もこれに準ずる。
- (2) 欧文による原稿の場合は、A4 判の白紙片面を縦長に用い、天地左右の余白を 30 mm 程度とり、1 行 78 文字、1 ページ 34 行で印字する。外国語の要約の原稿もこれに倣う。
- (3) 原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として、A4 縦版・横書で次のとおりとする。なお、日本語以外の言語による原稿の場合もこれに準ずる。
 - ① 日本語および全角文字で記す場合、原則として 24,000 字以内。
 - ② 欧文の場合、原則として 48,000 字以内
- (4) 投稿者は、紀要の複数の号にわたり、同一タイトルで投稿を希望することはできない。ただし、「資料」の場合は、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で、記載原稿の全体像と回数を明示しなければならない。

5. 原稿

- (1) 原稿区分は、「拓殖大学研究所紀要投稿規則」に記載されているとおりするが、「その他」の区分、定義については付記のとおりとする。
- (2) 原稿の受理日は、研究支援課に到着した日とする。
- (3) 投稿は、完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4) 投稿する原稿とあわせて、「拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究」投稿原稿表紙に必要な事項を記入、「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し、原稿提出期日までに添付する。

6. 本文表記

- (1) 本文の構成を章・節・項のように分ける場合、それぞれの表記の仕方は、例えば、章は I・II……、節は 1・2……、項は 1)・2)……などの表記方法があるが、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの表記方法に準ずること。
- (2) 数字は算用数字を用いる。数字や欧字は、1字のみの場合を除き、半角とする。
ただし、縦書きの場合に限り、数字は原則として漢数字を用いる。
- (3) 特殊な字体（イタリック・ボールド・ギリシャ文字など）・紛らわしい文字（I〈エル〉・1〈イチ〉・i〈アイ〉・0〈ゼロ〉・O〈オウ〉など）や大文字・小文字（Wとwなど）は、明瞭に区別できるような指定する。また、添え字も、上付き・下付きを明瞭に指定する。
- (4) 本文中に文献・資料を引用・参照する場合は、下記の例のように、文献・資料の著者名（姓のみ）と発表年を示し、必要に応じて関連ページも示す。
青木（2001）は……、上村（2002：50-61）は……、青木・上村（2003）によれば……、……という説がある（大山 1998：43-52）。……という見解もある（飯田 2003；太田 1999）。青木ほか（2004）は……、など。
- (5) 本文中に文献・資料の一部を引用する場合は、引用部分を、「」でくくる、字下げする、活字ポイントを小さくする、などの方法で表す。

7. 図・表・数式の表記および作成

- (1) 図（図には写真も含む）および表は必要最小限にとどめる。とくに、同じデータに関する図と表の重複は避ける。
- (2) 図および表は、各図・各表ごとに別紙とし、それぞれ、図 1・図 2… 表 1・表 2…のように通し番号を明示し、執筆者名を記入する。
- (3) 図および表のタイトル・説明文・出典などの原稿は、別紙にまとめる。外国語の要約をつけた場合は、図・表のタイトルと説明文は、外国語を併記することができる。
- (4) 本文中の図および表の挿入希望位置は、本文原稿の右側余白に記入する。また、図・表の大きさや体裁について希望がある場合は、本文原稿上に枠で指定するか、おおよその大きさなどを右側余白に記入しておく。なお、図・表の大きさや体裁は、編集委員会で決める。したがって執筆者の希望に添えない場合もある。
- (5) 図および表を本文中に引用する際は、「図 1によれば……」「……は表 3に示される」などのように示す。
- (6) 図は、黒インクで明瞭に描いたものか、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して描いたもので、そのまま写真製版が可能なもの（版下原稿）に限る。
- (7) 表は、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して作成する。
- (8) 図中や表中の文字や数字の大きさ、図の表現の細かさについては、刷り上がりの大きさで明瞭に読みとれるよう、縮小率を十分考慮して決める。
- (9) 数式は専用ソフトなどを使用して正確に表現する。数式の上下は 1 行ずつあける。

8. 注とその記載方法

- (1) 注は、本文内容の補足説明を行う場合と、引用・参照した文献・資料の出所を明示する場合に用いる。
- (2) 本文中の当該箇所の右肩に（ ）でくくった通し番号をつけ、注の内容は、本文のあとに、通し番号順にまとめて記す。

9. 文献・資料の表示方法

本文中で引用・参照した文献・資料を表示する方法としては、本文中には著者の姓と発表年のみを記し（これについては、前ページの本文表記4を参照のこと）、原稿末尾の文献・資料表に詳しく表示する方法と、本文中には記さず、本文のあとの注に詳しく表示する方法の二つが一般的である。

(1) 文献・資料表に表示する場合

- ① 文献・資料表に、下記の要領で記載する。なお、文献・資料表は、原稿の末尾（注の後ろ）に掲載する。
 - a. 学術雑誌など定期刊行物の場合は、著者名・発表年・文献名・定期刊行物名・巻または号番号・文献の最初と最後のページを明記する。単行本の場合は、著者名・発表年・書名・出版社（出版所）名を明記する。
 - b. 著者が複数の場合も、全著者名（姓名）を列記する。
 - c. 定期刊行物の巻・号番号およびページについては、巻ごとの通しページがある場合は、巻番号（ゴシック）と通しページを記す。巻ごとに通しページがない場合は、巻番号（ゴシック）のあとに号番号を（ ）でくくって示し、号ごとのページを記す。号番号のみの場合は、（ ）でくくった号番号とページを記す。
- ② その他の書式（記載順序や方法）については、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの要領に則って、統一した形式で記すこと。
- ③ 文献・資料の並べ方は、下記の要領による。
 - a. 日本語文献・資料、アジア地域言語文献・資料、欧語文献・資料の順に並べる。
 - b. 日本語文献・資料は、著者名の五十音順に並べる。アジア地域言語文献・資料はそれぞれの著者名の当該言語の固有の配列順（あるいはカタカナ表記の五十音順）に並べる。欧語文献・資料は著者名（姓が先）のアルファベット順に並べる。
 - c. 同じ著者の文献・資料は発表年の順に並べる。同じ発表年のものが複数ある場合は、本文の引用順に、a・b……を発表年のあとにつけて並べる。

(2) 注に表示する場合

- ① 注の該当箇所に著者名・文献・資料名などを詳しく表示する方式で、この場合は、文献・資料表を省くことができる。
- ② 表示例は、以下の通り。

【日本語文献・資料】

小林政吉『宗教改革の教育史的意義』（創文社 1960）p.12. 《単行本の場合》

林 泰成「ピーターズのコールバーグ批判」（佐野安仁、吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』世界思想社 1993）p.34. 《単行本所収の論文の場合》

石井雅史「コミュニケーションと規則」（日本哲学会編『哲学』第51号 2000）pp.270-272. 《学術雑誌等の掲載論文の場合》

G. ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳（法政大学出版局 1974）p.25.

《和訳書の場合》

【英文文献・資料】

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145. 《単行本の場合》

A. H. Bullen (ed.), *The Works of Francis Beaumont and John Fletcher* (Variorum ed.;

London London: George Bell and Sons, 1908), pp. 49-53. 《論文集の編者表記の場合》
G. M. Dutcher et al., *Guide to Historical Literature* (New York: The Macmillan Co., 1931),
p. 50. 《著者が3名以上の場合》

F. A. Moe, "School Retrenchment," *School Review*, XLII (May 1934), p. 40.

《学術雑誌等の掲載論文の場合》

John Calvin, *The Institutes of the Christian Religion*, trans. Henry Beveridge (2nd ed.;
Edinburgh: T. & T. Clark, 1895), I, pp. 40-45. 《英訳書の場合》

【欧文文献・資料の略語の用法】

欧文文献・資料の引用・参照の際によく使われる略語（loc. cit., ibid., op. cit.）の用法を、以下に記す。

loc.cit. 同じ文献・資料の同じ箇所を連続して引用する場合に用いる。

ibid. 同じ文献・資料から連続して引用する場合に用いる。その際、前と引用ページが異なる場合には、当該ページを表示する。

op.cit. 前に挙げた文献・資料に、いくつかの注を隔てた後に、再び言及する場合に用いる。したがって、この場合は、著者名（姓のみ）とページ数とを必ず表示する。

上記の略語は、単行本と学術雑誌の場合はイタリック体で、論文の場合はローマン体で表記する。

[使用例]

(1) T. M. Parrot and R. H. Ball, *A Short View of Elizabethan Drama* (New York: Charles Scribner's Sons, 1943), p. 190.

(2) *loc. cit.*

(3) *ibid.*, p. 325.

(4) E. H. C. Oliphant, *The Plays of Beaumont and Fletcher* (New Haven: Yale University Press, 1927), p. 67.

(5) Parrot and Ball, *op. cit.*, p. 198.

(6) Oliphant, *op. cit.*, pp. 89-91.

∴

その他のよく用いられるページ表記略号（ただし、英文文献・資料の場合）

p. 5. = page 5 の意味

pp. 17 f. = pp. 17 *et seq.* とも表す。これは page 17 and the following page の意味

pp. 20 ff = pp. 20 *et seq.* とも表す。これは page 20 and the following pages の意味

* 欧文文献・資料では、注に示す場合と、文献・資料表に示す場合とでは、著者名などの表記の仕方が異なる。これについては、以下の例を参照のこと。

〈 注に示す場合 〉

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145.

〈 文献・資料表に示す場合 〉

Judson, Alexander C., *The Life of Edmund Spencer*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945.

* なお、インターネット上の文献・資料を引用・参照する場合は、文献・資料表あるいは注に、原則として下記の事項を記載する。

執筆者・タイトル・年月日（掲載年月日あるいは更新年月日あるいは取得年月日）・URL

10. 原稿の審査

編集委員会が審査し決定する。その手続きは次の通り。

- (1) 原稿の内容に応じて編集委員以外の査読者を選び、査読を依頼する。それとともに編集委員の中から担当委員を選ぶ。査読者および担当委員は、原則として各1名とするが、場合により複数名とすることもある。
- (2) 査読者および担当委員は、論文・研究ノート・抄録・その他については、以下の11項目について原稿を検討し、査読結果（掲載の可否・原稿種類の妥当性についての意見や原稿に対するコメントなど）をまとめ、それを編集委員会に報告する。
 - ① タイトルは内容を的確に示しているか
 - ② 目的・主題は明確か
 - ③ 方法・手法は適切か
 - ④ データは十分か
 - ⑤ 考察は正確かつ十分か
 - ⑥ 先行研究を踏まえているか
 - ⑦ 独創性あるいは学術的価値（資料的価値）が認められるか
 - ⑧ 構成は適切か
 - ⑨ 文章・語句の表現は適切か
 - ⑩ 注や参考文献の表記は、執筆要領に添ったものになっているか
 - ⑪ 図・表の表現は適切か
- (3) 編集委員会は、これらの報告に基づいて、委員の合議により、掲載の可否、原稿種類の妥当性および次項の「審査結果のお知らせ」に添える文書の内容などを決定する。なお、掲載の可否については、①このままで掲載、②多少の修正の上で掲載、③大幅な修正が必要、④掲載見送りの4段階で判定する。③については、執筆者の修正原稿を査読者と担当委員が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が掲載の可否等を決定する。
- (4) 研究会記録および公開講座記録の原稿については、原則として掲載する。ただし、この場合も編集委員の中から担当委員を選び、担当委員は上記項目の9)等を検討する。その結果、執筆者に加筆修正を求めることがある。

11. 原稿の審査結果・変更・再提出

- (1) 投稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載を決定する。その際に編集委員会は、原稿区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2) 編集委員会は、査読に基づき、若干の訂正、あるいは書き直しを要請することができる。

また、上記判定を受けた投稿者は、その趣旨に基づいて、原稿を速やかに修正し、再度、編集委員会に提出する。ただし、査読結果の内容に疑問・異論等がある投稿者は、編集委員会にその旨を申し出ることができる。
- (3) 投稿者は、投稿を許可された原稿（査読済）を、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
- (4) 査読の結果、大幅な修正がある場合には、投稿者の修正原稿を編集委員会が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載の可否等を決定する。
- (5) 編集委員会が、紀要に掲載しない事を決定した場合は、人文科学研究所長（以下「所長」という）より、その旨を投稿者に通達する。

12. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4 版用紙（縦版、横書き）

にプリントした完成原稿1部と電子媒体を提出する。電子媒体の提出時には、使用OSとソフトウェア名を明記する。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿（データ）を保管しておく。

13. 校正

投稿した原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、所長、編集委員長が三校を行う。

この際、投稿者がおこなう校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。また、投稿者は、編集委員会の指示に従い、迅速に校正を行う。

投稿者が、期日までに校正が行われない場合には、紀要への掲載はできない。

14. その他

本執領に定められていない事項については、投稿者（執筆者）と協議の上、編集委員会が判断する。

15. 改廃

本執筆要領の改正は、編集委員会が原案を作成し、本研究所会議の議を経て、所長が決定する。

附則

この要領は、平成18年4月以降に投稿される原稿から適用する。

附則

この要領は、平成26年4月以降に投稿される原稿から適用する。

附則

この要領は、平成29年4月以降に投稿される原稿から適用する。

付記：「その他」の区分・定義について

①	研究動向：	ある分野の研究成果を総覧・整理しまとめたもので、研究史・研究の現状・将来への展望などを論じたもの。
②	調査報告：	ある課題についての文献・アンケート・聞き取り調査などの報告で、調査の意義が明確なもの。
③	資料：	文献・統計・写真など、研究にとっての資料的価値があると思われる情報を吟味し、それに解説をつけたもの。
④	討論：	本紀要に掲載された論文等に対する批判・質問および執筆者からの反論・回答。
⑤	研究会記録：	本研究所主催の研究会の講演内容および質疑の概要。
⑥	公開講座記録：	本研究所主催の公開講座の講演内容の詳細な記録あるいは概要。

以上

学生が交っているのに、見物人がいたずらをした。雨が降り出したのを、皆平気でやっていた。」(『椋鳥通信 中』平成二七年二月、岩波文庫)とある。

(26) 同じく『椋鳥通信』一九一〇年十月十二日には、「学長 Erich Schmidt の演説」として「それゆえに文献学と神学は当代の頂点にある。歴史認識は数々の成果をあげ、歴史学はサヴィニーに先導される法学において赫々たるものがある。哲学はベルリンにおいてヘーゲルが総体的体系を賦与したところだが、ようやく自然哲学の両性具有の息子を突き放した。それは迷える精神であつて、経験を欠き、監察を知らず、医学にまでお告げをして、さらなる飛翔への不信をよびました」(『椋鳥通信 中』平成二七年二月、岩波文庫)と哲学・文献学を中心となつたベルリン大学の同時代的位置が伝えられている。

(27) 上山安敏『神話と科学』(平成二三年一〇月、岩波現代文庫)

(28) 「解題」(『鷗外近代小説集 第六巻』平成二四年一〇月、岩波書店) 参照。鷗外日記(大正二年六月二三日)には「本間俊平東京に来て、直ちに又去る。新橋に送りにゆき、前田正名、俊平の長女武子等にも面会す」とある。

(29) 三吉明『本間俊平の生涯』(昭和四一年七月、福音館書店)

(30) 山崎一穎『鷗外ゆかりの人々』(平成二二年五月、おうふう)

(31) 前掲、『近代日本とキリスト教——明治篇』中、小塩力の証言。

(32) 細井勇『石井十次と岡山孤児院——近代日本と慈善事業』(平成二二年七月、ミネルヴァ書房) は、「明治二〇年前後における近代的慈善事業が、プロテスタント・キリスト教を受容した人々の手によって先駆的に開始される場合の多いことはすでによく知られている」と述べる。

(33) 前掲、三並良『日本に於ける自由基督教と其先駆者』

(34) 小堀桂一郎『森鷗外——文業解題(創作篇)』(昭和五七年一月、岩波書店)によると、「なんとか云ふドイツの女の詩」は、フリーダ・シャントツの詩「Mit einem Hammerschlag」(ルドヴィヒ・ヤコボウスキー編『Neue Lieder der besten neueren Dichter für's Volk, zusammengestellt von Ludwig Jacobowski, Berlin:Jehmann, 1899』収録)であるとされる。

(35) 荒木康彦「鈍一下」考——森鷗外とマックス・ウェーバーの交差——『文学』五三、昭和六〇年四月)

(36) 前掲、荒木康彦「鈍一下」考——森鷗外とマックス・ウェーバーの交差——

(原稿受付 二〇一九年一〇月三日)

- (4) 抄訳としてルトヴィヒ・リース著、原潔・永岡敦訳『ドイツ歴史学者の天皇国家観』昭和六年六月、新人物往来社)がある。
- (5) 前掲、西川洋一「ベルリン国立図書館所蔵ルトヴィヒ・リース書簡について」
- (6) 丸山通一「僕の思出」(三並良『日本に於ける自由基督教と其先駆者』昭和一〇年九月、文章院出版部)によると、「スピネル先生時代のゾール・オリエンスを公開学術講演会であつた、と伝へてゐるのは、前後を転倒した時代錯誤説である。ゾール、オリエンスが公開学術講演会の名称となつたのはスピネル先生が去つた後、即ちゾール、オリエンスが一度消滅して後の事である」と述べられている。この証言からも、リースが出入りしていたのは「ゾール・オリエンス会」だと考えられる。
- (7) 前掲、丸山通一「僕の思出」
- (8) 「例言」には「予ハレッシング氏の伝記を編するに Encyclopedia Britannica・「柵草紙」Nathan the Wiseの書を参考し」と述べられてい²⁰。
- (9) 赤司繁雄『自由基督教の運動——赤司繁太郎の生涯とその周辺』(平成七年八月、朝日書林)
- (10) 赤司繁太郎、石田元季『神話梗概天馬』(明治三五年四月、岡崎屋書店)
- (11) 赤司繁太郎「レッシング氏の宗教意見」(『烈真具』明治二五年三月、東京一二三館)
- (12) 前掲、三並良『日本に於ける自由基督教と其先駆者』
- (13) 鶴沼裕子「普及福音新教伝道会と日本のキリスト教」(日本におけるドイツ宣教史研究会編『日本におけるドイツ——ドイツ宣教史百二十五年』平成二二年五月、新教出版会)
- (14) H・E・ハーマー編『明治キリスト教の一断面——宣教師シュピンナーの「滞日記」』(平成一〇年一月、教文館)
- (15) 前掲、三並良『日本に於ける自由基督教と其先駆者』
- (16) 前掲、三並良『日本に於ける自由基督教と其先駆者』
- (17) 久山康編『近代日本とキリスト教——明治篇』(昭和三二年四月、創文社)中、隅谷三喜男の証言。
- (18) 例えば「いわゆる新神学が導入されて、教会的伝統と神学的素養を持たなかつた日本のキリスト教会は一大動揺を受けるに至つたのである」(隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』平成十年八月、新教出版社)と述べられている。
- (19) 『基督教聖典』(明治四三年一月、金尾文淵堂)
- (20) 淡月居士「偶感」(『自由基督教』七、明治二五年三月)
- (21) 鷗外自身が山田珠樹宛書簡(大正七年十二月十七日)において「吃逆以下ハ、前二ワイヒンゲルヲ取りシ如ク当時読ミ居リシオイケンヲ使ヒ候。但シ鈍一下ダケハ書キシ月日ニモ距離アリ、例外ニ候。吃逆ハ殆ド模倣ニ近キ写生ニシテ、芸者一人々々皆実在シ、對話マデ哲学問題ノ外ハアリノマヽニ候」と述べているように、「鈍一下」は秀磨ものとしては「例外」であるとされてきた。そのため、「鈍一下」を論じる際には、はたして秀磨ものとして読むことが可能なのかという問いが立ち上げられてきた。磯貝英夫「五条秀磨おぼえがき」(『森鷗外——明治二十年代を中心に』昭和四四年一月、明治書院)、河野至恩「伝記的スケッチとしての「鈍一下」」(『鷗外』六九、平成一三年七月)など。
- (22) 森田直子「近代ドイツの「決闘試合」——外国人観察者のまなざし」(『立正大学文学部論叢』一三七、平成二六年三月)
- (23) 潮木守一「ドイツの大学 文化史的考察」(平成四年四月、講談社学術文庫)
- (24) 鷗外もミュンヘン滞在時に「決闘」を見に出かけており、『独逸日記』(明治十九年五月二二日)に詳細な「決闘」の記録が記されている。「今日ヘルリイゲルスグロイトHeinrichsstruthの村酒店を借りて学生の決闘を行ふ。盍ぞ往いて観ざると。余喜びて諾す。」
- (25) ここで「三百年祭」と描かれているのはフィクションであり、実際開かれたのは明治四三年ベルリン大学の百年祭である『椋鳥通信』一九一〇年十月十二日には「十月十日の晩からベルリン大学の百年祭が始まった。先ず寺院で礼拝があつて、そのあとで三千人の学生が松明行列をした。日本

つきりさせずには手が著けられない」ことに気づき、「寧ろ先づ神話の結成を学問上に綺麗に洗ひ上げて、それに伴ふ信仰を、教義史体にはつきり書き、その信仰を司祭的に取り扱った機関を寺院史体にはつきり書く方が好きさうだ」と考えている。そうした考えは、ベルリン大学留学中に強く関心を持ったハルナックの「新教神学」がドイツ国家にもたらした成果を踏まえている。しかし、その一方で日本においては「それを敢てする事、その目に見えてゐる物を手取る事を、どうしても周囲の事情が許しさうにないと云ふ認識」も持っていた。こうした停滞した認識が繰り返される秀磨ものは、日本独自の近代の歪みに対して、ドイツのプロテスタント神学の論理を用いながら、秀磨が思索を重ねていく思考実験的な作品として読むことができる。

おわりに

秀磨の「神話と歴史との限界をはつきりさせずには手が著けられない」という認識は、近代において信仰や歴史叙述に携わる人々の多くに共有されたものだったはずである。「科学的神学の教義上の理解を分かち持っている」ことを理由に自由基督教に改宗したリースもまた、普及福音教会の立場に科学と信仰を巡るジレンマに対する一定の答えが見出せること信じ、改宗という決断をした一人であると考えられる。さらに、自由基督教に出会い、聖書における神話の問題に取り組んでいった赤司繁太郎もその一人である。赤司はプロテスタント神学の論理を武器に、神話の

研究を続けていくが、赤司にとって自由基督教をはじめとする「新神学」は、リースと同様に、歴史と神話の問題に解決をもたらすものとして見えていたに違いない。

見てきたように、秀磨ものにおいてプロテスタント神学は、近代の歪みに解決をもたらす答えにはなりえなかった。だが、秀磨は「H君の生活を書かうと思ひ立つた己の望は何時遂げられるか知れない」と述べ、「書く」ことを放棄してはいない。むしろ、書こうと思ひ続ける不断の努力こそが重要であるようにも見える。そうした姿に、秀磨を造型することによって思考を進め、一方で史伝に着手することで自身の歴史叙述を立ち上げようとした鷗外の姿を重ねることもできるのではないだろうか。

《註》

- (1) 西川洋一「ベルリン国立図書館所蔵ルートヴィヒ・リース書簡について」『国家学会雑誌』一一五・三・四、二〇〇二年四月)による。本論は、ベルリン国立図書館写本部所蔵のルートヴィヒ・リース書簡の一部を史料紹介として翻訳したものである。拙論におけるリースの改宗を巡る言説は本論文の翻訳に拠っている。
- (2) 前掲、西川洋一「ベルリン国立図書館所蔵ルートヴィヒ・リース書簡について」
- (3) クラウス・クラハト、克美・タテノックラハト『鷗外の降誕祭——森家をめぐる年代記』(平成二四年二月、N T T出版)には「シュピンナーと林太郎は、のちに「寛容」に関するレッシングの理解についての感心を共有することになる」という指摘がある。

Hammerschlag」の一節に基づいている。³⁴既に指摘されているように、実際の「Mit einem Hammerschlag」に描かれているのは、「あくせくと、躊躇いがちに、弱い糸を紡がねばならない」女性が、「力」と「勇氣と剛毅さ」をもって「鈍の一下で以て日々の仕事を始める」ところの「粗野な職工」に対して持つ羨望の念³⁵である。ここから通常「鈍の一下」という表現からは、「プロテスタントイズムの禁欲的職業倫理」でもって孜孜として労働に勤しむマイスターに対する讃歌のようになっている³⁶といわれるように、H君を本来の姿とはかけ離れた労働者として礼讃する秀磨の姿が読まれてきた。

しかし、これまでの文脈を踏まえるならば、「鈍の一下」になぞらえたH君礼讃は、労働者に対するものとは異なった意味にも見えてくる。秀磨は「本国の歴史」を書くためには、「神話と歴史との限界をはつきりさせずには手が著けられない」ことに気づいていながらも「矢張企てた著述に手を着けないで」いる。友人綾小路の「突貫して行く積りで、なぜ遣らない」という問いかけに対しても、「父と妥協して遣る望」を捨て切れていない。こうした停滞した秀磨の状態は、この詩における「あくせくと、躊躇いがちに、弱い糸を紡がねばならない」女性に重ね合わせることができる。そして信仰の問題にためらうことなく、神を信じ慈善事業に勤しむH君は、停滞している秀磨から見ても「鈍の一下」という点において秀磨とは決定的に異なっている。糸を紡ぐ女が粗野な労働者に憧れたように、H君の行動は秀磨の憧れ、羨望の対象である。

そのため、秀磨はH君に自身の理想を反映させ、例えば次の引用のように神格化していく。

己はこれまでの通信の結果として、H君が財産を作つてゐないことを推察してゐる。(中略)さうしてみるとH君は財産を作つてゐる筈が無いのである。併し己は考へた。H君は兎に角全国の官業民業の大会社と取引をして、外国へも石材を輸出してゐる大工場の主人であるから、縦ひ苦痛を忍んでも体面を取り繕つて、一等客として旅行しはすまいか。いやいや。H君の人物を思へば、どうもさうでないかも知れない。平気で三等客として旅行するかも知れない。己はかう思つて先づ三等の待合室を物色した。

財産を持たない、精錬潔癖な人物としてH君を作り上げているのは秀磨自身である。秀磨はH君を自身の停滞した著述を打開する人物として見出し、H君のような利他的人物の「生活を書かう」と考える。しかし、秀磨ものを通して秀磨が何かを解決することはなく、「H君の生活」も結局書かれないまま終わる。秀磨ものにおいてプロテスタント神学は結局答えにはなりえず、むしろ秀磨はプロテスタント神学に影響された典型的な青年として相対化されているともいえる。

以上、普及福音教会の自由基督教を手がかりに、秀磨ものにドイツ由来のプロテスタント神学の知見が散りばめられていることを確認してきた。秀磨は「本国の歴史」を書くためには、「神話と歴史との限界をは

キリスト教徒であるH君は、長門国の秋吉で大理石を採掘する事業をしているが、秀磨が特筆するのは「多くの不遇の青年」を「同胞」とみなし、共に労働に励むというその慈善的な生き様である。ここでH君の信奉するキリスト教は明らかにされていないが、そのモデルが本間俊平であることは夙に指摘されている。⁽²⁸⁾「本間俊平年譜」によると受洗は明治三十年、本間が二十四歳の時に靈南坂教会において牧師留岡幸助よりなされたとされる。留岡幸助は、日本の社会福祉の先駆けとなった人物の一人であり、キリスト教に基づいた感化院（家庭学校）の設立に奔走した。本間の慈善的な生き様は、留岡の影響を大きく受けており、「俊平の生き方には〈労働する〉ことが「人間が神の人格に達する段階であり、手段である」（如何にして善人となるか）という考えがある。それ故に「宗教も労働を伴はざるものは偽宗教である」（同）⁽²⁹⁾と言いつつとされる。こうした考えは、明治のキリスト教全般に通じるものでもあったことは次の小塩力の証言からも窺うことができる。

とくに明治のキリスト教が「社会事業」をさかんにやろうとしたことは、特記してもよいと思うのです。今日のような社会科学的な洞察は、もちろんありません。ですから、社会改良的なやり方とか、慈善事業という意識で行われました。それは、今日その制限を知って、これを愚かとみなす人があっても、歴史的には意味があったと思います。⁽³⁰⁾

ここで小塩は明治の慈善事業の例として、原胤昭の刑余者保護、石井十次の岡山孤児院、留岡幸助の不良少年教育、救世軍や婦人矯風会の娼婦運動などを挙げているが、先駆的に慈善事業を始めた人々の多くがプロテスタントを受容していたことは既に指摘されている。⁽³¹⁾普及福音教会においても、早い段階から「愛隣行為」は推奨されていた。三並によると「今日では社会事業も大に進歩し、大新聞社でも、年末などには病者貧者の救助を行つて居る。併しあの明治二十年代にはまだ何もなかった。スピナー先生は益暮になると、我々にほんとうに病氣などで働け出られないで、困窮して居る気の毒な人を探して来いと命ぜられた⁽³²⁾」と述べており、社会事業がまだ盛んでなかった頃から、スピナーの命により様々な慈善活動を行っていたという。

H君の秋吉での採掘事業も、キリスト教に基づく慈善事業としての一連の流れに位置付けることができる。ただし、秀磨の関心を引いたのは「其事ではなくて其人である」。多くの不遇の青年を集め、「さう云ふ青年が寄り合つて出来た集団の中央に、幾年の久しい間身を置いて、その一人一人に人間としての醒覚を与へようとしてゐるH君の生活は、実に驚くべきものではないか」とあるように、秀磨はH君の生活といった個人に対する関心を深めていく。その際秀磨が思い出したのが、「なんとか云ふドイツの女の詩」であり、「鈍の一下を以て日々の業を始む」という一節である。秀磨はこの詩にH君の生活をなぞらえ「H君夫婦はその鈍の一下を以て日々の業を始めてゐる」と礼讃する。

ここでの「鈍の一下」とはフリーダ・シャンツ「Mit einem

あるかと云ふに、そんな事はしてゐない。君主もそんな事をさせようとはしてゐない」点を評価し、「そこにドイツの強みがある」と五條子爵に報告している。秀磨のハルナックへの関心は、「どんな哲学者も、近世になつては大抵世界を相待に見て、絶待の存在しないことを認めてはゐるが、それでも絶待があるかのやうに考へてゐる。宗教でも、もう大ぶ古くシュライエルマツヘルが神を父であるかのやうに考へると云つてゐる」とあるように、近代的な合理解釈で否定された神の存在をいかに維持していくかという問題意識に基づいている。

「かのやうに」では歴史と神話の問題の打開案として、秀磨がハンス・ファイヒンガー『かのやうにの哲学』(Die Philosophie Als Ob、一九一一年)を持ち出すが、ファイヒンガーは次の指摘のように、ドイツ思想史においてはハルナックの「批判的歴史主義」の延長に位置付けられる。

ハルナックは、批判的歴史主義によって、非神話化の途を進んだ。

しかし神を合理主義の最高の形態と解釈せず、自然を汎神論的に非合理な力として解釈しようとする人びとは、それに対抗した。彼らはキリスト教やあらゆる宗教の現実をただ事実の上で信じられて来た生きた神話として考える。(中略) こうして、この思考は当時若くは現代に流行したハンス・ファイヒンガーの「かのやうに」の思想と一致しているのである。

秀磨が語るハルナック、ファイヒンガー理解はきわめて一般的なものであり、そこに独自の解釈は見られない。つまり、秀磨の発想の基盤は、当時のベルリン大学で学んだ「新教神学」に規定されている可能性が高い。それは「洋行して帰つてから、大分月日が立つた」とされる「鈍一下」においても同様であり、その発想にはドイツの思想が色濃く反映されていると考えられる。では秀磨をそのような人物として捉えた場合、「鈍一下」はどのような物語として読むことが可能なのだろうか。

五、H君とキリスト教的慈善

「鈍一下」に描かれる第三の見送りは、「己はけふ新橋で初対面をして、其儘別れた」とされるキリスト教徒のH君に対してなされたものである。秀磨は「心易い牛込の男爵」を通してH君を知ったとされるが、その人物像は「己」によって次のように語られている。

話がかうである。長門国に秋吉と云ふ所がある。そこから大理石が出る。併しその採掘は利益が少いので、企業家が手を著けても持続して行くことが出来ない。Hは現にそれを採掘してゐる。そしてそれを採掘するのに、尋常の企業者のやうに、労働者を使つてゐるのには無い。Hは多くの不遇の青年を諸方から集めて、基督教の精神を以て、同胞として彼等を待遇して、自分も一しよになつて労働してゐる。

問題が生じたり、名誉が傷つけられたりした場合に、その解決のために決められた方法、場所において命を懸けて闘うことを指す。自身の名誉を回復するために生命を懸けるのが「決闘」であり、どちらかが現実的に死ぬこともあり得た。しかし、「決闘の最大の目的は、恨みを抱く相手や意見の相容れない相手を殺すこと」ではなく、「自分の見解や立場を文字通り身体を張って死守すること」であった。

潮木守一⁽²³⁾が指摘するように、ドイツの大学では学生は一般市民とは異なる特殊な名誉を与えられており、「決闘の風習は大学生の特権意識の上に成り立っていた」⁽²⁴⁾。つまり、秀磨がこの見送りの場面で、ある男に自身の名誉が傷つけられたと感じ、名誉回復のために浮かんだのが、ドイツで体験した「決闘」という概念だったということである。「決闘」はドイツの大学生の名誉を守るために許された特権であり、秀磨が思い浮かべた「決闘」もこうした文脈の中で考えていく必要がある。秀磨は、世紀末のドイツを体験した典型的な若者として造型されているといえる。

それは、秀磨の学問の受容からも窺うことができる。「かのやうに」には、秀磨の体験した世紀末ドイツの様子が、父五條子爵への手紙を通して描かれている。例えば、「ベルリンに三年ゐた」秀磨の留学中、「エリヒ・シュミット総長の下に、大学の三百年祭をする歳に当つた」とされ、秀磨も「罌の嵌まつた松明を手を持つて、松明行列の仲間に入つて、ベルリンの町を練つて歩いた」ことが報告されている。⁽²⁵⁾ベルリン大学（王立フリードリヒ・ヴィルヘルム・ベルリン大学 Die königliche Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin）は、一八〇九年、プロイ

セン国王であったフリードリヒ・ヴィルヘルム三世の命を受けたヴィルヘルム・フォン・フンボルトによって設立された。初代学長にはフィヒテが就任し、新人文主義によって啓発された哲学・文献学の中心となった。秀磨は大学での学問について「精しく子爵の所へ知らせよこし」⁽²⁶⁾ているが、「その中にはイタリア復興時代だとか、宗教革新の起源だとか云ふやうな、歴史その物の講義と、史的研究の原理と云ふやうな、抽象的な史学の講義があるかと思ふと、民族心理学やら神話成立やらがある。プラグマチズムの哲学史上の地位と云ふのがある。或る助教授の受け持つてゐるフリードリヒ・ヘツベルと云ふ文芸史方面のものがある。ずつと飛び離れて、神学科の寺院史や教義史がある」というように、五條子爵が「随分雑駁な学問のしやうをしてゐるらしい」と感じるものがあった。しかし、子爵には「雑駁な学問」にしか見えなかったこれらの学問は、キリスト教の観念を歴史化し、歴史と信仰の問題を主題とする点において共通するものであり、ベルリン大学はその中心的役割を担っていた。⁽²⁷⁾

そうしたベルリン大学の典型的な学問を受容した秀磨が、ハルナックの「新教神学」にドイツの「宗教上の、しつかりした基礎」を見るのはある意味当然とも考えられる。秀磨は、ドイツの政情について「全く宗教を異にしてゐる北と南とを擣きくるめて、人心の帰嚮を練つて行かなくてはならない」と分析し、そのような「宗教上の、しつかりした基礎」がハルナックに代表される「新教神学」にあると捉えている。しかもハルナックが「少しでも政治の都合の好いやうに、神学上の意見を曲げて

ツの新教神学」をこのように理解する秀磨とは、どのような人物として捉えられるのか。次節では、「ドイツの新教神学」を手がかりに秀磨という人物の造型について考えていきたい。

四、五條秀磨の造型

五條秀磨を主人公とする、いわゆる「秀磨もの」は、単行本『かのやうに』（大正三年四月、初山書店）に収録された「かのやうに」、「吃逆」〔『中央公論』二七五、明治四五年五月〕、「藤棚」〔『太陽』一八九、明治四五年六月〕、「鈍一下」の四作品の一般的な総称である。²¹「秀磨もの」連作は、華族の子弟として生まれ、ドイツに留学経験のある五條秀磨が、当時の様々なドイツの知見を中心とした対話を繰り広げることで展開される。「かのやうに」〔吃逆〕「藤棚」と前三作品が対話形式であり、秀磨の考えが相対化されているのに対し、「鈍一下」は全編を通して秀磨の思索が描かれている。ここから秀磨がどのような人物として捉えられるのか、考えてみたい。

「鈍一下」には秀磨が体験した三つの新橋での見送りが描かれる。まず着目したいのは、第一の見送りである。ある高貴な方の見送りの際、「特別に入懇にせられたわけでもないのに、差し控へてゐた」「己」に対し、「己より身分の低い人」が「暇乞」をするよう囁いてきた。秀磨は「継子根性のやうに誤解せられたくは無い」という思いから「二三歩進み出た」ものの、「或る団体の或る階級の服装をしてゐる」男から「右

の肩尖に手を掛けて押し戻」された。それに対して秀磨は「修養」の足らないことを認めつつも、次のように考える。

己は告白をしなくてはならない。それは己が其男と相対して立つてゐた瞬間に、二つの概念が己の写象の前を掠めて過ぎた事である。一つは「城鼠社狐」と云ふ概念であつた。これは漢文で書いた歴史を読ませられた時、己の意識の上に粘り附いた套語から出てゐる。今一つは「決闘」といふ概念であつた。これは西洋の本を読むやうになつた後に己の受けた印象から出てゐる。勿論侮辱とか復讐とか云ふことは、どの国にもあるが、功利主義の一時盛んになつた頃に人となつた己は、洋行した後始めて Point d'honneur など云ふものに支配せられてゐる社会を、目のあたりに見て、やうやう決闘と云ふものを自分の身辺に存在する事実として認めたのである。

秀磨は自身の名誉が傷つけられたと怒りを感じた時に、「城鼠社狐」と「決闘」という概念が頭に浮かんだという。「城鼠社狐」は、「漢文で書いた歴史を読ませられた時」とあるように、幼少期からの素養として「意識の上に粘り附いた套語」であつた。それに対して「決闘」は、「洋行した後始めて Point d'honneur など云ふものに支配せられてゐる社会を、目のあたりに見て、やうやう決闘と云ふものを自分の身辺に存在する事実として認めた」と考えているように、幼少期より身に着けた素養とは異なる概念である。「決闘」とは、両者の間に解決しがたい

さらに、「ドイツ派は聖書を非常に尊重するけれども、その然る所以は、その内容価値にありとし、天啓説を取らず、縦横に之を批判し、考証する¹⁶⁾」と述べられているように、信仰の対象である聖書は科学的批判の対象でもあった。「聖書批判を伴った新神学¹⁷⁾」は、当時の日本に浸透しつつあった英米系のキリスト教とは大きく異なるものであり、その立場は「異端」として捉えられた一方、大きな影響を同時代に与えたのである。

普及福音教会を含むいわゆる「新神学」は、従来の福音的な信仰の対象を否定したが、その背景には聖書における矛盾や神話をいかに処理するかという問題意識があった。そのため、自由基督教はイエスを神とはみなさず、人間としてのイエスを信仰の対象とした。すでに日本に導入されていた進化論や科学思想を踏まえ、原罪・贖罪の考えを排し、キリスト教の教義に合理的な解釈を与えようとする立場を採った。

赤司は聖書に矛盾があることを認めつつも、それを理由に「聖書を不可解の一書として放棄するもの、失望するもの」¹⁸⁾に異議を唱えている。その上で、聖書の正しい読み方を導く手引きの作成に着手し、『基督教聖典』(明治四三年十一月、金尾文淵堂)、『耶蘇之聖訓』(明治四三年二月、博文館)を出版する。『基督教聖典』で述べられるように、聖書は我々にとって「吾人日常の生活は云ふを待たず、悲哀にも歓楽にも、種々錯雑せる境に在りても、適當なる教訓と慰藉」を読み取るべきものであり、「高尚なる宗教的道德心を養ふ¹⁹⁾」ためにあるものだという。つまり、聖書は正しさを志向した書物ではなく、文字の裏面にある「宗教

的道德心」を読み取り、信仰を深めるために読まれるべき書物であるというのである。赤司の神話学がギリシヤ・ローマ神話を中心に扱っていることは、こうした聖書の理解と関連づけて考えなければならぬ。赤司の神話学への関心は生涯にわたって継続し、日本最初のギリシヤ・ローマ神話の研究書『神話梗概天馬』を出版後、さらに神話や古伝説の紹介、訳出を進めていくことになる。

赤司の捉えていたプロテスタント神学の批評的な立場は、「かのやうに」の五條秀麿を通して次のように正確に述べられている。

原来学問をしたものには、宗教家の謂ふ「信仰」は無い。さう云ふ人、即ち教育があつて、信仰のない人に、単に神を尊敬しろ、福音を尊敬しろと云つても、それは出来ない。(中略)そこでドイツの新教神学のやうな、教義や寺院の歴史をしつかり調べたものが出来てゐると、教育のあるものは、志さへあれば、専門家の綺麗に洗ひ上げた、淬のこびり付いてゐない教義をも覗いて見ることが出来る。それを覗いて見ると、信仰はしないまでも、宗教の必要丈は認めるようになる。そこで穩健な思想家が出来る。ドイツにはかう云ふ立脚地を有してゐる人の数がなかなか多い。

秀麿はここで「教義や寺院の歴史をしつかり調べたもの」があれば、「信仰はしないまでも、宗教の必要丈は認めるように」なり、「穩健な思想家」が生まれると「ドイツの新教神学」の役割を捉えている。「ドイ

三、聖書と神話学

ドイツ・プロテスタント神学は、日本には「独逸普及福音教会」として伝来した。明治一八年、普及福音教会の母体となった普及福音新教伝道会 (Allgemeiner Evangelisch-Protestantischer Missionsverein) から宣教師シュピンナーが来日、伝道を開始したのが始まりとされる。独逸普及福音新教伝道会は、キリスト教の伝道社団として明治一七年、ワイマールで結成された。設立者の一人であるスイスの牧師エルンスト・ブスは、従来とは異なる新しいキリスト教を提唱し、それを世界に伝道することを唱えた。最初の伝道地としてシュピンナーが日本に派遣された経緯については、三並良の次のような証言がある。

ス(論者注、シュピンナー)先生を我が日本に派遣したドイツ及びシュワイツ協会の伝道会、悉しく云ふと普及福音新教伝道会(Der allgemeine evangelisch-protestantische Missionsverein)は一八八三年、始めてマイン河畔のフランクフルト市に、三十余名の有志者が会合して、伝道の主義、方針を審議し、又日本、印度、支那を伝道区とすることを審議決定した。此のとき既にクリスト教信徒であつた所の和田垣博士は伯林から急行、フランクフルトの会議に乗り込み、最初の伝道地を、我が日本に決定せんことを要請したのである。文献の徴すべきはないが云はゞ白面の一留学生が、大家達

の集會に飛び込んで、此の要求を提出したのには、恐らく前に述べたりツター牧師や、青木公使の後援があつたからであらう。¹²⁾

明治一五年伊藤博文のドイツ派遣以降、明治国家は近代国家のモデルを、イギリス・フランスからドイツへと転換し、学問のみならず文化に対しても積極的な受容をおこなった。明治一四年、ドイツ語とドイツ学の推進を目的とした「独逸学協会」が発足、明治一六年には独逸学協会が設立された。協会の初代会長は、滞独経験のある北白川宮能久親王であった。以降、ドイツ学、ドイツ語の研究が進む。ここで述べられている「青木公使」こと青木周蔵は協会学校の設立、運営にも関わった人物であり、普及福音教会の日本への布教を積極的に要請したとされる。普及福音教会の特徴は、「そもそも同伝道会は、自らの主義主張のもとに独自の教会を設立してその信徒を獲得することを目的とするよりは、むしろ既存の諸教会と協力して、キリスト教、とくに自分たちの福音理解を広く「異文化世界」の中に浸透させることを目指す¹³⁾」と述べられているように、教會的伝統を持たない日本文化においても容易に受け入れが可能な点にあった。明治一七年六月四日成立した「普及福音新教伝道会会則」には、「本会の目的はキリスト教とその文化を非キリスト教的民族の中に、これらの民族にすでに存在している真理の要素と関連づけて広めることである¹⁴⁾」と述べられ、「宗教の書は、唯だ聖書のみならず、一切経にも、古事記にも、経書にも、研究によつて宗教価値を認むるものである¹⁵⁾」と唯一の真理にこだわらない姿勢を持っていた。

す得ざりし「オウィッドの開闢説」「金毛の羊皮」「葎ふく風」「葡萄かづら」の四編の外は、鷗外森林太郎先生の校閲をわづらはしたるものなり。編者は、ここに、同先生に向て、深き感謝の意を表す¹⁰と鷗外の手が入っていることが述べられている。鷗外が著作に関する問い合わせに応じたり、「題言」を寄せたりすること自体は珍しいことではない。しかし、鷗外が赤司に寄せていた関心は、赤司の宗教観、神話観にあると考えられる。

赤司はレッスンの思想を、自由基督教の立場と重ねることで評価している。それは次のような引用から窺うことができる。

レッスング氏が孜々営々として求めんと欲する所ハ只一の真理にして之れが敵たるものは合理論者と頑迷なる正統派神学者たるを問はず、或ハ弁論を以て或は文筆を以て痛撃筆誅至らざる所なし。

実に氏は基督教の宗教道德的実体と歴史の実体との区別をなし、福音書の批評を試みて今日の福音書批評学の基礎を置けり。又は人類の教育上に宗教的教育の成功ある所以を近世紀の学者輩に悟らしめたり。其他彼は拜聖書論者を嫌忌し、攻撃百端至らざる所なく、彼等をして大ひに悟る所あらしめたり。実に氏は欧州精神的百般の事業の上に亘りたる一種の妄想的妖雲を排除し、茲に煌々たる真理の天光を輝かしめ以て精神界の一大革命を成就したるものといふべきなり。¹¹

赤司はレッスングが「宗教道德的実体と歴史の実体の区別」をなした点を評価し、その延長線上に「今日の福音書批評学」を見ている。そして、それは「精神界の一大革命」であるという。ここで赤司が述べているキリスト教の観念を歴史化し、聖書をはじめとする宗教書に対する批評を試みたのが、普及福音教会の思想であるドイツプロテスタント神学の立場であった。赤司はレッスングの宗教思想の延長線上に、自身の立場を捉えていたといえる。

鷗外は、『烈真具』『題言』において、「今の我国の宗教社会にハ浮屠の徒、浮屠の徒と争ひ、基督の徒、基督の徒と争ふ。これ新旧おのゝ小派を立て、軋轢止むことなかりし独逸のさまに似たるなるべし。我宗教社会も亦た実の一のレッスングを待てり。この時に当りて此著あり。独逸の文に通ずるもの誰かまたこれを快とせざらむ。わが喜んで一言をその首に題するものハ是を以てのみ」と記し、本書の価値は我国の宗教社会に解決をもたらす存在としてレッスングを評価する点にあるとしている。さらに「一のレッスングを待てり」とあるように、レッスングが文学と宗教において果たした役割が、今こそ日本でも期待されていると述べられている。

一見偶然に見える鷗外と赤司、そしてリースの関係からは、日本近代において神話をいかに処理するかという共通の問題意識が浮かび上がってくる。そしてそれは、自由基督教の持つ教義の特殊性とも無関係ではない。以下、普及福音教会とは日本近代においてどのような宗派だったのか、見ていくこととする。

リエンス」会について「外来者が例会に出席して講義を傍聴するのを許して居た。内外の学者が来て独逸語で學術談義をした事もあるらしい。ゾール、オリエンス会は明治二十四年四月一日スピネル先生が日本を去られたので自然に消滅した」と述べている。これによると、「ゾール・オリエンス」会はキリスト教信者に関わらず、特に学生や青年にドイツに関する一般教養を広める目的でドイツ語を用いて行われていた講義だったことが分かる。普及福音教会の機関誌『真理』二号(明治二十二年一月)には、「ゾール・オリエンス」会について次のように記されている。

帝国大学々生より成る Sol oriens 会は去る二十一日午後五時より例会を岩坂会堂に開き、スピネル氏レツシングの Nathan der Weise を講ぜられたり、同会は毎回傍聴を許す。

こゝから「Sol oriens 会」は、主に大学生を対象に傍聴を許された、ドイツの学問を学ぶ場であつたらしいことが分かる。赤司はここに記録されているシュピナーによるレツシングの『賢者ナータン』の連続講演に参加し、深く感銘を受ける。その後赤司のレツシングへの興味は深められていくことになるが、赤司とレツシングとの出会い、鷗外と赤司との出会いともなったのである。

二、赤司繁太郎と鷗外の出会

明治二十五年、赤司は「麗粹子」という名で最初の著作『烈真具』(明治二十五年三月、一二三館)を出版する。鷗外「レツシングが事を記す」(『しがらみ草紙』二一〜二四号、明治二十四年六月〜九月)を参照したことから、『烈真具』には鷗外の「題言」が寄せられた。赤司繁雄は序文執筆の経緯について、「東京帝大医科大学長で、ゾール・オリエンス会の発起人の一人であつた大沢謙二や、鷗外を崇敬していた藤浪鑑らの働きかけにより、その知遇をえて、序文を寄せてもらったものと思われる」と述べている。ここから、鷗外と赤司の交流は続いている。

シュピナーの講演を通してレツシングと出会つた赤司は、さらにレツシングの考えを基軸として宗教の問題、神話の問題を考えるようになる。特に、ギリシャ・ローマ神話への関心は学生時代から持っており、卒業後は精力的に学芸誌に持論を掲載した。とりわけ興味深いのは、赤司がギリシャ・ローマ神話を考証する際に、鷗外に問い合わせをおこなっていた事実である。『小倉日記』(明治三四年一月二八日)には、「二八日赤司書を寄せてエロス(Eros)の神の把る所の弓剪は何の材もて作れるものぞと問ふ。旅寓書なし。臆に取りて教事を録し、以て答書に充つ。夜雨。」という記述がみられる。これは翌三十五年に出版された『神話梗概天馬』(明治三五年四月、岡崎屋書店)の記述をめぐる問い合わせであり、本書にも「この書は、印刷のことにいそがれて、その手続をな

リースが日本にもたらしたのは、ドイツ流の史料批判による歴史研究であった。リース自身、レオポルド・フォン・ランケの研究法が根強く残っていたベルリン大学で地理と歴史学を学び、指導教授デルブリュックのもとでイギリス史に関する学位論文を執筆している。ランケを「史上最も偉大な歴史家」と評すリースは、その研究方法を日本に伝え、坪井九馬三や白鳥庫吉など多くの歴史家を輩出した。リースは日本に「科学的」な歴史学研究法を持ち込んだが、その一方で比較宗教的な関心も早くから持っており、科学的知見と宗教の問題にどのように折り合いをつけるかということはリース自身の課題でもあった。『日本雑記』

(Allerlei aus Japan⁴ 一九〇五年)には、日本の迷信や宗教に関する言説も繰り返し見られる。普及福音教会への接近が「比較宗教的な関心」と無関係でないことは、「この背景との関係で説明されねばならない」と西川洋一によって指摘されている。

ドイツからやって来た多くの御雇外国人たちは、文科大学ならびに独逸学協会学校で講義を行い、交流を深めていった。リースは、司法官試補として派遣されたデルブリュックの弟エルンスト・デルブリュックやデルブリュックと交流のあったルートヴィヒ・ブッセらと交友を深め、その中で同じく独逸学協会学校で教壇に立っていた普及福音新教伝道会の伝道師ヴィルフリート・シュピンナーと交流するようになった。「シュピンナー牧師が創設した連続講演会で、この何年間かで三回の講演を行ないました」とデルブリュック宛書簡に書かれているように、その後リースは普及福音教会に積極的に出入りしている。こうした交流を通して、

リースは自由基督教に改宗することになる。

この「連続講演会」については諸説あるが、シュピンナーの始めた講演会の中に、ドイツ人やドイツ留学からの帰朝者たちにドイツ文化の紹介を依頼し、青年のドイツに対する見聞を広めることを目的としていた「ゾール・オリエンズ」(Sol oriens)会があった。リース自身も参加した会について、「その関心は第一にドイツ語への関心を高めること、第二に一般教養の普及、にあるのであって、決して宗教的プロパガンダにあるのではない」と述べていることから、明治二十年頃彦岐坂教会堂で行われていた「ゾール・オリエンズ」会に出入りしていたと考えられる。

本会には多くのドイツ留学経験者たちが集ったが、シュピンナーによるレッシングの劇詩『賢者ナータン』(Nathan der Weise⁵ 一七七九年)の講義ならびに神話学の講義に深く影響を受け、その後鷗外と交わることになる普及福音教会牧師赤司繁太郎もこの会に参加していた。赤司は東京専門学校英語政治科在学中の一九八九年、普及福音教会のシュピンナーやオットー・シュミューデルと知り合い、翌年シュピンナーの設立した新教神学校に入学する。そこで普及福音教会の教えを学び、シュピンナーより受洗、卒業後は名古屋で伝道活動を行った。その後ユニヴァーサリスト教会の牧師となったが、一九〇九年東郷坂普及福音教会を設立して牧師となった。普及福音教会には当時多くの青年が通っていたが、赤司は着任当初のシュピンナーの教えを受けた一人である。

赤司と同じく普及福音教会の伝道師となった丸山通一は「ゾール・オ

のは、ドイツの普及福音新教伝道会から派遣された伝道師たちである。リースは自らの改宗の理由について「この決定は、普及福音新教伝道会から派遣されている当地の牧師たちが、私が留保なしに承認する科学的神学の教義上の理解を分かち持っているという事情によって本質的に容易なものとなりました^②」と述べている。西川洋一が「教義上の基本的な姿勢に対する共感にもついていたことが分かる」と指摘しているように、リースの改宗には科学と信仰をめぐる歴史観の問題が大きく関わっていた。それは「兼ねて生涯の事業にしようと企てた本国の歴史を書くことは、どうも神話と歴史との限界をはつきりさせずには手が著けられない」と「かのやうに」(『中央公論』二七一一、明治四五年一月)で述べ、「鈍一下」(『中央公論』二八八八、大正二年七月)で「矢張企てた著述に手を着けないで」いる秀磨が「本国の歴史」を書くことを巡って抱えていた悩みでもあった。日本近代国家成立の根柢は、「まさかお父う様だつて、草昧の世に一国民の造つた神話を、その儘歴史だと信じてはゐられまい」と秀磨が認識しているように、神話を歴史と見なすことで成り立っていた。しかし、実証的な歴史学の下では「その儘歴史」と見なすわけにはいかない。それが近代日本の抱えていた歪みの一つである。

鷗外は、レッスングの宗教理解を巡って普及福音教会と接点を持っていた^③。その媒介となつたのは、普及福音教会牧師赤司繁太郎である。秀磨ものを書き上げた鷗外が、大正期以降歴史小説・史伝に向かつていくことから、鷗外とリースという異なる立場の二人が普及福音教会に関心を持つことには、共通する歴史を巡る問題意識があったのではない

かと推測される。とするならば、普及福音教会を中心に明治期のキリスト教について考えることは、近代史学がやがて行き当たることになる神話と歴史の問題を考えることにつながるのではないか。そのような視座は、「かのやうに」をはじめとする秀磨ものを論じる上でも有効であると考えられる。

以下、まずはリースの歴史意識がどのようなものだったのか踏まえ、鷗外とリースの歴史意識を繋ぐ接点として赤司繁太郎に着目する。次に、普及福音教会の自由基督教を手がかりに、秀磨ものにドイツ由来のプロテスタント神学の知見が散りばめられていることを確認する。先取りしていえば、秀磨もの、特に「鈍一下」は、ドイツの「新教神学」の意義を同時代で体験した秀磨がプロテスタント神学の論理を武器として、神話の上に成り立つ日本近代の歪みに対抗しようとした物語として読むことができる。そのことを踏まえ、最後に秀磨がキリスト教徒である「H君」を礼讃することの意味を考えてみたい。

一、「ゾール・オリエンス」会

リースは、日本のアカデミズム史学の基礎を確立した人物として知られる。帝国大学教授として採用以降、帝国大学史学科の開設に始まり、明治二二年の史学会創設、同年二月『史学会雑誌』(明治二五年より『史学雑誌』)刊行と、日本の歴史学を巡る環境は急速に整えられていった。

普及福音教会と森鷗外「槌一下」

村上祐紀

要旨

本稿は、普及福音教会を通して明治期日本に伝えられたドイツ・プロテスタント神学に対する森鷗外及び同時代の関心内容を検討し、森鷗外「槌一下」に対して新たな読みを試みたものである。「槌一下」を第四作目とする「五条秀麿もの」には、世紀末ドイツを体験した青年として造型された五条秀麿という華族の子息の思考過程が描かれている。歴史を描くことに對して秀麿が持つ「神話と歴史との限界をはつきりさせずには手が著けられない」という認識は、同時代に広く共有されているものであった。普及福音教会は批評学的な立場に基づいており、科学と信仰の問題に合理的な解釈を与え得る可能性を持っていた。作中で秀麿はプロテスタント神学に對する正確な認識を持っており、そうした状況を普及福音教会に改宗したお雇い外国人ルートヴィヒ・リース、普及福音教会牧師であり、神話研究やレッシングへの関心から鷗外と交わりを持った赤司繁太郎の認識を手掛かりに、秀麿の停滞した立場について論じた。そのうえで、「槌一下」におけるキリスト教者日君への礼讃は、現実に行動し続ける日君の宗教家としての行為そのものに向けられていると解釈できることを示した。

キーワード：森鷗外、ドイツ、プロテスタント神学、赤司繁太郎、普及福音

教会

はじめに

一九〇一年一月一日、ルートヴィヒ・リースが「福音派キリスト教に改宗」した。このことは母国にいる師ハンス・デルブリュックに書簡にて伝えられた。ここで言う「福音派キリスト教」とは、独逸普及福音教会の伝道した「自由基督教」を指す。

一八八七年に御雇外国人として来日したリースは、プロイセン国のドイッチュクローネに製造家兼卸売業の家の第五子として生まれた。ユダヤ人の家系であったことがしばしば言及されるが、リースがそうであったように、ユダヤ系知識人がプロテスタントに改宗することは欧州では特段珍しいことではない。しかし本論では、そのありきたりともいえる一人の欧州人の改宗が、極東の知識人の抱えていた、ひいては日本近代

にはまれていた微妙な屈折と関わっていたことを論じてみたい。日本に「福音派キリスト教」を持ち込み、リースと交流を持っていた

執筆者および専門分野の紹介（目次掲載順）

三木 健詞（み き・けんじ）	政 経 学 部 教 授	歴史教育，社会科教育
渡辺 勉（わたなべ・つとむ）	外 国 語 学 部 教 授	言語学，英語音声学
小野寺美智子（おのでら・みちこ）	政 経 学 部 教 授	認知言語学，日本語教育
松本 旬子（まつもと・じゅんこ）	商 学 部 准 教 授	スペイン語教育，スペイン語音声学
大森 裕二（おおもり・ゆうじ）	工 学 部 教 授	アメリカ演劇，比較文学
村上 祐紀（むらかみ・ゆき）	政 経 学 部 准 教 授	近代日本文学，日本史学史
米重 修一（よねしげ・しゅういち）	工 学 部 准 教 授	運動方法学，コーチ学
中雄 勇人（なかお・はやと）	群 馬 大 学 教 育 学 部 保健体育講座准教授	運動学，体育学
保坂 芳男（ほさか・よしお）	外 国 語 学 部 教 授	英語教育史，英語教育

表紙ロゴ『拓殖大学論集』は，西東書房，二玄社のご協力をいただきました。
2社に感謝申し上げます。

- (1) 「拓」 次の2項目を合成
手偏 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.12の「持」より）
石 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.15）
- (2) 「殖」 西嶽華山廟碑（二玄社刊，p.90）
- (3) 「大」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.9）
- (4) 「學」 史晨後碑（二玄社刊，p.52）
- (5) 「論」 尹宙碑（西東書房刊，p.36）
- (6) 「集」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.11）

人文・自然・人間科学研究 第43号 ISSN 1344-6622（拓殖大学論集318）ISSN 0288-6650

2020年（令和2年）3月19日 印刷

2020年（令和2年）3月25日 発行

編 集 拓殖大学人文科学研究所編集委員会

編集委員 犬竹 正幸 海口 浩芳 長尾 素子 末延 俊生 関 良基 小林 敏宏
村上 祐紀 廣澤 明彦 永江 貴子 大森 裕二

発 行 者 拓殖大学人文科学研究所長 犬竹 正幸

発 行 所 拓殖大学人文科学研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4番14号

Tel. 03-3947-7595

印 刷 所 (株) 外為印刷

THE JOURNAL OF HUMANITIES AND SCIENCES

Number 43

March 2020

CONTENTS

Articles:

- Kenji MIKI Potential for “Culture” Learning on High School
World History (1)
- Tsutomu WATANABE On Futurate Expressions in English with
a Focus on their Description in Learner’s Grammars (23)
- Michiko ONODERA Grammatical Constraints on Metaphorical Expressions
— the Spray Paint Hypallage in Japanese — (49)
- Junko MATSUMOTO A Consideration of Spanish Vowel Duration
— Through an Analysis of Spanish Utterance and
the Use of a Long Sound Symbol in the Japanese
“katakana” Notation (65)
- Yuji OMORI Diligence and Dissipation:
A Critique of Capitalism in Eugene O’Neill’s
The Iceman Cometh (82)
- Yuki MURAKAMI General Evangelical Church and Ogai Mori “Tsui-ikka” (1)

Study Notes:

- Shuichi YONESHIGE
Hayato NAKAO Effects of cross-country training on running form (97)

Report:

- Yoshio HOSAKA English Education in Yamaguchi Middle School:
With a focus on Native English Teachers (103)

-
- Instructions to Authors (127)
-

Edited and Published by
INSTITUTE FOR RESEARCH IN THE HUMANITIES
TAKUSHOKU UNIVERSITY
Kohinata, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8585, JAPAN